

# 教育は いま

第11号

◆ これからの学校が目指す校内研究の考え方と進め方

◆ 仙台市小・中学校20年経験者教員への意識調査

仙台市教育センター

## は じ め に

平成5年度の開所以来、当センター四大事業の一角を占める調査研究事業につきましては、一貫して仙台市教育委員会の基本方針・重点施策に基づき、主として今日的教育課題にかかわるテーマを選び、仙台市立学校を視野においた教育活動の改善に具体的に役立つような研究を目指してまいりました。

平成15年度は2分野の調査研究委員会を設置し、取り組んでまいりましたが、ここに教育研究紀要Ⅰ『教育はいま』第11号として発刊の運びとなりました。いずれの研究も、教育現場において役立てていただくとともに、教育行政立案の資料にもなることを目指して推進してきたものです。

一つ目は、自己改革を目指す教師サポートプロジェクトⅢ「これからの学校が目指す校内研究の考え方と進め方」です。本市小・中学校の校内研究の現状とこれからの校内研究に対する研究主任と研究推進委員の意識を踏まえ、本市小・中学校の校内研究の改善と充実に資する方策を探ったものです。

二つ目は、「仙台市小・中学校20年経験者教員への意識調査」です。本市小・中学校20年経験者教員に、「10年経験者教員へのアドバイス」という形で意識調査を実施し、教員が資質力量の向上を図るための要因及び教員としての成長の過程を明らかにすることを目的としてまとめたものです。

また、今年度は、情報教育研究推進委員会による「確かな学力と豊かな心をはぐくむ情報教育の推進」に関する研究にも取り組みました。情報活用能力の育成とITを利用した「分かる授業」を目指した実践的な研究を四つのプロジェクトで推し進めてきたものです。『教育研究紀要Ⅱ（別冊）』として発刊いたしますので、教育研究紀要Ⅰ『教育はいま』と併せてご活用ください。

研究の成果を広く活用していただき、教育研究・実践にお役立てくだされば幸いです。

また、今年度も、調査研究の発表を当センターから全国の都道府県及び政令指定都市の教育研究所等に、衛星通信（エルネット）により配信し、広くご指導を賜る機会をもつことができました。これを励みに、研究の更なる充実を図ってまいりたいと考えております。

最後に、今年度の調査研究事業にご協力をいただきました委嘱研究員の方々、そして本事業にご支援くださった多くの方々に、心から感謝申し上げます。

平成16年3月

仙台市教育センター

所長 目黒 保伯

# 総 目 次

■ これからの学校が目指す校内研究の考え方と進め方・・・・・・・・・・ 7

■ 仙台市小・中学校 20 年経験者教員への意識調査・・・・・・・・・・ 53

## 自己改革を目指す仙台市の教師サポートプロジェクトⅢ

# これからの学校が目指す校内研究の考え方と進め方

### ■要 約

本研究は、本市小・中学校の校内研究の現状とこれからの校内研究に対する研究主任と研究推進委員の意識を踏まえ、本市小・中学校の校内研究の改善と充実に資する方策を探るものである。校内研究の現状とこれからの校内研究に対する研究主任と研究推進委員の意識を探るために、質問紙調査を実施した。研究主任と研究推進委員の意識を踏まえ、これからの学校が目指す校内研究の考え方と進め方の具体例を提案することができた。

### ■キーワード

☐教育経営

☐研究主任

☐小学校校内研究

☐研究推進委員

☐中学校校内研究

☐これからの校内研究



## 目 次

|                                |    |
|--------------------------------|----|
| I 主題設定の理由                      | 7  |
| II 研究の基本的な考え方                  | 7  |
| III 研究の目的                      | 8  |
| IV 調査の概要                       | 8  |
| 1 調査の目的                        |    |
| 2 調査内容                         |    |
| 3 調査対象                         |    |
| 4 調査数                          |    |
| 5 調査実施期間                       |    |
| 6 調査方法                         |    |
| 7 調査の結果                        |    |
| V 校内研究の改善と充実のための視点             | 29 |
| VI これからの学校が目指す校内研究の考え方と進め方の具体例 | 30 |
| 1 教師個々の能力と個性が発揮できる校内研究         |    |
| 2 教師同士の学び合いを大切にする校内研究          |    |
| 3 成果と課題を共有し合う校内研究              |    |
| 4 子どもの変容の把握を大切にする校内研究          |    |
| 5 保護者や地域の方々と連携を図る校内研究          |    |
| 6 学校の主体性を生かし、校外のパートナーと連携を図るために |    |
| VII おわりに                       | 50 |

## I 主題設定の理由

### ■1 これからの学校づくり

教育改革の一環として、今、「特色ある学校づくり」が、これからの学校づくりの基本方向として提唱されている。

各学校には、「特色ある学校づくり」の実現に向け、児童生徒や地域の実態を踏まえた特色ある教育課程の編成・実施・評価が求められている。そのためには、各学校において、教師一人一人が学校の教育目標を十分に理解し、自校の教育課程を編成・実施・評価する取組を組織として推進することが重要である。

これまで、各学校では、校内研究を通して、自校の学校教育目標の具現化を目指し、教育実践を積み重ねてきた。自校の論理をもって教育課程を編成し、着実に実践に移すことが期待されている今、学校教育目標の具現化を目指し、教育実践を積み重ねてきた校内研究の果たすべき役割は、これからますます重要になってくるものと考ええる。

### ■2 「教えるプロ」である教師に求められる資質能力

教師の職務から必然的に求められる資質能力として、児童生徒に対する教育的愛情や教育者としての使命感、人間の成長・発達についての深い理解、教科指導や生徒指導等のための知識・技能・態度等があげられる。これらは、教師に共通に求められる基礎的・基本的な資質能力である。

「開かれた学校づくり」や「特色ある学校づくり」など、「これからの学校づくり」が進む中、外部の人的資源を活用するための対人交渉能力、教育課程を編成する際に必要なカリキュラム創造力など、教師に新たな資質能力が求められている。

これまで、これからも、各学校では、教師の学びの場である校内研究を通じて、「教えるプロである」教師に求められる資質能力を高めるための不断の努力と着実な教育実践を積み重ねることが不可欠であると考ええる。

### ■3 これからの学校が目指す校内研究

これまで、各学校は、校内研究を通して、学校教育目標の具現化を目指したり、教師の職務から必然的に

求められる資質能力を高めたりするための取組を積み重ねてきた。

「これからの学校づくり」が進んでいる今、各学校には、学校教育目標の具現化を目指し、教師としての基礎的・基本的な資質能力を高めるための取組を積み重ねる一方、教師に新たに求められる資質能力を向上させるための取組も喫緊の課題になると考える。「教えるプロ」である教師の資質能力を高める上で、校内研究の果たすべき役割がますます重要視されている。各学校には、校内研究の改善と充実を図りながら「確かな歩みを続けること」が期待される。

以上のことを踏まえ、本市小・中学校の校内研究の現状の課題と、これからの校内研究に対する研究主任と研究推進委員（以下、推進委員）の意識調査を通して、これからの学校が目指す校内研究の考え方と進め方を探りたいと考え、本主題を設定した。

## II 研究の基本的な考え方

### ■1 質問紙作成の視点

- (1) 「研究目的」について
- (2) 「研究内容」について
- (3) 「研究形態」について
- (4) 「研究方法」について

### ■2 研究の進め方

- (1) 質問紙作成の視点を踏まえ、小・中学校の研究主任と推進委員を対象にした質問紙調査を実施する。

#### ①小学校

ア校内研究の現状の課題を把握する。

イこれからの学校が目指す校内研究に対する研究主任と推進委員の意識を探る。

#### ②中学校

ア校内研究の現状の課題を把握する。

イこれからの学校が目指す校内研究に対する研究主任と推進委員の意識を探る。

- (2) 校内研究の現状における課題と、これからの学校が目指す校内研究に対する研究主任と推進委員の意識を踏まえ、これからの学校が目指す校内研究の考え方と進め方の具体例を提案する。

Ⅲ 研究の目的

本市小・中学校の校内研究の現状における課題とこれからの校内研究に対する研究主任と推進委員の意識調査を踏まえ、これからの学校が目指す校内研究の考え方と進め方を探る。

Ⅳ 調査の概要

■ 1 調査の目的

これからの学校が目指す校内研究の考え方と進め方を探るために、校内研究に対する本市小・中学校の研究主任と推進委員の意識を把握する。

■ 2 調査内容

(1) 校内研究の現状の課題 (自由記述)

- ①小学校研究主任
- ②小学校推進委員
- ③中学校研究主任
- ④中学校推進委員

(2) これからの学校が目指す校内研究 (多肢選択)

- ①小学校研究主任
- ②小学校推進委員
- ③中学校研究主任
- ④中学校推進委員

■ 3 調査対象

(1) 小学校 (122校)

各校の研究主任1名と推進委員3名。

(2) 中学校 (63校)

各校の研究主任1名と推進委員3名。

■ 4 調査数

表1 調査数及び抽出率

|     | 研究主任<br>(人) | 推進委員<br>(人) | 合計<br>(人) | 本務<br>教員数<br>(人) | 抽出率<br>(%) |
|-----|-------------|-------------|-----------|------------------|------------|
| 小学校 | 116         | 325         | 441       | 2,804            | 15.7       |
| 中学校 | 56          | 158         | 214       | 1,717            | 12.5       |

■ 5 調査実施期間

平成15年7月9日～7月31日

■ 6 調査方法

質問紙法

■ 7 調査の結果

(1) 校内研究の現状の課題 (自由記述回答を類型化)

①小学校研究主任

表2 課題に関する意見の件数

|      | 調査数 (人) | 記入者数 (人) | 件数 (件) |
|------|---------|----------|--------|
| 研究主任 | 122     | 116      | 335    |

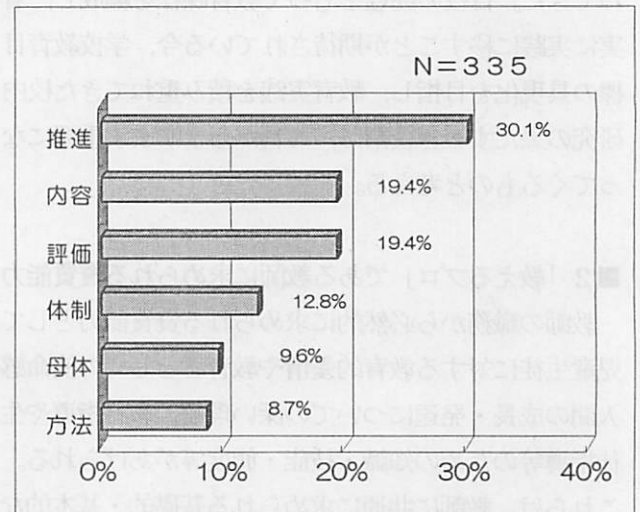


図1 課題に関する研究主任の意見の内訳

研究主任が抱えている課題として「研究推進上の課題」が全体の約30%を占め、「研究内容の課題」「校内研究の評価の課題」がそれぞれ約19%で続いた。

ア 研究推進上の課題

- ・時間不足

「校内研究会 (授業研究も含めて) の時間がなかなかとれない」など。

- ・共同で進めることの難しさ

「学校の研究課題を各自がどれだけ、自分の課題としてとらえていくか」など。

・意欲の差

「研究に対する意識に温度差がある」など。

・リーダーシップのとり方の難しさ

「コーディネーターとしての自分自身の役割が難しい」など。

・物的・人的援助の一層の充実

「総合的な学習の時間に取り組んでいる現在、環境整備（物的、人的、経済的）の充実をどのように図っていけばよいか」など。

・その他

「一人で授業を構築し、効果的な指導を行うための指導力を育てていくために、とにかく一人で指導案が書けるようにすることが課題と考えている」など。

・適切性

「基礎・基本の重視が叫ばれているが、現在の研究が、果たして、それに結び付いているかどうか不安である」など。

・評価・評定

「評価の方法、また、その評価をどのように指導に生かしていくか」など。

・指導方法の工夫

「算数科における効果的な少人数指導のあり方」など。

・教科間・学年間の関連

「総合を柱とする場合、低学年の研究内容をどうするか」など。

・カリキュラム開発

「真に児童の生きる力となるためのカリキュラムづくり」など。

・学力に関すること

「今年度は、総合に加え、教科における基礎となる学力の向上を目指しているが、なかなかそれに関する授業研究が進んでいない」など。

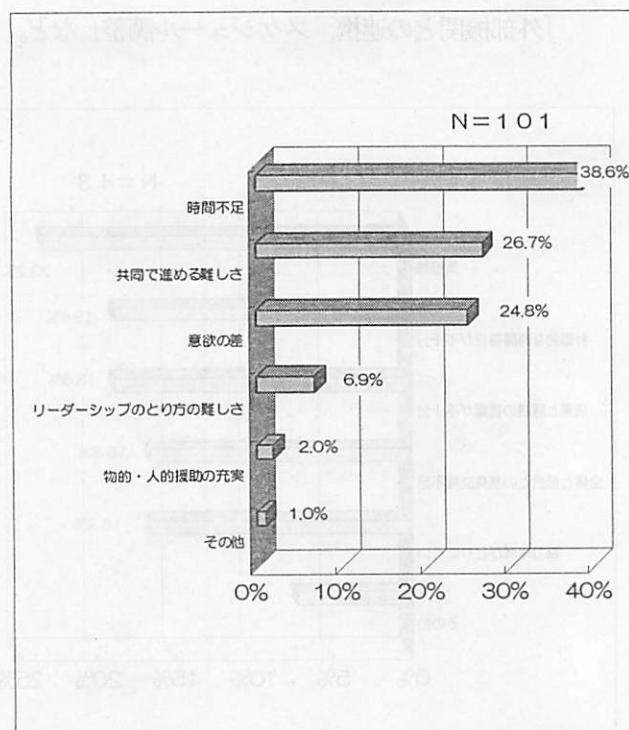


図2 研究推進上の課題

研究主任が回答した研究推進上の課題のうち「時間不足」が約39%を占め、「共同で進めることの難しさ」が約27%、「意欲の差」が約25%で続いた。

イ 研究内容に関する課題

・焦点化

「研究内容が十分に焦点化されていない」など。

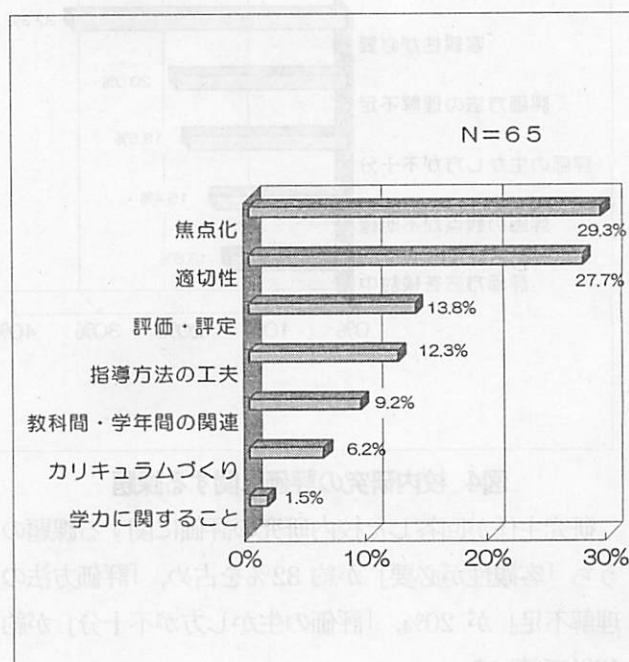


図3 研究内容に関する課題

研究主任が回答した課題のうち「焦点化」が約29%、「適切性」が約28%を占め、「評価・評定」が約14%、「指導方法の工夫」が約12%で続いた。



### 校内研究の評価に関する課題

- ・客観性が必要  
「外部からの評価がないので、甘くなりがち、客観的評価に欠ける」など。
- ・評価方法の理解不足  
「評価の仕方がよく分からない」など。
- ・評価の生かし方が不十分  
「評価の視点と評価結果を次年度に生かすための方策」など。
- ・評価の観点が不明確  
「評価の観点がはっきりしないところがある」など。
- ・評価方法を検討中  
「校内研究に関して、年度末に反省する場を設けているが、評価については実施していないので、今後検討していかなければならない」など。

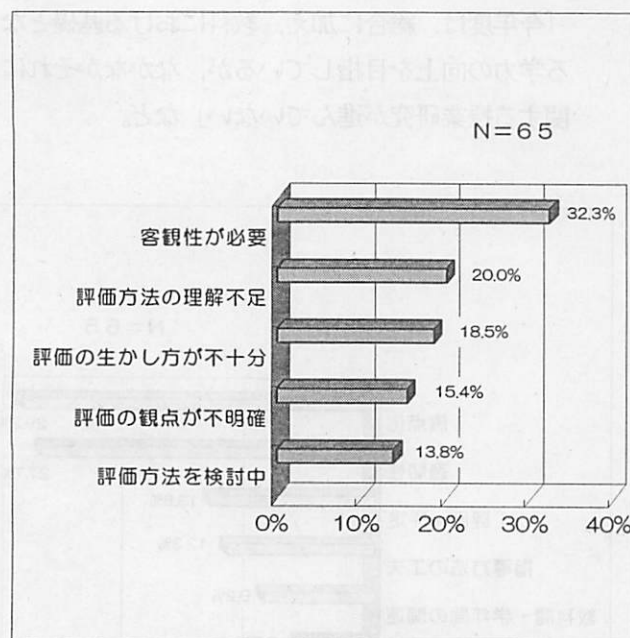


図4 校内研究の評価に関する課題

研究主任が回答した校内研究の評価に関する課題のうち「客観性が必要」が約 32%を占め、「評価方法の理解不足」が 20%、「評価の生かし方が不十分」が約 19%で続いた。

### 研究体制に関する課題

- ・負担感  
「単学級になりつつあり、スタッフが足りず個

人にかかる負担が大きい」など。

- ・計画的な時間確保が不十分  
「学年単位ではないため、研究のための時間をきちんと設定しなければならず、その調整が難しい」など。
- ・成果と課題の確認が不十分  
「学年部での研究が中心になっており、他学年部での具体的内容が明確にならない」など。
- ・全体と部会との意見交換不足  
「学年部と研究推進部（研究主任）との連携」など。
- ・協力体制がとりにくい  
「一人一人のモラルの向上を図るための方策」など。
- ・その他  
「外部機関との連携、スケジュール調整」など。

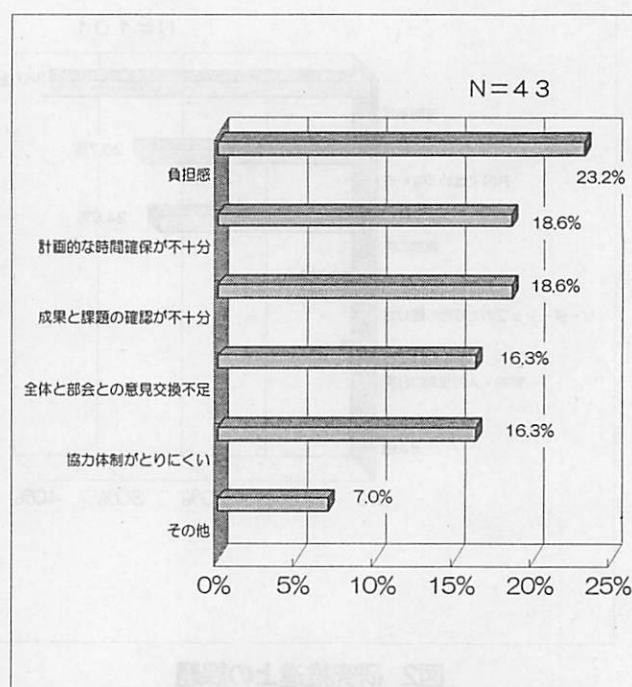


図5 研究体制に関する課題

研究主任が回答した校内研究の研究体制に関する課題のうち「負担感」が約 23%、「計画的な時間確保が不十分」「成果と課題の確認が不十分」が、ともに約 19%を占め、「全体と部会との意見交換不足」「協力体制がとりにくい」が、ともに約 16%で続いた。

## オ 研究母体に関する課題

### (ア) 学年部が研究母体であるとした研究主任の回答

#### 回答

#### ・意欲の差

「共同研究で学年部または学年を母体としているが、全校の共通理解を図り、多くの意見、考えをまとめていくこと」など。

#### ・連携不足

「学年部に意識が強すぎ、縦系列の視点が弱い」など。

#### ・研究の深まりが不十分

「学年で取り組む単元が多いので、学年単位での話し合いになりがちで、学年部単位になりにくい」など。

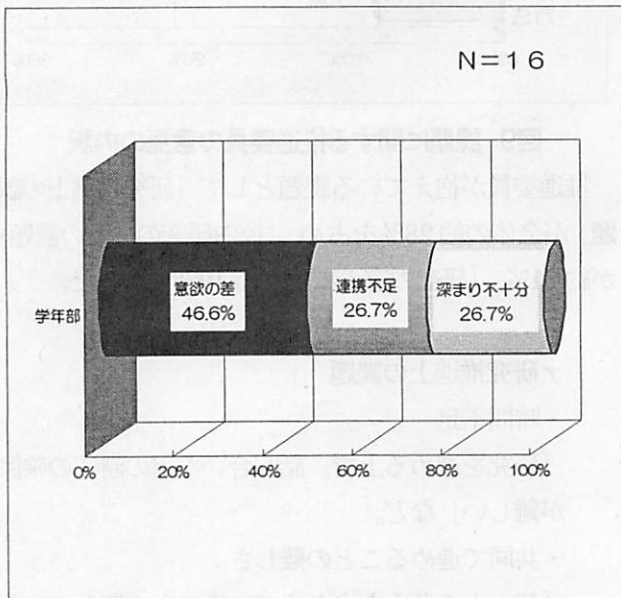


図6 学年部が研究母体に関する課題

研究母体が学年部であるとした研究主任の回答では、課題として「意欲の差」が約47%を占め、「連携不足」「研究の深まりが不十分」が、ともに約27%で続いた。

### (イ) 学年が研究母体であるとした研究主任の回答

#### ・連携不足

「学年研究であるため、学年での話し合いは決ま

るが、学年間での取組が見えづらい」など。

#### ・意欲の差

「授業日数の少ない今日、全校の研究授業、事後検討会をもちたがらない」など。

#### ・研究の深まりが不十分

「学年3名～4名を中心とした話し合いでは、研究の深まりが弱いと思われるので、積極的に学年部での話し合いが必要」など。

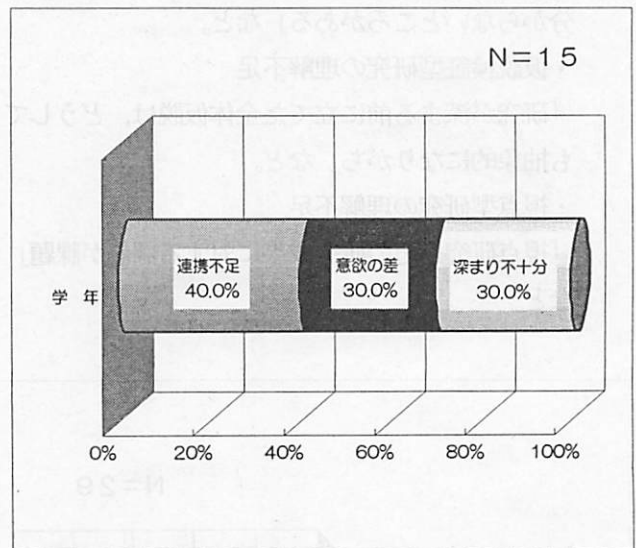


図7 学年が研究母体に関する課題

研究母体が学年であるとした研究主任の回答では、課題として「学年間の連携不足」が40%を占め、「意欲の差」「研究の深まりが不十分」が、ともに30%で続いた。

### (ウ) 個人研究の課題に関する研究主任の回答

#### ・研究の深まりが不十分

「今年度は個人研究2年目である。来年度に向けて、研究の深まりという点から、個人研究を続けるか、共同研究で進めるか検討中」

個人研究を実施しているとした小学校研究主任1名から、「研究の深まりが不十分」という課題が寄せられた。

### カ 研究方法に関する課題

- ・子どもの変容をとらえる方法が不十分

「実践研究後の評価が検証しにくいときがある」など。

- ・研究方法の共通理解不足

「研究の視点をどうとらえるか、職員間の共通理解が課題」など。

- ・研究方法の勉強不足

「研究方法に対して研修する機会が少なく、よく分からないところがある」など。

- ・仮説検証型研究の理解不足

「研究が深まる前に立てた全体仮説は、どうしても抽象的になりがち」など。

- ・視点型研究の理解不足

「視点研究とその研究成果に対する評価が課題」など。

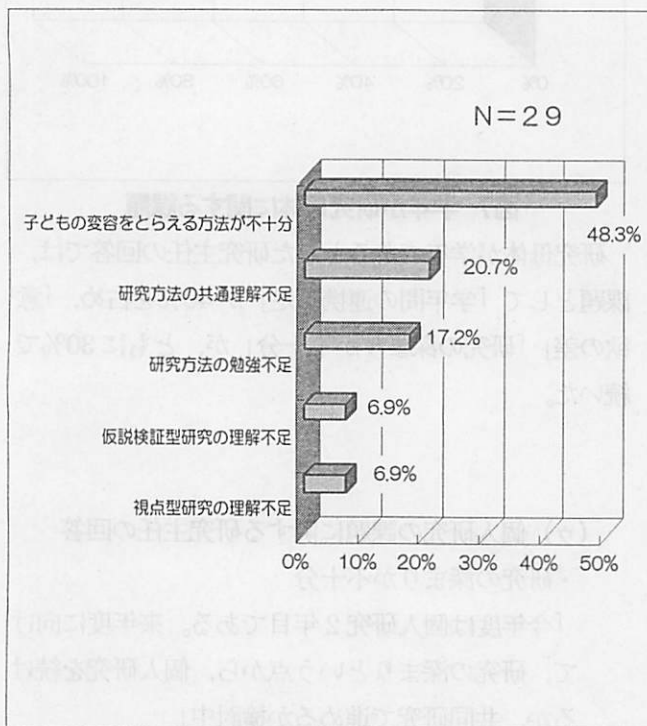


図8 研究方法に関する課題

研究主任が回答した校内研究の研究方法に関する課題のうち「子どもの変容をとらえる方法が不十分」が約48%を占め、「研究方法の共通理解不足」が約21%、「研究方法の勉強不足」が約17%で続いた。

### ②小学校推進委員

表3 課題に関する意見の件数

|      | 調査数 (人) | 記入者数 (人) | 件数 (件) |
|------|---------|----------|--------|
| 推進委員 | 366     | 325      | 679    |

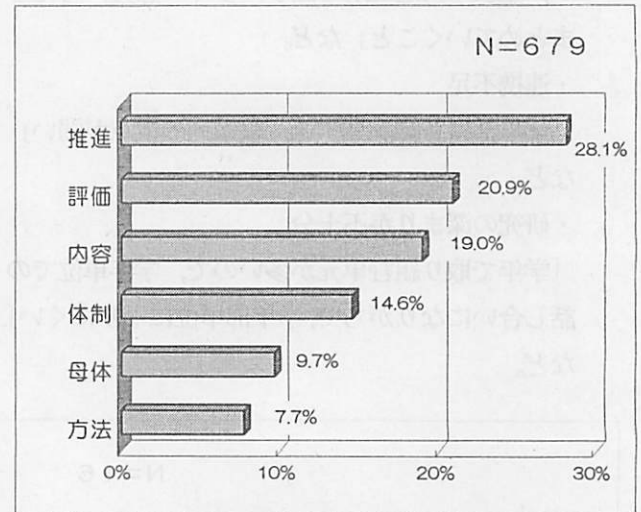


図9 課題に関する推進委員の意見の内訳

推進委員が抱えている課題として「研究推進上の課題」が全体の約28%を占め、「校内研究の評価の課題」が約21%、「研究内容の課題」が19%で続いた。

#### ア 研究推進上の課題

- ・時間不足

「研究を進める上で、話し合いなどの時間の確保が難しい」など。

- ・共同で進めることの難しさ

「個々人の考えをまとめていくことの難しさ」など。

- ・意欲の差

「教員の研究に対する問題意識や意欲を高めること」など。

- ・物的・人的援助の一層の充実

「必要な文献、講師等（費用の面も含めて）の援助が欲しい」など。

- ・リーダーシップのとり方の難しさ

「研究の中心になる人が、しっかりと計画を示すこと」など。



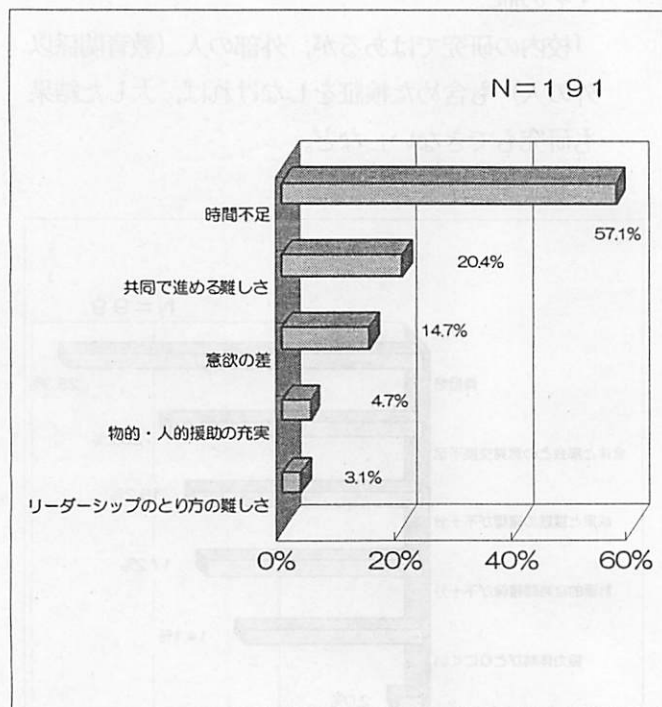


図10 研究推進上の課題

推進委員が回答した研究推進上の課題のうち「時間不足」が約57%を占め、「共同で進める難しさ」が約20%、「意欲の差」が約15%で続いた。

#### イ 校内研究の評価に関する課題

##### ・客観性が必要

「客観的な評価でなく、研究を行った自分たちの主観的な評価となっている」など。

##### ・評価方法の理解不足

「客観的な評価を行いたい、具体的にどのような方法がいいのか分からない」など。

##### ・評価の観点不明確

「評価の観点を分かり易く明確にすること」など。

##### ・評価の生かし方が不十分

「成果、課題について、ただ『御苦労さま』ではなく、個々や学校が向上するための指導や話し合いが少ない」など。

##### ・評価方法を検討中

「学校内でも、評価規準等の具体的な動きが始まっていないため、これから研究を通して深めていきたい」など。

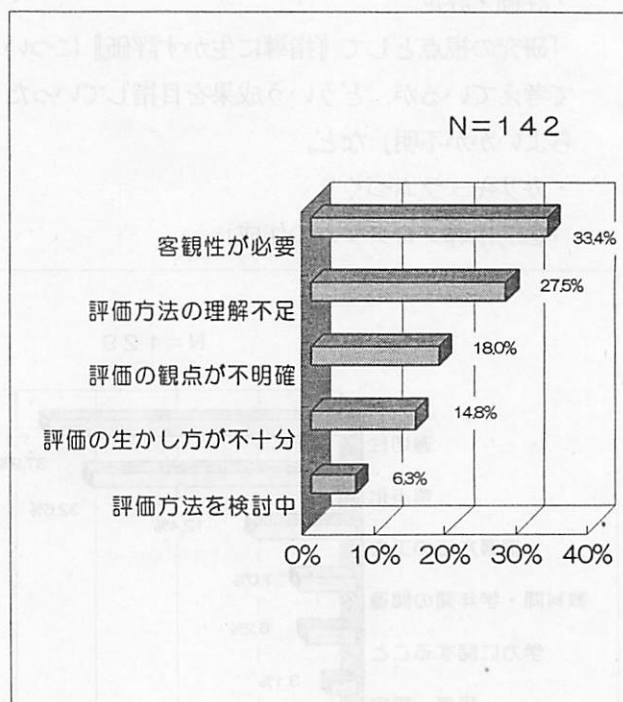


図11 校内研究の評価に関する課題

推進委員が回答した校内研究の評価に関する課題のうち「客観性が必要」が約33%、「評価方法の理解不足」が約28%を占め、「評価の観点不明確」が18%で続いた。

#### ウ 研究内容に関する課題

##### ・適切性

「児童の実態、学校教育目標の具現化等、研究内容として取り上げたい内容がたくさんあり、共通の意識をもって内容を選びにくい」など。

##### ・焦点化

「職員の問題意識をうまくまとめながら、テーマを決定していくことが難しい」など。

##### ・指導方法の工夫

「課題をもち、進んで課題解決させるための手だてをどのようにしてよいか」など。

##### ・教科間・学年間の連携

「共同研究の場合、それぞれ取り上げたい内容が違うので、それを求めていくのが難しい」など。

##### ・学力に関すること

「確かな力、基礎・基本を身に付けさせるための指導をどのようにするべきか」など。



### ・評価・評定

「研究の視点として『指導に生かす評価』について考えているが、どういう成果を目指していったらよいか不明」など。

### ・カリキュラムづくり

「個別指導プログラムの作成」

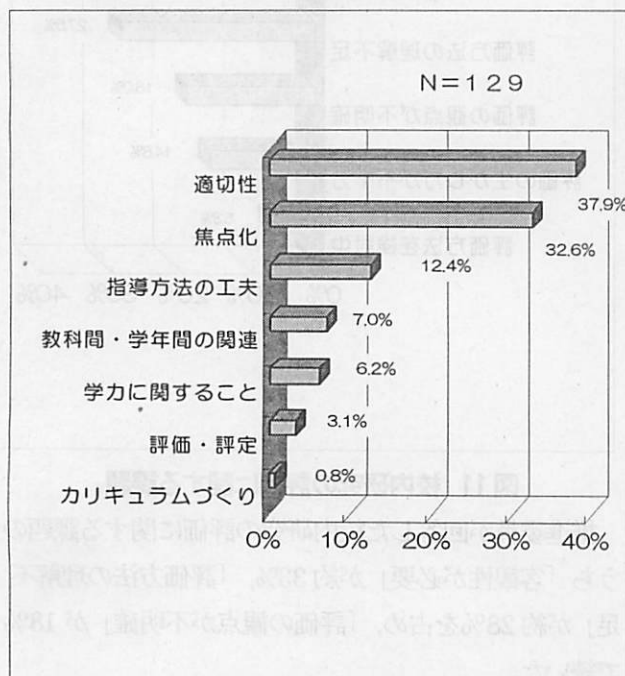


図12 研究内容に関する課題

推進委員が回答した課題のうち「適切性」が約38%を占め、「焦点化」が約33%で続いた。

### エ 研究体制に関する課題

#### ・負担感

「一部の人のみ負担がかからないような研究体制のあり方」など。

#### ・全体と部会との意見交換不足

「研究推進委員がパイプ役となり、各学年部の研究が全体としてまとまるかどうか」など。

#### ・成果と課題の確認が不十分

「今年度は共同研究であるが、研究成果の共有という点で難がある」など。

#### ・計画的な時間確保が不十分

「学年部が研究の主体になっているが、話し合いの時間がなかなかとれない」など。

#### ・協力体制がとりにくい

「研究に向かう意識がそろわない」など。

### ・その他

「校内の研究ではあるが、外部の人（教育関係以外の人）も含めた検証をしなければ、大した結果も研究もできない」など。

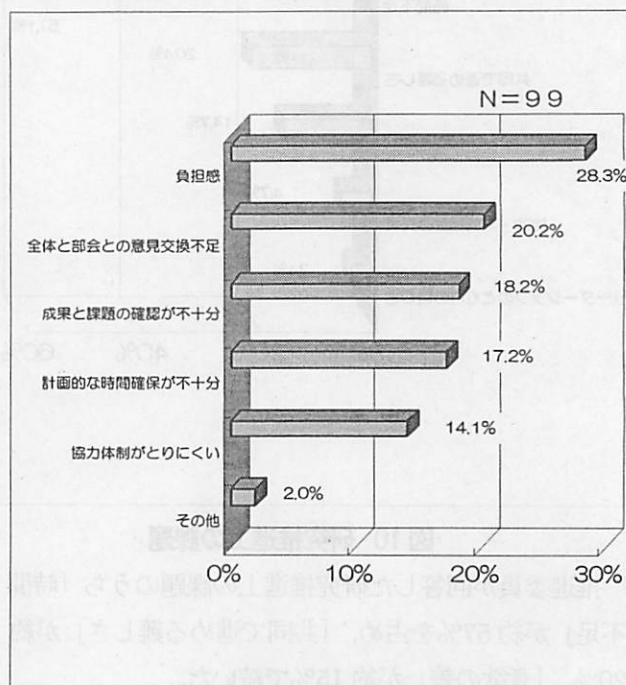


図13 研究体制に関する課題

推進委員が回答した課題のうち「負担感」が約28%を占め、「全体と部会との意見交換不足」が約20%、「成果と課題の確認が不十分」が約18%、「計画的な時間確保が不十分」が約17%で続いた。

### オ 研究母体に関する課題

#### (ア) 学年部が研究母体であるとした推進委員の回答

##### ・意欲の差

「研究授業学年と学年部内研究授業学年で温度差が見られる場合がある」など。

##### ・連携不足

「学年部にはなっているが、どうしても学年での研究になりがちである」など。

##### ・研究の深まりが不十分

「授業研究が学年部（2学年ずつ）なので、内容の話し合いや分担をじっくり深めるのが難しいことがあるかもしれない」など。

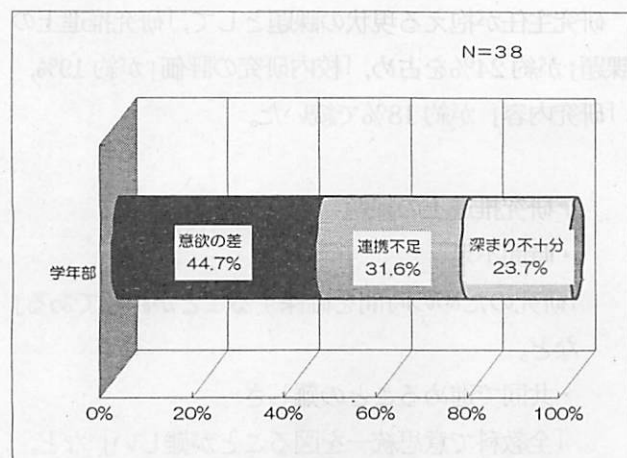


図14 学年部が研究母体に関する課題

研究母体が学年部であるとした推進委員の回答では、課題として「意欲の差」が約45%を占め、「連携不足」が約32%、「研究の深まりが不十分」が約24%で続いた。

(イ) 学年が研究母体であるとした推進委員の回答

・研究の深まりが不十分

「学年中心で計画し、実行しているが、全体としての深まりに欠けるときがある」など。

・連携不足

「学年の中での研究は充実するが、学年間のつながりがない」など。

・意欲の差

「本来の目的として、一部の教師や学級が対象となる研究ではないものと思うが、現状は全員が同じ意識レベルに達せず、一部に負担感が残る形になりつつあるように思う」など。

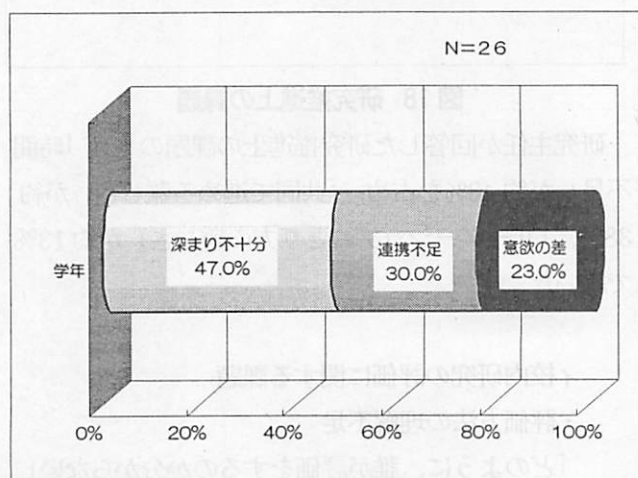


図15 学年が研究母体に関する課題

研究母体が学年の推進委員の回答では、課題として「研究の深まりが不十分」が47%を占め、「連携不足」が30%、「意欲の差」が23%で続いた。

(ウ) 個人研究の課題に関する推進委員の回答

・研究の深まりが不十分

「個人で取り組む場合、独り善がりや、やりっ放しになるようで、ステップアップが難しい」

「個人研究の場合、研究内容を深めていくことが難しい」

個人研究を実施しているとした小学校推進委員2名から、「研究の深まりが不十分」という課題が寄せられた。

カ 研究方法に関する課題

・子どもの変容をとらえる方法が不十分

「授業研究の成果と課題を明確にし、それを踏まえた上で、次の授業に生かしていくこと」など。

・研究方法の共通理解不足

「学年部で研究を進めながら、学年部で話し合う時間が十分にとれず、方法についての練り合いが不十分」など。

・研究方法の勉強不足

「どういう方法がよいのか、参考になる方法をたくさん知る必要がある」など。

・仮説検証型研究の理解不足

「仮説を立てて行う研究をしているが、果たして有効なのか実感できない」など。

・視点型研究の理解不足

「視点研究の形をとったが、視点を決定することが難しい」など。

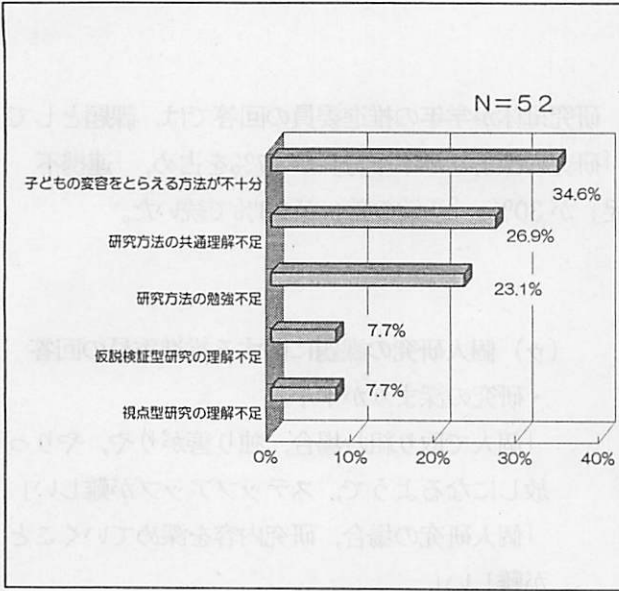


図 16 研究方法に関する課題

推進委員が回答した研究方法に関する課題のうち「子どもの変容をとらえる方法が不十分」が約 35%を占め、「研究方法の共通理解不足」が約 27%、「研究方法の勉強不足」が約 23%で続いた。

### ③中学校研究主任

表 4 課題に関する意見の件数

|      | 調査数 (人) | 記入者数 (人) | 件数 (件) |
|------|---------|----------|--------|
| 研究主任 | 63      | 56       | 165    |

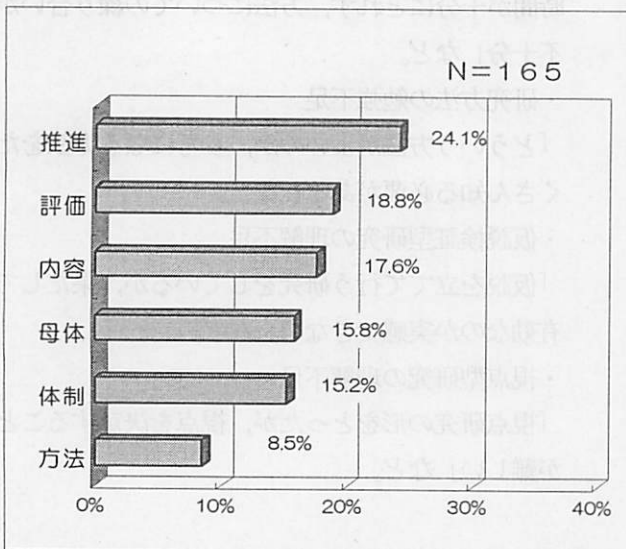


図 17 課題に関する研究主任の意見の内訳

研究主任が抱える現状の課題として、「研究推進上の課題」が約 24%を占め、「校内研究の評価」が約 19%、「研究内容」が約 18%で続いた。

#### ア研究推進上の課題

##### ・時間不足

「研究のための時間を確保することが課題である」など。

##### ・共同で進めることの難しさ

「全教科で意思統一を図ることが難しい」など。

##### ・リーダーシップのとり方の難しさ

「個人の意識や志向に差があり、全体をまとめていく力量不足を痛感させられる毎日である」など。

##### ・意欲の差

「研究推進のためには、教員の意識改革を一段と促す必要があるが、意識の低い教員がいた場合にどのように指導・支援すればよいか」など。

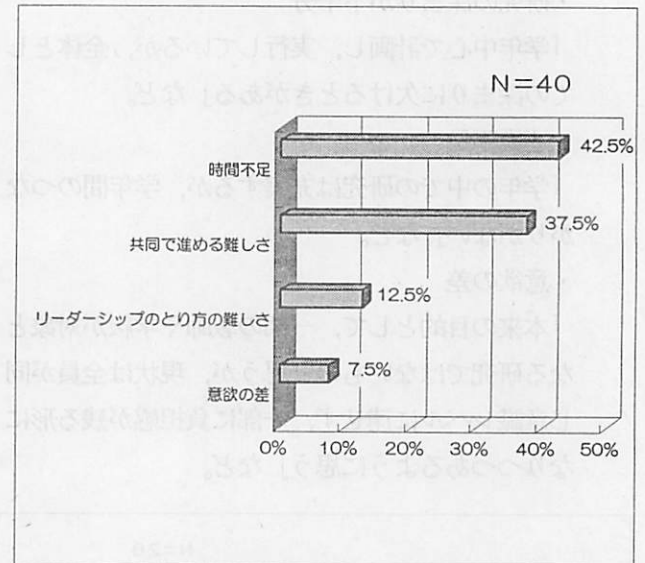


図 18 研究推進上の課題

研究主任が回答した研究推進上の課題のうち「時間不足」が約 43%を占め、「共同で進める難しさ」が約 38%、「リーダーシップのとり方の難しさ」が約 13%で続いた。

#### イ校内研究の評価に関する課題

##### ・評価方法の理解不足

「どのように、誰が評価をするのか分からない」など。



- ・客観性が必要  
「校外からの意見を伺う機会や場が少ないので考えてい」など。
- ・評価の観点が不明確  
「何点が評価する項目を考えたい」など。
- ・評価方法を検討中  
「まだやっていないが、先生方にアンケートをとる予定」など。
- ・評価の生かし方が不十分  
「評価項目や状況を実践にどう結び付けるか」など。

- ・焦点化  
「内容の焦点化、あれもこれもというのではなく、絞り込んでいきたい」など。
- ・評価・評定  
「各教科の指導と評価の一体化について、学校全体として取り組むことが必要である」など。
- ・学力に関すること  
「学力という概念をどのように焦点化していったらよいか不明な点がある」など。
- ・教科の独自性  
「教科ごとの研究になってしまっているの、共有することが難しい」など。
- ・他領域との関連  
「総合的な学習の時間と教科学習との関連を深めた指導体制・計画を確立すること」など。
- ・指導方法の工夫  
「指導と評価の一体化を目指した授業改善」など。

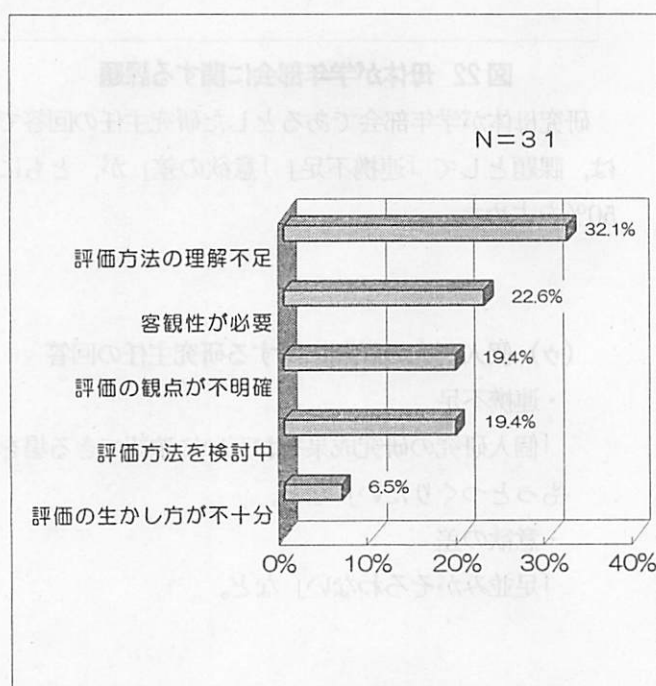


図19 校内研究の評価に関する課題

研究主任が回答した校内研究の評価に関する課題のうち「評価方法の理解不足」が約32%を占め、「客観性が必要」が約23%、「評価の観点が不明確」「評価方法を検討中」が、ともに約19%で続いた。

#### ウ 研究内容に関する課題

- ・適切性  
「長年同じような研究内容なので、見直しが必要かどうか」など。

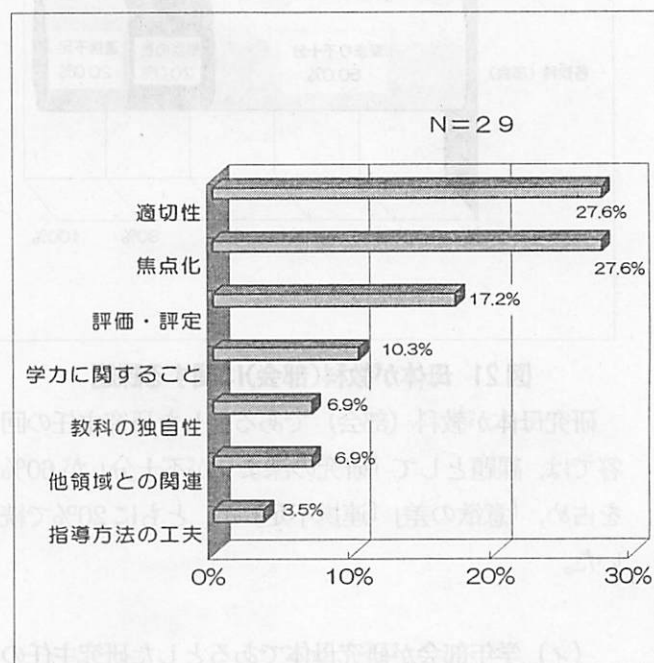


図20 研究内容に関する課題

研究主任が回答した研究内容に関する課題のうち「適切性」「焦点化」が、ともに約28%を占め、「評価・評定」が約17%、「学力に関すること」が約10%で続いた。

## エ 研究母体に関する課題

(ア) 各教科(部会)が研究母体であるとした研究主任の回答

- ・研究の深まりが不十分

「各教科で研究を行っているが、一人の教科部会があり、研究が深まらない場合がある」など。

- ・意欲の差

「教科によって温度差がある」など。

- ・連携不足

「全教科で取組意識の向上を図っているが学力を中心に据えたときに、実技教科においては結び付けることが難しい場合がある」など。

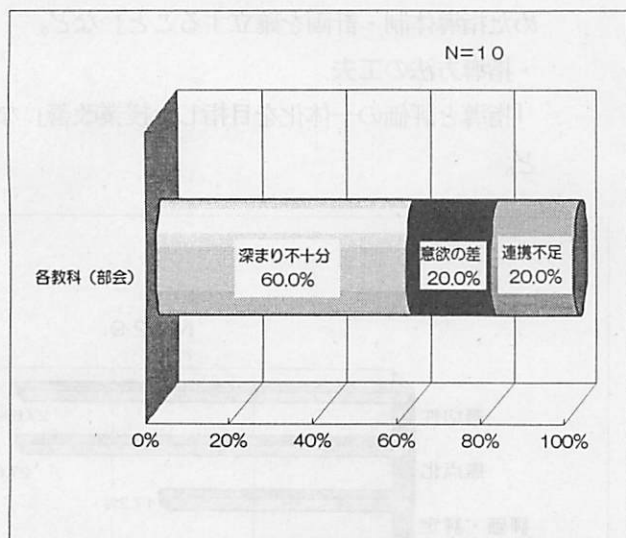


図 21 母体が教科(部会)に関する課題

研究母体が教科(部会)であるとした研究主任の回答では、課題として「研究の深まりが不十分」が60%を占め、「意欲の差」「連携不足」が、ともに20%で続いた。

(イ) 学年部会が研究母体であるとした研究主任の回答

- ・意欲の差

「実践に対する意欲が学年によって違うので足並みがそろわない」など。

- ・連携不足

「総合的な学習の時間を学年ごとに進めていく部

分が多いため他学年の活動が見えにくい」など。

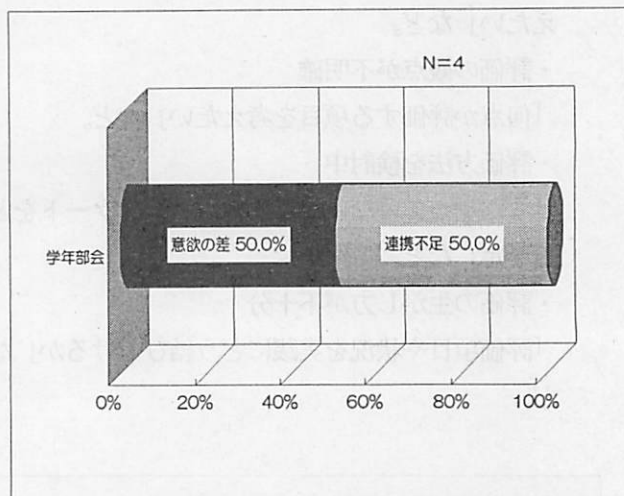


図 22 母体が学年部会に関する課題

研究母体が学年部会であるとした研究主任の回答では、課題として「連携不足」「意欲の差」が、ともに50%を占めた。

(ウ) 個人研究の課題に関する研究主任の回答

- ・連携不足

「個人研究の研究成果をお互いに確認できる場をもっとつくりたい」など。

- ・意欲の差

「足並みがそろわない」など。

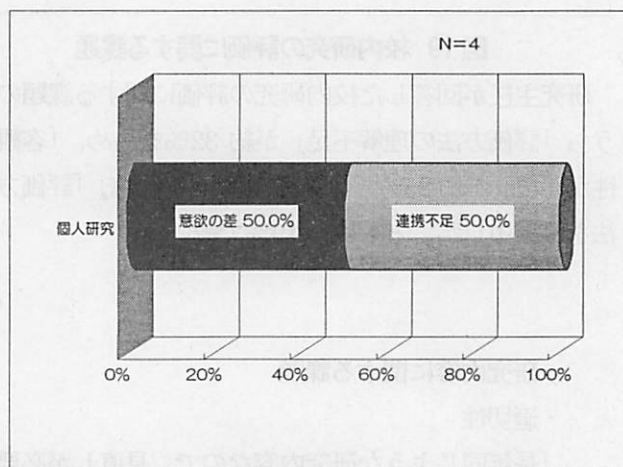


図 23 個人研究に関する課題



### (エ) 研究母体全般に関する課題

#### ・意欲の差

「共同研究の場合、十分に話し合いをする時間がなかなかとれず、個々の研究に対する意識の差が大きい」など。

#### ・連携不足

「プロジェクト体制で進めているが、独り善がりになっているのではないかと不安である」など。

#### ・研究の深まりが不十分

「ワンパターンになりがちで深まらない」など。

#### ・共同と個人の組み合わせの難しさ

「共同研究と個人研究（得意分野）をバランスよく取り入れていくこと」など。

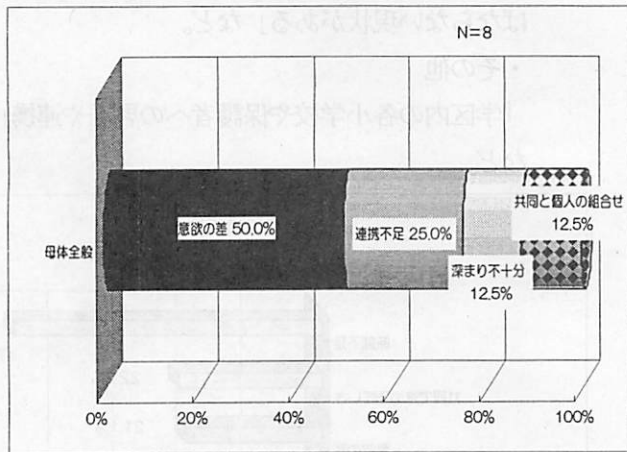


図24 研究母体全般に関する課題

研究主任の回答では、研究母体全般に関する課題として「意欲の差」が50%を占め、「連携不足」が25%で続いた。

### オ 研究体制に関する課題

#### ・負担感

「研究主任に負担が掛かり、全校体制に乏しい」など。

#### ・協力体制がとりにくい

「生徒指導には全校体制で取り組むのが当たり前ということに対し、いざ研究となると研究推進委員任せという傾向が強い」など。

#### ・計画的な時間確保が不十分

「多忙すぎる、総合的な学習の時間や選択教科の時間、学ぼうとする意欲を育てること、部活動指

導などで話し合うことすらままならない」など。

#### ・成果と課題の確認が不十分

「個人の研さんも大切だが、共通のテーマをみんなで考え、よりよいものにして実践し、成果と課題を次の研究に生かしていくことが必要」など。

#### ・その他

「指導助言者不足」など。

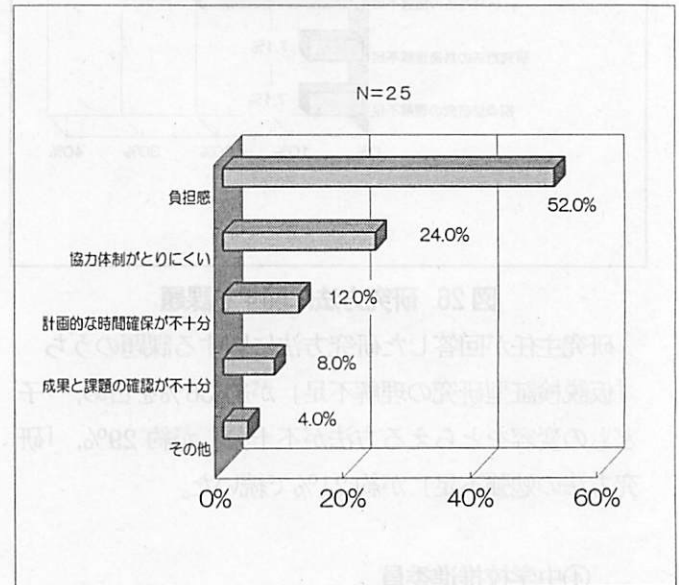


図25 研究体制に関する課題

研究主任が回答した研究体制に関する課題のうち「負担感」が52%を占め、「協力体制がとりにくい」が24%で続いた。

### カ 研究方法に関する課題

#### ・仮説検証型研究の理解不足

「具体的な仮説を設定し、研究を焦点化して進めていく必要がある」など。

#### ・子どもの変容をとらえる方法が不十分

「仮説を検証する方法がよく分からないので授業で検証しているが、どのようにするのがよいのか」など。

#### ・研究方法の勉強不足

「研究方法をどのように工夫していけばよいのか」など。

#### ・研究方法の共通理解不足

「年度初めに研究の進め方などを確認して、全体で取り組んでいきたい」など。

・視点型研究の理解不足

「研究方法を具体化し明確にしていきたい」など。

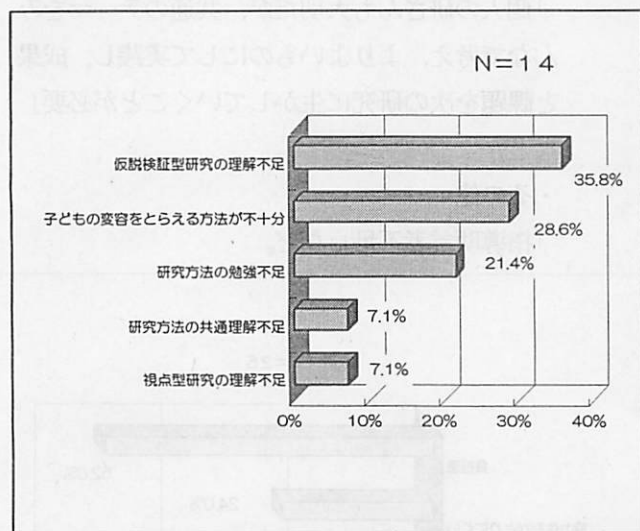


図26 研究方法に関する課題

研究主任が回答した研究方法に関する課題のうち「仮説検証型研究の理解不足」が約36%を占め、「子どもの変容をとらえる方法が不十分」が約29%、「研究方法の勉強不足」が約21%で続いた。

④中学校推進委員

表5 課題に関する意見の件数

|      | 調査数 (人) | 記入者数 (人) | 件数  |
|------|---------|----------|-----|
| 推進委員 | 189     | 158      | 344 |

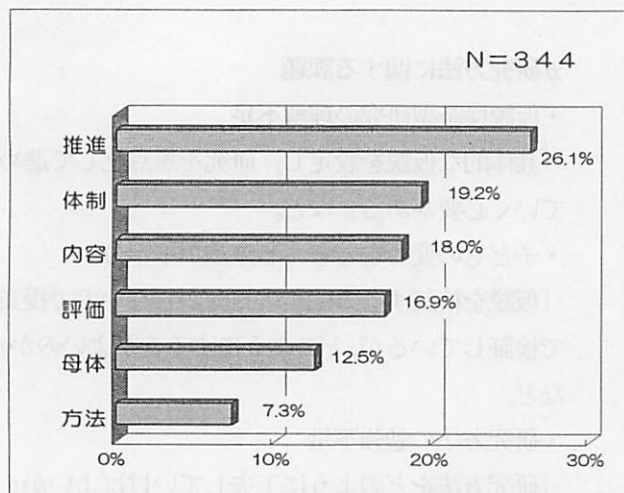


図27 課題に関する推進委員の意見の内訳

推進委員が抱えている課題として、「研究推進上の課題」が約26%を占め、「研究体制の課題」が約19%、「研究内容の課題」が18%で続いた。

ア研究推進上の課題

・時間不足

「部活動や生徒指導に忙しく、研究のための時間の確保ができない」など。

・共同で進めることの難しさ

「全職員の共通理解が必要である」など。

・意欲の差

「校内研究を必要としている人があまりにも少なすぎる」など。

・物的・人的援助の一層の充実

「タイムリーに講師を呼べるような状況が欲しい」など。

・リーダーシップのとり方の難しさ

「研究主任一人で案を練って一人で進めなければならない現状がある」など。

・その他

「学区内の各小学校や保護者への啓発や連携」など。

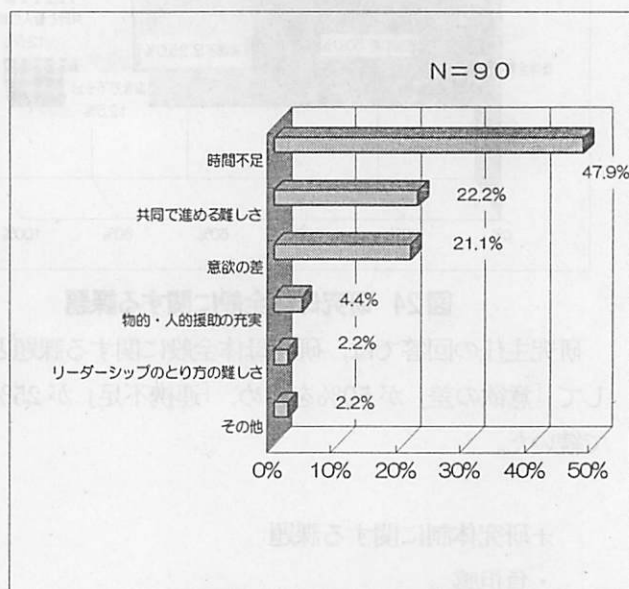


図28 研究推進上の課題

推進委員が回答した研究推進上の課題のうち「時間不足」が約48%を占め、「共同で進める難しさ」が約22%、「意欲の差」が約21%で続いた。

イ研究体制に関する課題

・負担感

「教科担任が一人という教科では、その先生に大きな負担が掛かっている」など。

- ・計画的な時間確保が不十分  
「研究時間の計画的な確保（校内における研修日の定例化）」など。
- ・成果と課題の確認が不十分  
「研究主任や推進委員が毎年変わるので引き継ぎをしっかりと、これまでの流れを把握する必要がある」など。
- ・協力体制がとりにくい  
「校内研究に無関心な教員がいて協力体制が整えられない」など。
- ・その他  
「教科ごとの研究となったときも学年のバックアップがあるといいと思う」

- ・指導方法の工夫  
「教師として最も基本的なことである担当教科の指導力や指導技術を高めるような研究ができていないこと」など。
- ・焦点化  
「研究内容が広すぎるので焦点化していく必要がある」など。
- ・教科の独自性  
「教科ごとの教育課題をいかに全教職員で共通課題として研究していくか、それぞれの教科での取組が違うため難しい」など。
- ・学力に関すること  
「各教科における基礎・基本の定義付け」など。
- ・他領域との関連  
「他の様々な領域と関わらせて計画を立てることが難しいと感じる」など。
- ・その他  
「アンケートはよく行うが、アンケートの分析を間違えていることが多い」

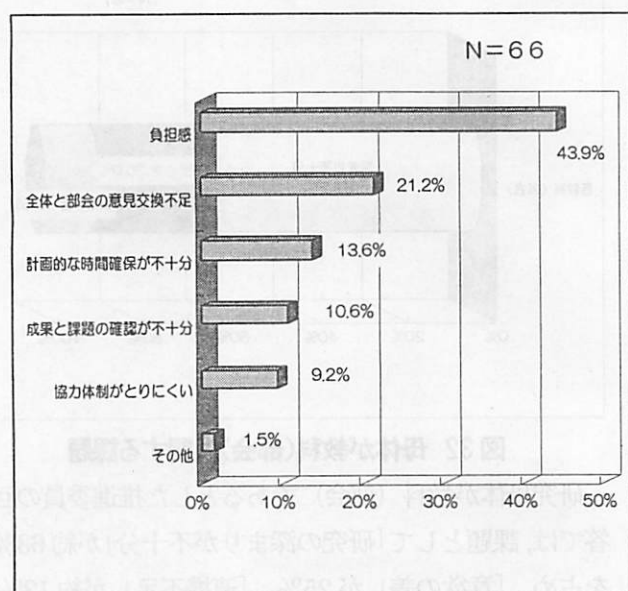


図29 研究体制に関する課題

推進委員が回答した研究体制に関する課題のうち「負担感」が約44%を占め、「全体と部会の意見交換不足」が約21%、「計画的な時間確保が不十分」が約14%で続いた。

#### ウ 研究内容に関する課題

- ・適切性  
「必要感を感じる研究内容かどうか、どの教員も取り組める研究内容かどうか」など。
- ・評価・評定  
「評価に関する情報公開への対応」など。

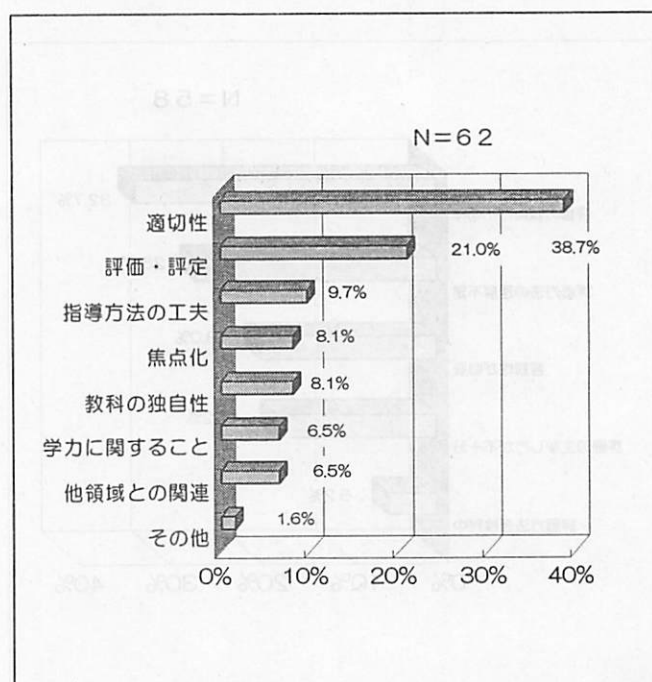


図30 研究内容に関する課題

推進委員が回答した研究内容に関する課題のうち「適切性」が約39%を占め、「評価・評定」が21%、「指導方法の工夫」が約10%で続いた。



### エ 校内研究の評価に関する課題

- ・評価の観点が不明確  
「生徒の実態を共通理解して求める生徒像を描き、生徒の向上的変容をおさえること」など。
- ・評価方法の理解不足  
「評価方法について十分検討されていない」など。
- ・客観性が必要  
「やりっ放しで、その後の研究成果や実態調査など追跡がなされていないし、部内評価だけで部外評価がなされていないので、客観的な立場からの適切な評価が必要」など。
- ・評価の生かし方が不十分  
「マネジメントサイクルとして行われる評価は研究の成果を確認するとともに、次年度の計画を立てるための基礎資料にならなければならない」など。
- ・評価方法を検討中  
「今のところ未定なので、今後十分に話し合わなければいけない」など。

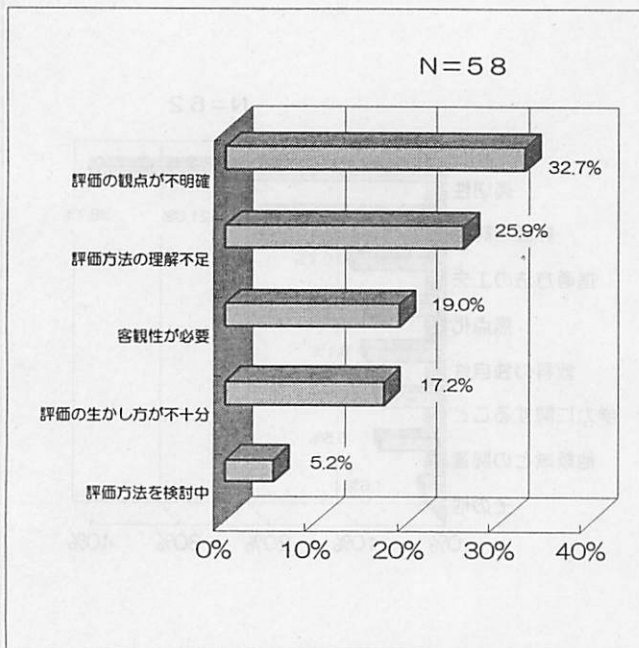


図31 校内研究の評価に関する課題

推進委員が回答した校内研究の評価に関する課題のうち「評価の観点が不明確」が約33%を占め、「評価方法の理解不足」が約26%、「客観性が必要」が19%で続いた。

### オ 研究母体に関する課題

- (ア) 各教科(部会)が研究母体であるとした推進委員の回答
- ・研究の深まりが不十分  
「教科で取り組むにしても、各学年1～2名程度で個人が中心となり、深まらない」など。
  - ・意欲の差  
「教科間の取組の足並みがそろわない」など。
  - ・連携不足  
「教科の壁があり、共同歩調がとりにくい」など。

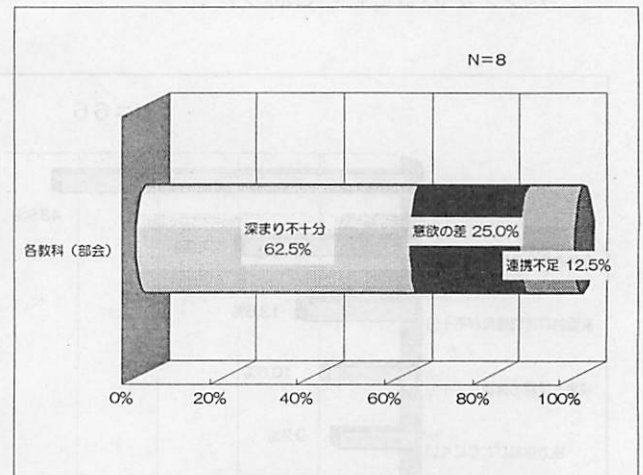


図32 母体が教科(部会)に関する課題

研究母体が教科(部会)であるとした推進委員の回答では、課題として「研究の深まりが不十分」が約63%を占め、「意欲の差」が25%、「連携不足」が約13%で続いた。

### (イ) 学年部会が研究母体であるとした推進委員の回答

- ・連携不足  
「学年ごとに推進しているが、縦のつながりも重要であり、その調整の仕方が課題」など。
- ・意欲の差  
「形態が学年部会に偏っていたので、他の形態も試み、意欲を向上させたい」など。
- ・研究の深まりが不十分  
「学級数も減ってきているので、学年の枠を越えて考えたい」など。



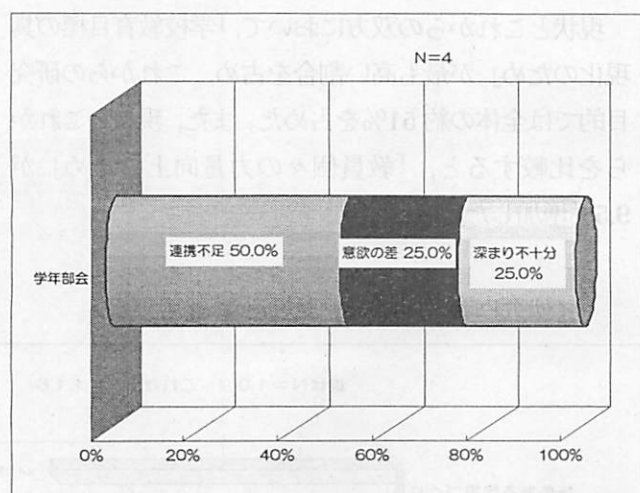


図 33 母体が学年部会に関する課題

研究母体が学年部会であるとした推進委員の回答では、課題として「連携不足」が 50%を占め、「研究の深まりが不十分」「意欲の差」が、ともに 25%で続いた。

#### (ウ) 個人研究の課題に関する推進委員の回答

##### ・連携不足

「さらに横のつながりや縦のつながりがあれば、互いに高め合える研究となるのではないか」

個人研究を実施している中学校推進委員 1 名から、「連携不足」という課題が寄せられた。

#### (エ) 研究母体全般に関する課題

##### ・意欲の差

「共同研究と個人研究を併用しているが、個人の方が取組の意識に差がある」

##### ・研究の深まりが不十分

「全体から個人へと研修を進めるべきで、個人研究の時間ととり方や内容についての深め方が不十分である」など。

##### ・連携不足

「個人と部会の研究を広げる（確認し合う）場

が設定できない」など。

##### ・その他

「研究主題や研究内容によって形態を変える柔軟性が必要である」など。

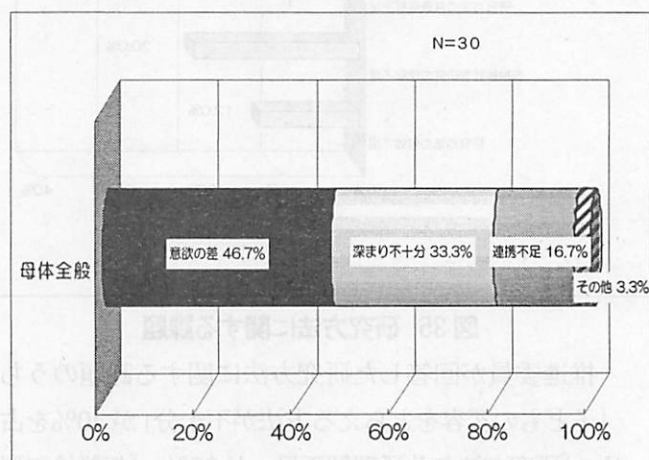


図 34 研究母体全般に関する課題

推進委員の回答では、研究母体全般に関する課題として「意欲の差」が約 47%を占め、「研究の深まりが不十分」が約 33%で続いた。

#### カ 研究方法に関する課題

##### ・子どもの変容をとらえる方法が不十分

「子どもの変容を測定する方法が分からないのが現状である」など。

##### ・研究方法の共通理解不足

「研究推進委員になっている教師の意識は高いが、すべての教師が方法を理解するのは難しい」など。

##### ・仮説検証型研究の理解不足

「仮説を検証する方法は次への広がり難しい」など。

##### ・研究方法の勉強不足

「研究なのか、実践報告なのか区別がついていないことが多いのが課題である」など。

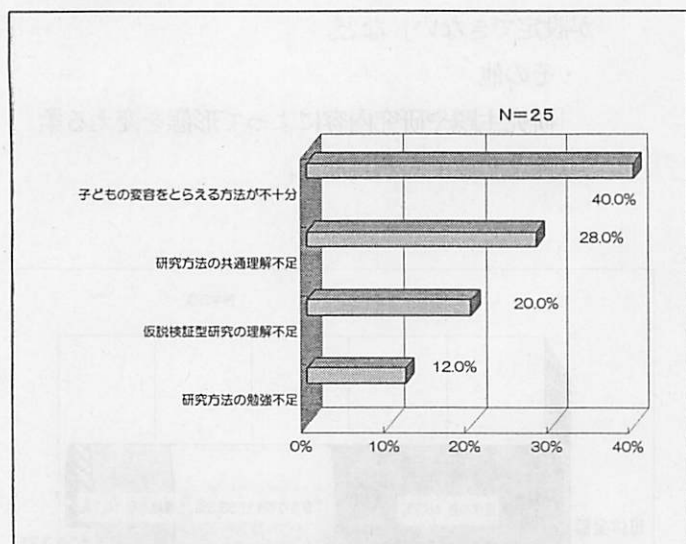


図35 研究方法に関する課題

推進委員が回答した研究方法に関する課題のうち「子どもの変容をとらえる方法が不十分」が40%を占め、「研究方法の共通理解不足」が28%、「仮説検証型研究の理解不足」が20%で続いた。

## (2) これからの学校が目指す校内研究について

(多肢選択回答)

今後、各学校が校内研究を進めるに当たり、新たに取り入れたり充実させたりすべきことは何かを探るために、校内研究の現状とこれからの校内研究に対する研究主任や推進委員の意識を比較した。

### ①小学校研究主任

#### ア研究目的

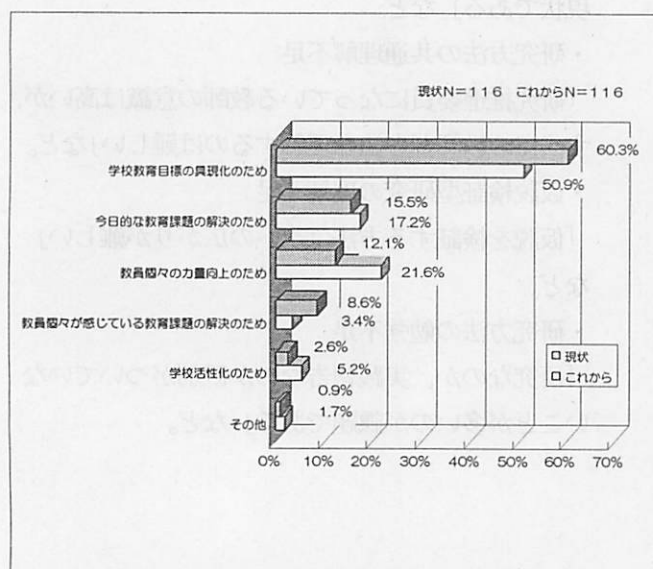


図36 現状とこれからの研究目的の比較

現状とこれからの双方において、「学校教育目標の具現化のため」が最も高い割合を占め、これからの研究目的では全体の約51%を占めた。また、現状とこれらを比較すると、「教員個々の力量向上のため」が9.5%増加した。

#### イ研究内容

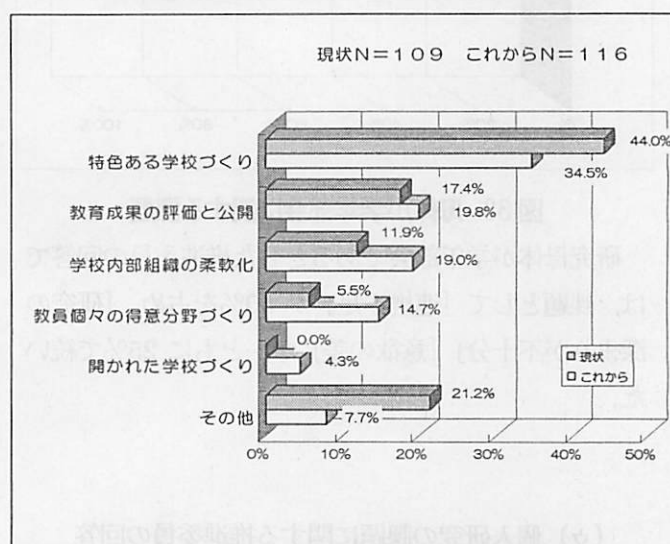


図37 現状とこれからの研究内容の比較

現状とこれからの双方において、「特色ある学校づくり」が最も高い割合を占め、これからの研究内容では全体の約35%を占めた。現状とこれらを比較すると「教員個々の得意分野づくり」が9.2%増加した。

#### ウ研究形態

### (ア) 全体的な研究形態の傾向

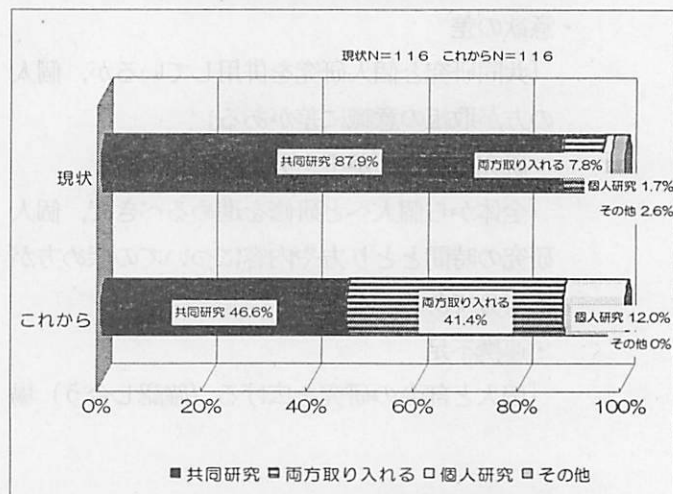


図38 現状とこれからの研究形態の比較

現状とこれからの双方において、「共同研究」が最も高い割合を占め、これからの研究形態では全体の約47%を占めたが、現状とこれらを比較すると、「両方取り入れる」が33.6%増加した。

### (イ) 共同研究の母体

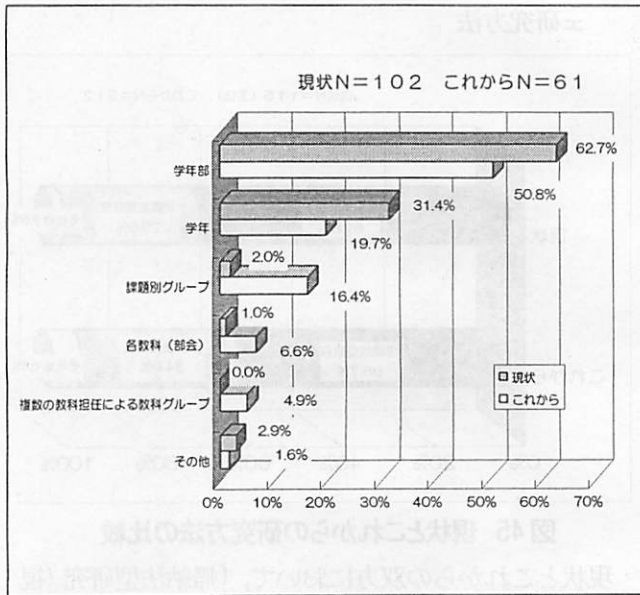


図 39 現状とこれからの共同研究の母体の比較

現状とこれからの双方において、共同研究の母体は「学年部」が最も高い割合を占め、これからの共同研究の母体でも全体の約51%を占めた。また、現状とこれらを比較すると、これからの共同研究の母体として「課題別グループ」が14.4%増加した。

### エ 研究方法

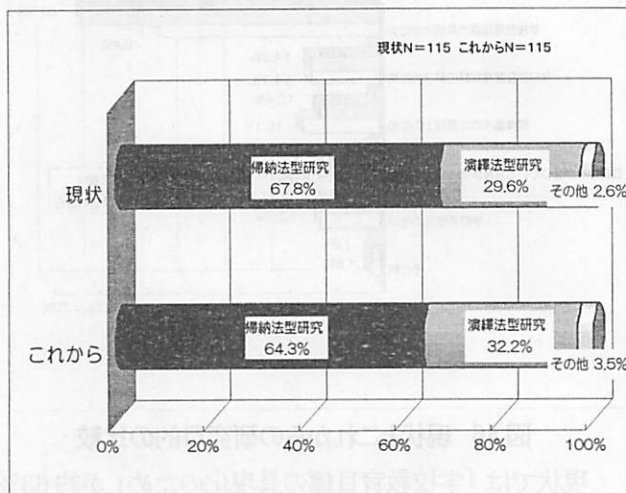


図 40 現状とこれからの研究方法の比較

現状とこれからの双方において、「帰納法型の研究 (視点研究)」が最も高い割合を占め、これからの研究方法では全体の約64%を占めた。

### ② 小学校推進委員

#### ア 研究目的

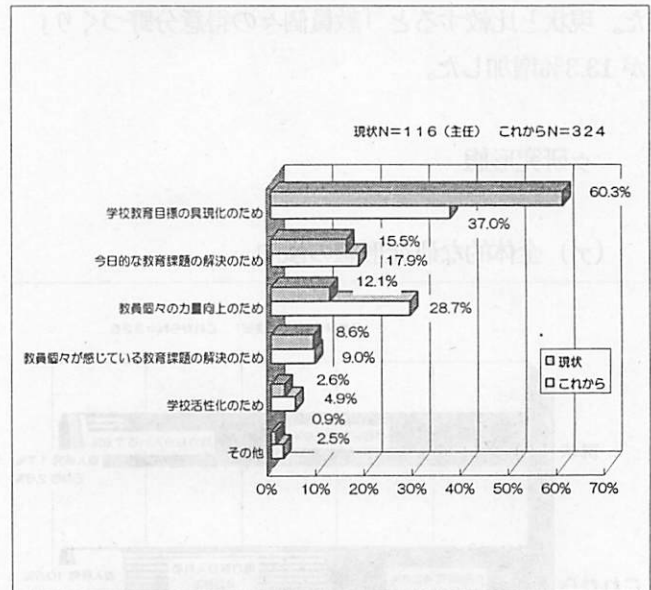


図 41 現状とこれからの研究目的の比較

現状では「学校教育目標の具現化のため」が約60%で最も高い割合を占め、「今日的な教育課題の解決のため」「教員個々の力量向上のため」が続いている。

これからの研究目的では「学校教育目標の具現化のため」が37%で最も高い割合を占め、「教員個々の力量向上のため」が約29%で続いた。現状と比較すると「教員個々の力量向上のため」が16.6%増加した。

#### イ 研究内容

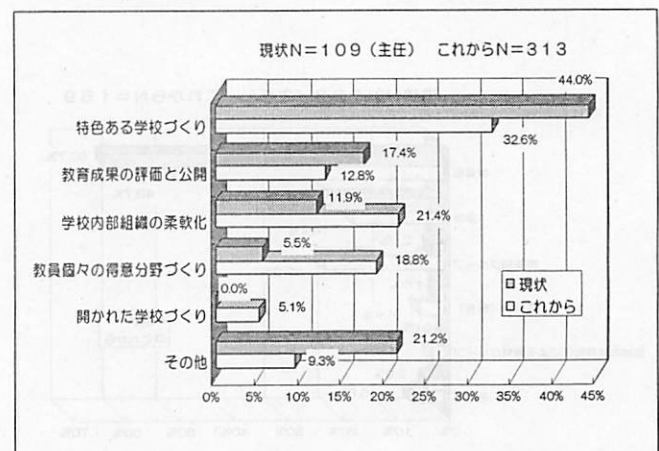


図 42 現状とこれからの研究内容の比較



現状では「特色ある学校づくり」が44%で最も高い割合を占め、「教育成果の評価と公開」が続いている。

これからの研究内容でも「特色ある学校づくり」が約33%で最も高い割合を占め、「少人数指導やチーム・ティーチングなど学校内部組織の柔軟化」が約21%、「教員個々の得意分野づくり」が約19%が続いた。現状と比較すると「教員個々の得意分野づくり」が13.3%増加した。

### ウ研究形態

#### (ア) 全体的な研究形態の傾向

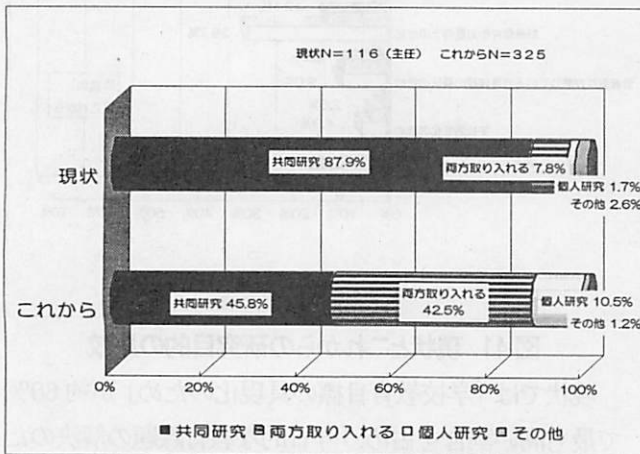


図43 現状とこれからの研究形態の比較

現状では「共同研究」が約88%で最も高い割合を占めているが、これからの研究形態では「共同研究」が約46%を占め、現状と比較すると「共同研究と個人研究を両方取り入れる」が34.7%増加した。

#### (イ) 共同研究の母体

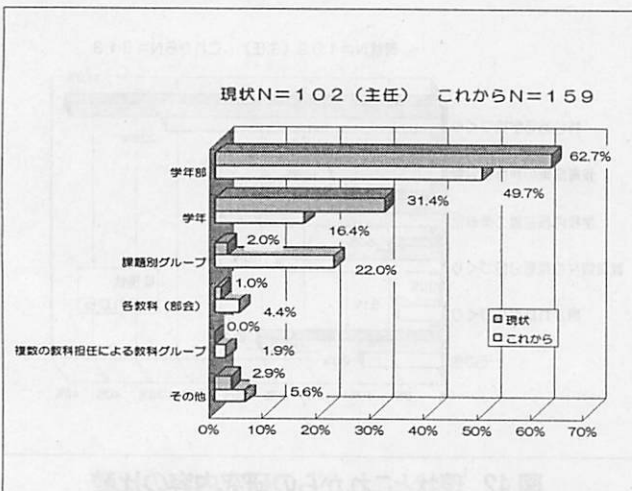


図44 現状とこれからの共同研究の母体の比較

現状では「学年部」が約63%で最も高い割合を占め、「学年」が約31%が続いた。

これからの共同研究の母体では「学年部」が約50%で最も高い割合を占め、「課題別グループ」が続いた。現状と比較すると「課題別グループ」が20%増加した。

### エ研究方法

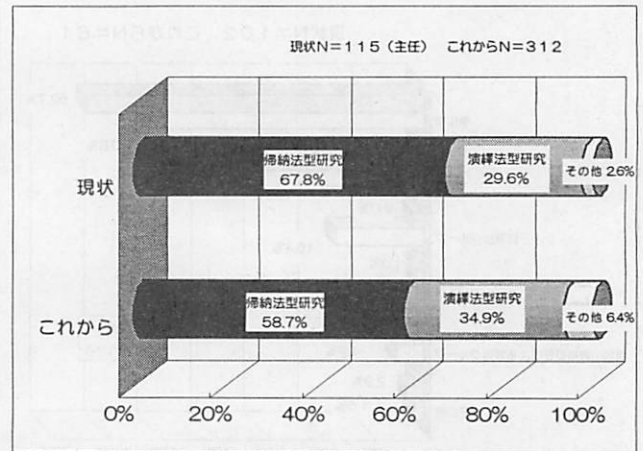


図45 現状とこれからの研究方法の比較

現状とこれからの双方において、「帰納法型研究(視点研究)」が最も高い割合を占めた。

### ③中学校研究主任

#### ア研究目的

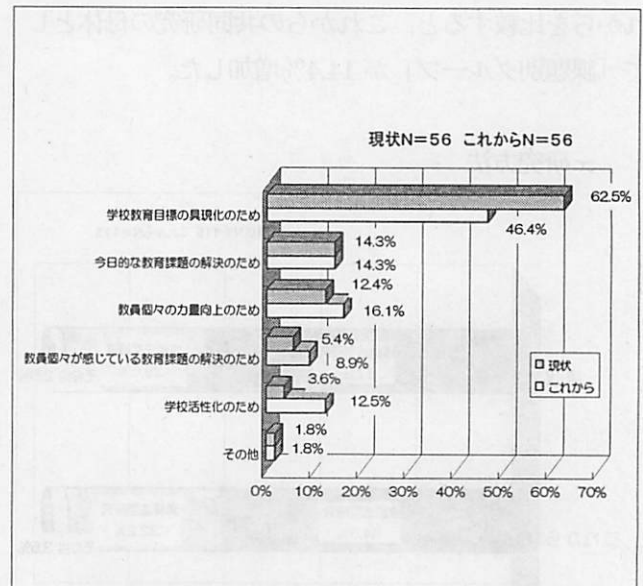


図46 現状とこれからの研究目的の比較

現状では「学校教育目標の具現化のため」が約63%で最も高い割合を占め、「今日の教育課題の解決のため」「教員個々の力量向上のため」が続いた。



これからの研究目的でも「学校教育目標の具現化のため」が約46%で最も高い割合を占め、「教員個々の力量向上のため」「今日的な教育課題の解決のため」「学校活性化」が続いた。現状と比較すると、「学校活性化のため」が8.9%増加した。

## イ 研究内容

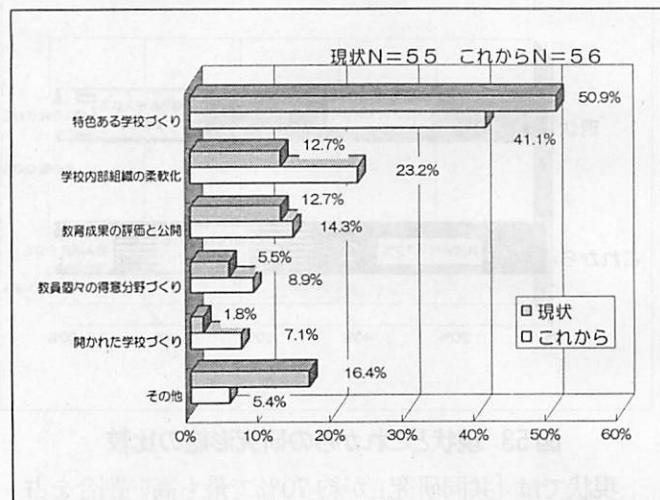


図47 現状とこれからの研究内容の比較

現状とこれからの双方において、「特色ある学校づくり」が最も高い割合を占め、「少人数指導やチーム・ティーチングなど学校内部組織の柔軟化」「教育成果の評価と公開」が続いた。現状と比較すると「少人数指導やチーム・ティーチングなど学校内部組織の柔軟化」が10.5%増加した。

## ウ 研究形態

### (ア) 全体的な研究形態の傾向

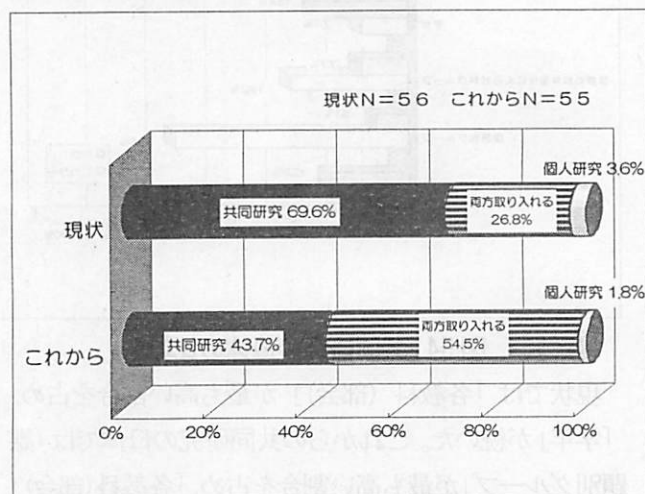


図48 現状とこれからの研究形態の比較

現状では「共同研究」が約70%で最も高い割合を

占めているが、これからの研究形態では「共同研究」が約44%の割合になり、「共同研究と個人研究を両方取り入れる」が27.7%増加した。

### (イ) 共同研究の母体

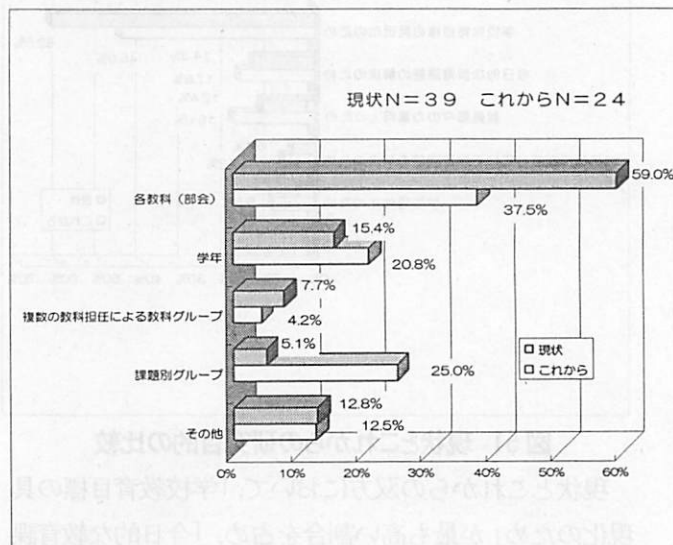


図49 共同研究の母体の比較

現状では「各教科(部会)」が59%で最も高い割合を占め、「学年」「複数の教科担任による教科グループ」が続いた。

これからの共同研究の母体でも「各教科(部会)」が約38%で最も高い割合を占めたが、「課題別グループ」が25%で続いた。現状と比較すると「課題別グループ」が19.9%増加した。

## エ 研究方法

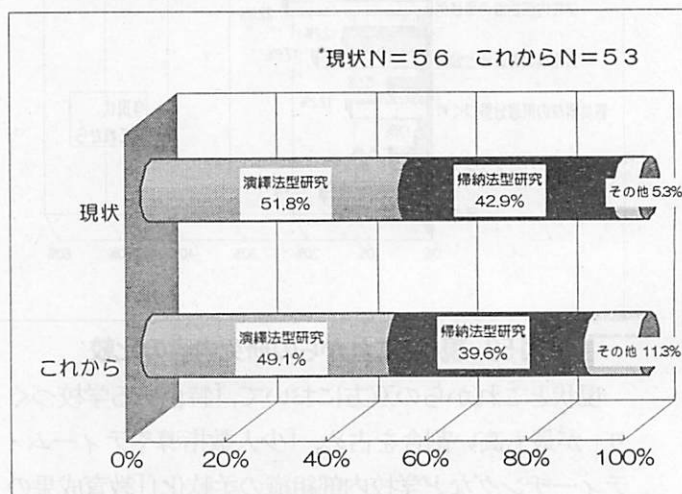


図50 現状とこれからの研究方法の比較

現状とこれからの双方において、「演繹法型研究(仮説検証型研究)」が最も高い割合を占めた。

## ④中学校推進委員

## ア研究目的

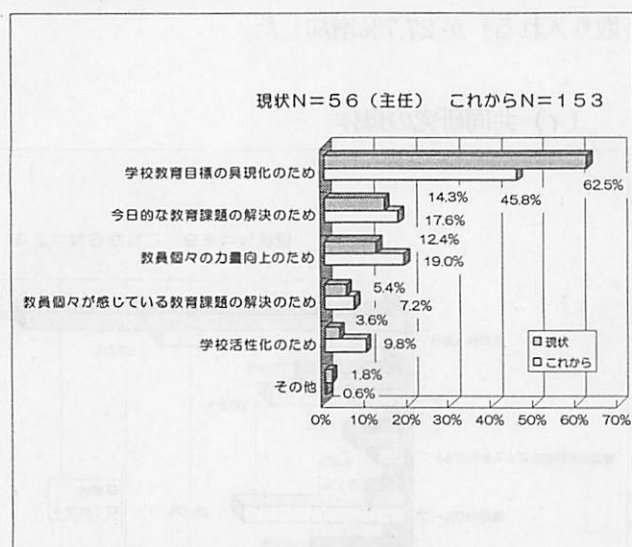


図51 現状とこれからの研究目的の比較

現状とこれからの双方において、「学校教育目標の具現化のため」が最も高い割合を占め、「今日的な教育課題の解決のため」「教員個々の力量向上のため」が続いた。現状と比較すると「教員個々の力量向上のため」が6.6%、「学校活性化のため」が6.2%増加した。

## イ研究内容

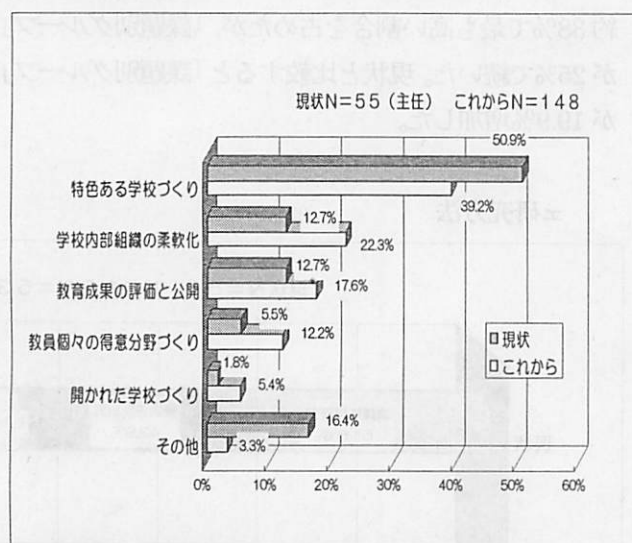


図52 現状とこれからの研究内容の比較

現状とこれからの双方において、「特色ある学校づくり」が最も高い割合を占め、「少人数指導やチーム・ティーチングなど学校内部組織の柔軟化」「教育成果の評価と公開」が続いた。現状と比較すると「少人数指導やチーム・ティーチングなど学校内部組織の柔軟化」が9.6%、「教員個々の得意分野づくり」が6.7%

増加した。

## ウ研究形態

## (ア) 全体的な研究形態の傾向

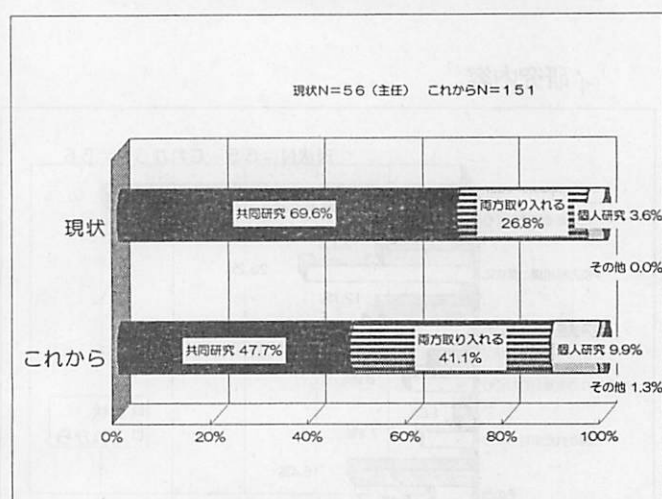


図53 現状とこれからの研究形態の比較

現状では「共同研究」が約70%で最も高い割合を占めているが、これからの研究形態では「共同研究」が約48%の割合になり、「共同研究と個人研究を両方取り入れる」が14.3%増加した。

## (イ) 共同研究の母体

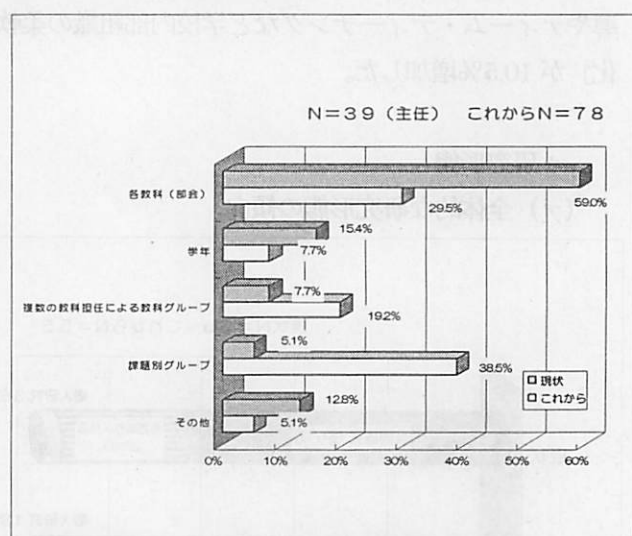


図54 共同研究の母体の比較

現状では「各教科 (部会)」が最も高い割合を占め、「学年」が続いた。これからの共同研究の母体では「課題別グループ」が最も高い割合を占め、「各教科 (部会)」が続いた。現状と比較すると「課題別グループ」が33.4%増加した。

## エ 研究方法

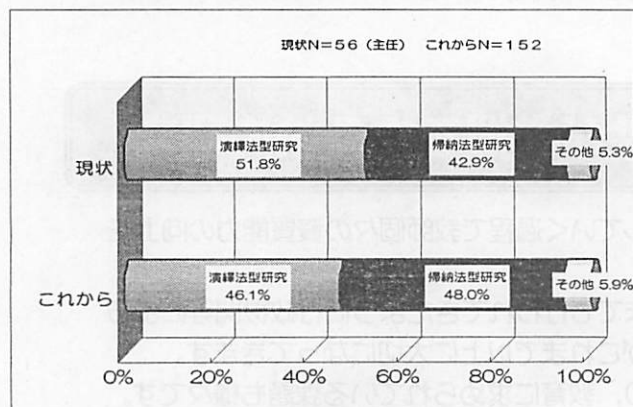


図55 現状とこれからの研究方法の比較

現状では「演繹法型研究（仮説検証型研究）」が約52%で最も高い割合を占めたが、これからの研究方法では「帰納法型研究（視点型研究）」が48%で最も高い割合を占めた。

## V 校内研究の改善と充実のための視点

研究主任や推進委員が抱える課題、これからの学校が目指す校内研究に対する意識から、校内研究の改善と充実を図るための視点が考えられる。視点の基本には、学校教育目標の具現化を目指し「教えるプロ」としての資質能力を磨くための確かな歩みを続けることがある。以下に視点を述べる。

- 1 能力と個性を発揮するための「自立」の場と機会をつくる
- 2 よりよい実践を創り、高め合うために「共有」し合うものを大切にする
- 3 児童生徒を見る確かな目をつくるための「連携」の場と機会をつくる
- 4 自己効力感を得るために「公開」の場と機会をつくる

### ■1 「教えるプロ」として能力と個性を発揮するための「自立」の場と機会をつくる

校内研究において、教師が「教えるプロ」として能力と個性を発揮するための「自立」の場と機会を設けたい。

例えば、学校研究主題を追究する際に個人テーマをベースにしたり、課題別グループを研究母体にしたりすることが考えられる。個々の課題意識を大切にする

ことで、個々の能力と個性の発揮が図られ、得意分野づくりにもつながる。

### ■2 「教えるプロ」としてよりよい実践を創り、高め合うために「共有」し合うものを大切にする

校内研究において、教師が「教えるプロ」としてよりよい実践を創り高め合うために、「共有」し合うものを大切にしたい。

例えば、児童生徒の事実を語り合い、児童生徒観や教育観、課題、児童生徒の変容を共有化することが考えられる。特に、児童生徒の変容を共有化できたとき、研究は勢いを生む。

ただ、「共有」の場と機会をつくるために、教師が意欲をなくす多忙感を味わうようでは逆効果である。校内研究に関する会議の内容を精選し、会議そのものを効率的に行う工夫が必要である。

### ■3 「教えるプロ」として児童生徒を見る確かな目をつくるための「連携」の場と機会をつくる

校内研究において、教師が「教えるプロ」として児童生徒を見取る確かな目をつくるために、外部と「連携」する場と機会を設けたい。

例えば、教師が、保護者や地域の方々と、それぞれの持ち味を生かしながら、共に授業づくりに取り組むことが考えられる。授業づくりを通じて、異なる目をもった方々と授業や児童生徒の姿について語り合うことで、「教えるプロ」として授業づくりへの確かな視点と児童生徒を見取る確かな観察眼が育つ。

### ■4 「教えるプロ」として自己効力感を高めるために「公開」の場と機会をつくる

校内研究において、教師が「教えるプロ」として自己効力感を高めるために「公開」の場と機会を設けたい。

例えば、教師全員が同僚はもとより保護者や地域の方々に自分の実践を開くことが考えられる。実践を開くことが、自らの実践の改善に必要なことに気付く契機になったり、児童生徒の変容を他者の目を通して確認できる契機になったりする。児童生徒の変容を他者から伝えられたときの喜びは、研究意欲の原動力となり、自らの自己効力感を高める絶好の機会となる。



## VI これからの学校が目指す校内研究の考え方と進め方の具体例

**具体例1 教師個々の能力と個性が発揮できる校内研究**

学校教育目標の具現化を目指し、校内研究を推進していく過程で教師個々の資質能力の向上を図ることが大切です。

教師個々の資質能力の向上を図るためには、これまで行われてきたように行政機関等による研修、自己研修はもちろんのこと、校内研究の役割がこれまで以上に大切になってきます。

社会の急激な変化や科学技術の急速な進歩等により、教育に求められている課題も様々です。そのため、現代教育に求められている課題を十分にとらえ、何が課題であるかを点検することが必要になってきます。そして、教師個々の課題と校内の全教師が必要としている共通課題を明確にしていくことが重要になってきます。

これからの校内研究では、学校教育目標の具現化を目指し、個人やグループなどを研究母体としてうまく組み合わせ、教師個々の意欲の向上を図ることが大切であると考えます。

ここでは、教師個々の能力と個性が発揮できる校内研究の進め方として、「一人一研究」「一人一授業公開」「得意分野づくり」を提案します。

**次のような手だてを考えました！ ～ワンポイント解説～****◆ 提案1 「一人一研究」**

校内の共通テーマをもとに研究したり、個人毎にテーマを設定し、研究したりします。また、経験年数に応じた課題を設定し、研究することも考えられます。その成果を「校内研究発表会」で発表し、保護者、地域、近隣の学校に案内を出し、公開することも考えられます。

**◆ 提案2 「一人一授業公開」**

指導案を書き、授業を公開します。教育実習生や経験年数の少ない教師への模範授業も考えられます。お互いが授業を見合い、意見や感想を述べ合うことで切磋琢磨され、指導技術の向上が図られます。この取組そのものが授業改善です。

**◆ 提案3 「得意分野づくり」**

何といたっても教師には誰にも負けない得意分野が必要です。得意分野をもった教師が講師となって勉強会や授業研究もできます。また、得意分野を生かしていくことは、個々の能力と個性がより一層磨かれることにもなります。



## ▼提案1 「一人一研究」について

### 1 校内研究主題を個人テーマにする

校内研究の学校研究主題を個人テーマにして研究を進めます。研究の進め方やまとめ方、授業研究や事前・事後の検討会、研究発表会等、同一のテーマで校内研究を進められる利点があります。教科や領域を絞ることも比較的容易なので、研究の深まりも期待できます。また、学校全体で教科や領域を絞らない場合は、研究の広がりが期待できます。ただ、同一の教科・領域をする者同士がグループをつくり、情報交換をしたり、研究推進委員会、研究全体会、職員会議等で研究の進み具合を報告したりして、「共有」し合うものを大切にするための手だてが必要になります。

### 2 校内研究主題に沿った個人テーマを設定する

校内研究の学校研究主題に沿った個人テーマを設定する方法も考えられます。個々の教師が、自分の興味・関心、経験年数に応じたテーマを設定できるので、研究意欲が喚起され、個々の課題意識が大切にされている満足感も生まれると考えます。ただ、学校全体で教科・領域を絞らない場合は、前述したとおり、「共有」し合うものを大切にするための手だてが必要になります。

## ▼提案2 「一人一人授業公開」について

個々の教師の資質能力の向上を図るためには、何と云っても授業を公開することが大切です。指導案を書き、授業を公開し、研究の一端を見せ合ひましょう。教材を分析し、子どもたちの実態を把握し、授業を公開することで指導技術の基礎・基本も向上します。

また、略案を用意し、授業を見せ合うこともいいでしょう。気軽に授業を見合い、感想を述べ合うことでお互いが切磋琢磨され、指導技術の向上が図られるとともに、校内研究も活性化されます。また、保護者や地域の方々に参観していただき、子どもたちの姿について語り合うことは、子どもたちを見取る確かな目をつくることにもつながります。

## ▼提案3 「得意分野づくり」について

得意分野づくりの早道は、教師個々の専門性を生かすことにあります。また、個々の特技や特性を生かすことも考えられます。得意分野をもった教師が講演会、講義、実技研修等の講師を務めることも考えられます。

自分の得意分野をつくり、資質能力を向上させるためには、幅広い研修を積むことが何よりも大切です。そのためには、校内だけではなく、広く校外にもパートナーシップを構築していくことが必要になってきます。

## ▼ こんなことも試みられています！

- 同校種や異校種間による共同研究
- 校内の教師による講演会や講座等
- 保護者や地域の方々の授業参観から授業参画へ

## 具体例2

## 教師同士の学び合いを大切にする校内研究

## ～前年度踏襲を超えたところに見えるもの～

校内研究を進めるうえで、校内の教師の連携は欠かせません。学校目標に基づく校内の研究主題の具現化のために全教師が力を合わせていってこそ、真の研究が達成されるのです。

しかし、実際は個人の意識の差や時間不足等の校内事情が、その達成を阻んではいませんか。ややもすると、安易に「前年度踏襲」という道を選んでいませんか。一枚岩になって取り組めないもどかしさをだれもがどこかで感じているものの、「従来どおりに進めておけば・・・」という守りの感から抜け出せずにいるのが本音ではないでしょうか。

これでいいのでしょうか。「このまま同じことが毎年繰り返されていけば、校内研究は実のない、机上の空論になっていくのでは」そんな疑念を払拭し、勇気がわいてくるような提案をいくつか投げ掛け、皆さんと共に考えていきたいと思います。

ここで一番に頭に置いたのが、「不易と流行」という言葉です。いつの時代、どんな子どもたち、どんな状況においても変わらない「不易」の部分があると考えられます。ここではそれを、子どもの実態の確実な見取りと子どもたちへの教師の熱い願い、適切な研究主題の設定、さらには研究の見通しとまとめ、内部及び外部の評価の必要性だととらえます。

同時に、状況に応じて柔軟に変えるべき「流行」の部分もあると考えられます。具体的には、従来の教師の意識を脱却したボトムアップ型の意識環境づくりと、研究主任の役割の見直しを提案します。

常に、ここだけは譲れないという強い意思と、状況に適応し踏襲にこだわらない柔軟な考え方をうまく持ち合わせていくことが大切だと思います。この「不易」と「流行」がかみ合ってはじめて、「教師同士の学び合い」がなされ、校内研究の真の姿に迫っていけるのです。

## 次のような手だてを考えました！

## ～ワンポイント解説～

## ◆ 提案1 「今までの研究方法の見直しのために」

- 1 「子どもへのまなざしと願い」～実態の見取りと教師の思いの合致～
- 2 「研究主題の共有化と確認」～主題設定時の重要事項～
- 3 「見通し・評価でステップアップ」～今より、よいものを見据えて～

## ◆ 提案2 「刺激し合える環境づくりを」

～教師間の意識の高揚を図るために～

- 1 プロジェクト委員会の設置で
- 2 授業研究で
- 3 職員会議で

## ◆ 提案3 「研究主任はコーディネーター」

～リーダーシップと調整を～



## ▼提案1 「今までの研究方法の見直しのために」

### 1 「子どもへのまなざしと願い」～実態の見取りと教師の思いの合致～

「何ができて何ができないのか」「どこをどのように伸ばしたいのか」「どこをどうやって直していくのか」こうと考えるとイメージがわきやすいでしょう。まず、そうやって子どもの実態と教師の願いをしっかりおさえることです。それらを一人の子ども、学級、学年、学校と広げていくことで、おのずと求める研究主題が見えてきます。同時にそういった話合いの中で、学び合う土壤も作られていくのです。

**※手だて①** 子どもの実態は常に変わるという前提を忘れず、子どもへの願いを教師間で常に話し合い、年度ごとに整理しておくことが大切です。

**※手だて②** 諮問委員会の設置やアンケートなどを通して、保護者や地域の願いを取り入れていく必要があります。

### 2 「研究主題の共有化と確認」～主題設定時の重要事項～

学び合える校内研究のためには、教師個々が「自分はここを任されているのだ」という自負と自覚をもつことが前提です。そういう意識をもつには、教師個々が、どんなねらいで研究主題が設定されたかが分かり、ねらいに沿った具現化の手だてがイメージできなくてははいけません。「全体を考えていながら個人の力になる研究主題」「個人の考えが全体に反映される研究主題」とはどんなものだろう、と考えた時に行き着くのは、分かり易く本質を言い当てた研究主題の設定ということになるのです。抽象的すぎて覚えられない研究主題は、そろそろやめにしませんか。

**※手だて①** 個人のプランが分かるようなアンケートやチェックカードを作成し、個々の考えをじっくり引き出しましょう。

**※手だて②** 学校教育目標との関連性や整合性を意識しましょう。

**※手だて③** 毎回の研究のプリントに主題を掲載する定位置を設定し、研究主題を身近に感じてもらえるようにしましょう。職員室に大きく主題と構想図を貼っておくのも効果的です。

### 3 「見通し・評価でステップアップ」～今より、よいものを見据えて～

校内研究に意欲をもって取り組んでいくには、そのねらいや方法が明確で簡潔であり、実践したことが、はっきりとしかも比較的短期間で、教師個々の資質能力となって現れることが大切です。「目標に対して今どこまで進んでいるのか」「次は何をするのか」ということを常に意識しながら進めましょう。また、短期的長期的展望に立ったさまざまな評価を取り入れていくことも必要です。内部評価の工夫とともに、外部からの評価(子どもの変容を客観的に知るため)も導入していく必要があります。

**※手だて①** 「研究だより」等の発行による研究の見通しを確認しましょう。その際、評価→検討→改善の内容と予定までを一つの流れとして企画しましょう。全員が提出物を期限までに出せるよう、根気強く声掛けしましょう。

**※手だて②** 他校の評価の方法の情報収集に努めましょう。データを共有化しておきましょう。



## ▼提案2 「刺激し合える環境づくりを」～教師間の意識の高揚を図るために～

教師個々の興味・関心や課題意識，子どもに対する接し方は同じではないし，だからこそ多様な学校運営が可能になるともいえます。このような状況で大事なものは，「どんな学校にしたいか」「どんな子どもを育てたいか」という目標などについて語り合える環境が常に整っていることです。その理念に沿って，教師個々の資質能力を最大限生かしていくことが肝要です。

しかし，残念なことに，実際には教師個々の意識の違いを集約できず，刺激し合える環境にはなっていないのが実情ではないでしょうか。実際に子どもたちと接し，その実態や変容を身近に感じるはずの教師の力が生かしきれていないことになります。

トップダウンではなく，ボトムアップの考え方が生かされる方法こそが，これからの学校に求められているのです。加えて，既存の考え方から脱却し，思い切って新しい方法を取り入れるという意識が必要なのです。そうしていくことで，教師間に達成感や活力がわいてくるのではないかと思います。このような考え方に沿っていくと，教師間の意識の高揚と活性化が図られ，相互に刺激し合える環境に近付いていけると考えます。

### 1 プロジェクト委員会の設置で

従来の校務分掌にこだわらず，学校経営について学校目標に基づいたプランやアイデアのある教師が，その考えを協議し，全体に提案していきます。同じ座標で討議することで生まれる意識の共有が，教師同士の連帯につながり，学校の活性化につながっていきます。最終的には子どもたちへも反映されていくでしょう。「自分たちの企画立案したことが組織の中で生かされている」という満足感と自信が一番の糧になります。また，子どもの実態や変容をだれよりも身近にとらえられるからこそ，土台のしっかりしたものになる期待ももてます。その委員会を根付かせ，一人でも多くの賛同者を得ることで，従来のトップダウン型ではない新しい型の学校が生まれるのではないのでしょうか。

※手だて① 立ち上げたときの意識の継続と時間・場所の確保が最大のネックです。前者は委員の話合いの頻度（炉辺談話で可）でクリアしましょう。後者は事前に予定を出し，賛同者を募り可能となります。

※手だて② 委員会自体の広報の常時継続と全員への事前の資料準備が大切です。参加を強制してはいけません。

### 2 授業研究で

教師個々の資質能力を高めるためにも，子どもたちのためにも，自分の授業を常に改善していこうとする意識は大切です。年間を通して一人一人公開授業をする，同僚や保護者，地域の方々に常時授業が公開できる体制を組む，自分の授業をビデオで記録する等の試みを実践していくことを提案します。なんといたっても授業を相互に見合うことが，刺激し合える環境づくりには欠かせないからです。先輩や後輩，他教科担任，他学年担任から受ける新鮮な発見は，必ず教師個々の資質能力を高めてくれます。

**※手だて①** 負担にならないポイントを絞った指導案（指導過程のみでも可）を作成します。まず指導案を書くことが大切です。

**※手だて②** 事後検討会のもち方を効率化しましょう。資料は感想メモで十分です。「ご苦労様」「勉強になりました」はやめましょう。指摘してもらうところがなければ、学び合いにはならないからです。一つ褒め、「自分だったらこうします」と書くのがいいですね。

### 3 職員会議で

相互の意思が確認でき、一方通行にならない職員会議を工夫したいものです。子どもたちをよくしていこうとするねらいがしっかりした提案であれば、丁寧に協議していきたいし、ねらいを軽視し、教師の仕事の効率化に偏った提案であれば、却下していく勇断をもちましょう。形骸化した会議ではなく、創造的建設的な会議になるよう、内容や項目を吟味していく必要があります。

**※手だて①** 定時開会、これだけで目標は90%達成されます。

### ▼提案3 「研究主任はコーディネーター」 ～リーダーシップと調整を～

「生徒指導は待ったなし、ゆえに教師間の意思統一が図りやすい。それに比べて校内研究は、結果がすぐには見えない分、意思統一が図りにくい。」このような意識は、どの教師にも大なり小なり内在していることでしょう。

だからこそ研究主任の果たす役割は大きいのです。教師個々の課題意識の差を埋めながら、明確な道筋を立てて目標に迫っていく強いリーダーシップが求められます。同時にそのリーダーシップをあまり前面に出さずに浸透させていくことも肝要なことです。教師個々の立場や考えを上手に引き出し、ある時期それらをぐっと束ねる裁量が要求されるのです。教師相互に資質能力を高め合う場の設定を常に意識する必要性を感じます。研究主任は、研究のコーディネーターであるという認識と自負が大切なのです。

しかし、すべてを一人でこなすことはありません。推進委員会のメンバーにどんどん仕事を割り振りましょう。困ったときは、どんどん周囲に意見を求めましょう。悩みながら試行錯誤していく研究主任の人間的な姿に、共鳴する人も増え、そこから真の学び合いもなされていくのです。

教師個々の「校内研究に対する意識の差が埋められない」のも事実ですが、その意識の底の底には「子どもが好き」という意識が内在しているはずです。その意識に訴えかけてみましょう。

**※手だて①** 早目の原案提示を心掛けましょう。

**※手だて②** 研究主任が自ら困っていることや悩み等を同僚に隠さず吐露しましょう。悩みをもつ同僚も自分だけ悩んでいるわけではないという意識をもち、連帯感が生まれます。

**具体例3****成果と課題を共有し合う校内研究****●4月当初に研究の見通しが立っていますか？**

あなたの学校では、校内研究の評価を、いつ行っていますか。学年末の慌ただしい時期に一度にまとめて行われていませんか。

今年度の研究の方向性は前年度中に決めておき、年度の早い時期に1年間の大まかな研究計画を立て、研究を進めながら研究の内容と進め方の両面について評価し、振り返りながら進める方法が効果的です。

**●授業研究に飽きていませんか？**

授業研究に飽きていませんか。指導案作りに熱中するあまり、何のために授業研究しているのか、その目的が見えなくなっていないですか。

学校における教育研究は、子どもたちの変容につながるものでなくてはなりません。授業研究では、「子どもたちの姿を〇〇に変えたいから〇〇するのだ」という目的を見失わずに評価の観点を明示することが大切です。

**●あなたは「研究の成果と課題」をすぐに言えますか？**

「こんなに忙しく、こんなに一生懸命取り組んだのに、それで結局何だったのだろう」そう思ったことはありませんか。

校内研究の反省を全体会で話し合う前に、まず、あなた自身の研究の成果と課題を書いてみましょう。一人一人がじっくりと考えて自分の意見を持ち、その上で話し合いをすることで全員が研究の成果と課題を実感し、共有化できるようになります。

**次のような手だてを考えました！ ～ワンポイント解説～****◆ 提案1 今年度の研究は、前年度末から**

- 1 2月がスタートライン
- 2 振り返りを可能にする早目の年間計画の作成
- 3 年度の途中で、随時、軌道修正を

**◆ 提案2 授業研究の評価は次に示す段階で**

- 1 授業をつくる段階で
- 2 授業を見合う段階で

**◆ 提案3 年度末の反省は、まず、自分から**

- 1 1年間の振り返りは、まず、個人で
- 2 次にグループごとに、そして、全体で



## ▼提案1 今年度の研究は、前年度末から

### 1 2月がスタートライン

研究主題を決めるときに、研究で目指す子どもの変容や手だてを教師全員で十分に吟味しているでしょうか。数年間の継続研究の場合には、副題を変更する程度の修正になるでしょうが、研究主題を新たに設定する場合は、吟味して決めることが大切です。忙しい新年度当初に研究主題についてゼロから話し合うのは実質的には難しいはずで、ですから、前年度のうちに次年度の研究についての見通しを立てておくことをお勧めします。

では、どのようにすれば、次年度の研究に関する全体での話し合いを深めることができるのでしょうか。ここでは、次の二つのことを提案します。

#### (1) アンケート結果を基にした話し合い

質的な内容を問うアンケートは、記述式が適しています。そこで、表1のようなアンケートを作り、全教師対象にアンケート調査をします。その結果を研究主任が集約したものを基に、全体会で話し合います。学校規模にもよりますが、回答結果に顕著な傾向があれば、結果を集約する際にグラフ化して提示すると、より見易くなります。逆に、回答結果にかなりのばらつきがあるときには、全体会で、どの観点を最も重視して研究内容を決めていくかということを話し合う必要があります。

このようなアンケートを実施することは、学校現場における教育研究は本来何を指すものなのかということを考えるための幾つかの観点を示し、校内研究の目的を再確認してもらうという役割も果たします。また、学校教育目標の具現化や教育の今日的な課題について、改めて考えるきっかけにもなります。

表1 校内研究の主題設定のためのアンケート(小・中学校用)

1 次年度の研究の内容について教えてください。〈自由記述式〉

- (1) 本校の教育目標の中で、最も重視して指導すべき点は何だと考えますか。
- (2) 教育の今日的な課題から、重点を置いて指導すべきことは何だと考えますか。
- (3) 日常の学習や生活の様子から、本校の子どもたちのどんな力を伸ばしたい(補いたい)と考えますか。
- (4) 今年度の研究結果を踏まえて、次年度は何について研究したいと考えますか。

## (2) KJ法的手法による話し合い

事前にアンケートをとらず、全体会で次年度の校内研究についてイメージする語句を思いつくままに書いてもらい、それを基にKJ法的手法で話し合います。事前に予告しておき、書く時間は短くし、話し合いに時間をかけます。その際、学校の教師の人数や経験年数等を考慮し、「まったく観点を示さずに書いてもらう」「表1に示したような観点を提示した上で書いてもらう」という二つの方法が考えられます。KJ法的手法で話し合う場合、十分な時間の確保が必要ですが、必然的に全員が発言することになり、学校全体として課題の共有化を図ることができ、学校を活性化させる上でも効果があります。

(1) や (2) のような方法で話し合いを進め、全体会で研究の方向性が見えてきたら、その後、研究推進委員会で研究主題を吟味します。研究主題は、研究の目的、内容、方法等が集約され、何を研究しているのかが一目で分かるようなものにします。また、研究内容によって、実態調査等が必要になる場合には、その実施時期や調査の内容等についても検討します。

## 2 振り返りを可能にする早目の年間計画の作成

校内研究以外にも、今日的な課題や教育課程を実施していく上で、様々なジャンルに関する校内研修会を行う必要に迫られます。余裕をもって研究を進めていくためには、1年間の学校行事を見据えた上で、長期の休業期間中に研修会を集中させたり、研究授業の時期の重複を避けたりするなどの配慮をしながら、研究の年間計画を早い段階で提案すべきです。表2に例を示しましたが、計画を立てる際は、誰が、いつ、何をするのかということを確認することが大切です。

また、研究集録の項立ても早い段階で示し、研究授業が終わった段階で、順次、結果と考察も含めて集録用の原稿をまとめていくことにより、一つの実践の成果と課題を次の実践に生かすことが可能になります。

さらに、校内研究の進行状況、研究推進委員会で決まったことなどを「研究だより」等でこまめに知らせることも大切です。研究主任は、研究に関するコーディネーターであり、校内研究の深まり方や円滑な推進等については研究主任の取組にかかっているのです。

## 3 年度の途中で、随時、軌道修正を

研究の進め方について、年度の途中で、随時、評価しながら進めていくことが大切です。

例えば、研究授業に関して、事前検討会をもたずに、事後検討会だけを行うことにしてスタートしたとします。実施してみて、毎回の事後検討会の話題が授業者への質問が中心になってしまった場合には、事前に授業仮説や授業の意図等を簡潔にまとめたものを配布したり、時間を調整して事前検討会を開いたりするなどの改善が必要になります。

とはいえ、予想外に行事が錯そうしたり、生徒指導上の諸問題が発生して緊急な対応が必要になったりした場合などには、授業日の変更や研究推進委員会の割愛等、研究に関する仕事量の調整を図り、校務に優先順位を付けて柔軟に対応することが大切になります。

表2 校内研究年間計画例(小学校)

\* 低学年部・中学年部・高学年部・特殊教育部の各グループが研究母体となつて研究を進める場合の例

| 月  | 校内研究の主な内容                                                   | 研究の評価 |        | その他の研修等                | 担当者、関連会議                                     |
|----|-------------------------------------------------------------|-------|--------|------------------------|----------------------------------------------|
|    |                                                             | 内 容   | 進め方    |                        |                                              |
| 4  | ・教育目標の確認<br>・研究体制、研究主題の概要立案                                 |       |        |                        | 校長<br>研究主任、推進委                               |
| 5  | ・各学年部の主題の決定<br>国年間計画の確立、研究主題の決定<br>・研究集録の項立ての提示<br>・児童の実態調査 |       |        | ㊟心肺蘇生法                 | 各学年部<br>研究主任、全体会<br>研究主任<br>研究主任、推進委<br>体育主任 |
| 6  | 国全校授業研究①（中学年部）                                              | ○     |        |                        | 中学年部                                         |
| 7  | ・研究の進め方の検討①                                                 |       | ○      | ㊟体育：水泳指導法<br>㊟総合：環境、情報 | 推進委<br>体育主任<br>総合主任、情報主任                     |
| 8  | ㊟校内研究に関する研修会                                                |       |        | ㊟教育課程研究協議会             | 研究主任<br>参会者                                  |
| 9  | 国全校授業研究②（特殊教育部）                                             | ○     |        |                        | 特殊教育部                                        |
| 10 | ・研究の進め方の検討②                                                 |       | ○      |                        | 推進委                                          |
| 11 | 国全校授業研究③（高学年部）                                              | ○     |        | ㊟国語：書写指導法              | 高学年部<br>書写主任                                 |
| 12 | 国全校授業研究④（低学年部）<br>・研究の進め方の検討③                               | ○     | ○      | ㊟教育課題研究発表会<br>㊟総合：英語活動 | 低学年部<br>推進委<br>発表者、参会者<br>総合、国際理解主任          |
| 1  | ・研究の年度末反省（各学年部）<br>・研究集録原稿編集                                | ○     | ○      | ㊟少人数学習推進               | 推進委<br>低学年部<br>研究主任、推進委                      |
| 2  | 国研究成果発表会、年度末反省会<br>・研究集録の印刷及び製本の発注<br>国次年度の研究構想立案           | ○     | ○<br>○ |                        | 推進委、全体会<br>研究主任、技師<br>研究主任、全体会               |
| 3  | ・研究集録発行                                                     |       |        |                        |                                              |

\* 国：授業研究，国：全体会（協議），㊟：研修会，㊟：提供授業，㊟：伝達講習会



## ▼提案2 授業研究の評価は次に示す段階で

### 1 授業をつくる段階で

指導過程ができた段階で、その指導過程が授業仮説の検証に耐えうるものであるかどうか、授業の流れの中のどの場面で手だてを講じるのか（あるいは、どのような設定が手だてとなっているか等）ということなどについて、研究グループ（学年部、学年、教科別、課題別等各学校の研究母体による）で再検討します。

授業者は、たたき台としての指導案の作成を計画的に進め、早目に提案します。そして、研究グループ全員で指導案を数回検討できれば、研究グループのメンバー全員が、授業者が提案する授業の意義を共有化することができます。

### 2 授業を見合う段階で

授業研究を活性化させるために、次の三つのことを提案します。

#### （1）指導案とともに、授業を評価する観点を提示

研究授業を提案する研究グループは、提案する授業の何を（どこを）見て評価、検討してほしいのかという観点を明確に示すことが大切です。観点は、教科や領域等により異なりますが、欲張って多くしないことです。事前検討会をもつことが難しい場合には、指導案といっしょに、見る観点についても一言書いて事前に配布すればよいでしょう。事前に授業を見る観点を示すことによって、事後検討会での焦点化した話合いが期待できます。

#### （2）評価の観点を提示できない場合には

帰納的な手法で、授業をとにかくやってみるという場合には、次のような方法があります。研究授業中に、参観者は、自分が気付いたこと、感じたこと、考えたこと等をメモします。それを、授業後に回収、研究主任が集約し、一覧にして、事後検討会で活用します。同じような観点ごとに意見を分類できるはずですから、事前に観点を決められなかった場合でも、的を絞って事後検討会を進めることができます。

#### （3）より客観的な評価を得たい場合には

より客観的な評価を得るためには、外部機関との連携を図ることをお勧めします。仙台市教育センターの学習指導支援班の訪問や宮城教育大学をはじめとする仙台市と提携している諸大学に連携協力を要請することも考えられます。

### ▼提案3 年度末の反省は、まず、自分から

#### 1 1年間の振り返りは、まず、個人で

実際に書いてみることで、考えは整理されるものです。表3のようなカードを使い、まず、個人で研究の成果と課題を一人一人が明確にします。研究の成果の是非を問う項目は段階評価にしてランク付けをはっきりさせ、研究の成果の質的な面について問う項目は自由記述にします。

表3 校内研究内容の振り返りカード(小・中学校用)

- |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>1 今年度の研究(あなたの所属するグループでの研究内容)についての反省</p> <p>(1) 研究の目標は達成されたと思いますか。また、そのように評価した根拠は何ですか。<br/>         &lt;4段階で評価, 評価理由は自由記述&gt;</p> <p>(2) 研究の視点や仮説は適切であったと思いますか。また、そのように評価した根拠は何ですか。<br/>         &lt;4段階で評価, 評価理由は自由記述&gt;</p> <p>(3) 年間の取組の中で検証できたことは何ですか。&lt;自由記述&gt;</p> <p>(4) 疑問として残ったこと(はっきりしないこと, 迷い等)は何ですか。&lt;自由記述&gt;</p> <p>(5) 課題として残ったこと(今後やってみるべきこと)は何ですか。&lt;自由記述&gt;</p> <p>2 参考になった文献</p> <p>3 研究成果としてデータベース化すべきもの<br/>         *今後も活用可能なワークシートやデータ等がある場合は、学校のコンピュータにもデータを保存してください。</p> |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

#### 2 次に研究グループごとに、そして、全体で

個人の反省が終わったら、次に研究グループごとに話し合います。そして、その結果を集約した一覧表を基に全体会をもちます。一人一人が自分の考えを明確にした上で話し合いを重ねれば、研究の成果を全員で共有化することができるはずです。

また、振り返りカードに、参考文献や関連情報でデータベース化すべきものを確認する項目を入れることにより、作成した資料等の共有化を図ることができます。

このようにして、目的意識と見通しをもち、計画的に校内研究を進めることにより、学校全体として充実した研究の成果を得ることができ、また、その成果を共有化することが可能になります。

## 具体例4 子どもの変容の把握を大切にする校内研究

### 1 子どものための校内研究

どうすれば子どもたちに力を身に付けさせることができるのでしょうか。教科、道徳の時間、学級活動、総合的な学習の時間、さらには部活動や生徒指導まで、教師が、子どもたちと真剣に向き合う日々の営みは、すべて実践的な研究であると言えます。なぜなら、子どもたちの実態をとらえ、こうあってほしいという姿に向けて方針・計画を立て、変容を確認しながら的確に指導・支援を加えていくプロセスは、教師の営みの基本として共通しているからです。

従って、校内研究は何のためにやるのかと言えば、それは「子どものため」「子どもの変容のため」と言うことができます。

### 2 子どもの変容をとらえること

これまでも、わたしたち教師は子どもたちのために情熱をもって指導に当たってきました。これからも、情熱をもって指導に当たっていくことは変わりません。

近年、「説明責任」という言葉を耳にしますが、教師が指導に責任をもつということは、きちんと計画を立て、指導し、その結果、子どもたちがどのように変容したかといった目標と結果について説明することができるということです。

しかし、前述の調査結果を見ますと、これまで各学校では子どもたちの変容の把握が必ずしも十分でなかったり、変容を把握する方法が明確でなかったりなどの状況が見られました。

子どもたちの変容を的確にとらえることができ、初めて子どもたちの次の学習への動機付けや、指導・支援の方法の修正が可能になります。従って、これからの校内研究では、変容をとらえるための具体的な方法を明確にすることが一層求められます。

#### 次のような手だてを考えました！ ～ワンポイント解説～

一口に「変容」といっても、教科の学習や学級での生活、行事など、さまざまな場での変容があります。ここでは、教科の学習について考えてみましょう。

- ◆ 提案1 「学習前に実態をつかむ」
- ◆ 提案2 「学習中に確認する」
- ◆ 提案3 「学習後に変容をとらえる」
- ◆ 提案4 「長期的・総括的に調査する」



### ▼提案1「学習前に実態をつかむ」

今、目の前にいる子どもは、何ができて、何ができないのかといった子どもの実態をつかむ診断的評価が指導・支援の出発点になります。

実態調査では、興味・関心などの情意面と、どんな力が身に付いているか、あるいは、どこでつまづいているかといった認知面（知識、理解、技能）を把握することが必要です。

◎学習前に実態をつかむアンケート例（中学1年 国語 「分かりやすく書こう」）

#### ■興味・関心

- 文章を書くことが好きですか
- 作文が上手になりたいと思いますか
- 作文の学習は好きですか

#### ■知識・理解

- 相手が分かり易いように説明するための次の方法を知っていますか
  - ・時間の流れにしたがって書く
  - ・5W1Hによって書く
  - ・案内状など、項目を立てて書く
  - ・比較して書く
- 原稿用紙の正しい使い方を知っていますか

#### ■表現

- カレーライスの作り方を説明する文章を書いてみましょう（作品）

### ▼提案2「学習中に確認する」

一人一人の学習を丁寧に支援するための有効な方法として、形成的評価があります。あらかじめ、学習の流れを明らかにすることができるうえ、学習の途中で子どもの変容の様子を確認しながら、指導の仕方を修正することができます。表1のような自己評価表などを利用すれば、子どものできることやできないことなどについて、学習中に確認することが容易になります。

### ▼提案3「学習後に変容をとらえる」

学習後の子どもの変容の観点は、診断的評価の観点と同一にします。一連の学習が終わった段階で、それぞれの観点での変化の様子が「変容」ということになります。

子どもたちは、努力し達成したことにより成就感を味わい、次の学習に取り組む意欲をさらに高めていきます。また、教師も子どもの変容を目に見える形でとらえることにより、教育のプロとしての喜びと充実感を味わうことができます。

表1 自己評価表例(中学1年 国語「分かりやすく書こう」)

| 自 己 評 価 表                          |                             |                                    |        |    |
|------------------------------------|-----------------------------|------------------------------------|--------|----|
| 〔学習のめあて〕 事実や事柄を分かり易く説明する力を身に付けよう   |                             |                                    |        |    |
| 時                                  | 月日                          | 評価項目                               | 自己評価   | 補充 |
| 1                                  |                             | 時間を追って書く方法が分かりましたか<br>(例) ○○の作り方   | A B C  |    |
|                                    | 【学習して分かったこと、努力したこと、今後の課題など】 |                                    | 【先生から】 |    |
| 2                                  |                             | 5W1Hを使って書く方法が分かりましたか<br>(例) 新聞記事   | A B C  |    |
|                                    | 【学習して分かったこと、努力したこと、今後の課題など】 |                                    | 【先生から】 |    |
| 3                                  |                             | 項目を立てて説明する方法が分かりましたか<br>(例) お知らせ   | A B C  |    |
|                                    | 【学習して分かったこと、努力したこと、今後の課題など】 |                                    | 【先生から】 |    |
| 4                                  |                             | 比較して説明する方法が分かりましたか<br>(例) ○○と●●の違い | A B C  |    |
|                                    | 【学習して分かったこと、努力したこと、今後の課題など】 |                                    | 【先生から】 |    |
| 5                                  |                             | 原稿用紙の正しい使い方が分かりましたか                | A B C  |    |
|                                    | 【学習して分かったこと、努力したこと、今後の課題など】 |                                    | 【先生から】 |    |
| 6                                  |                             | 四つの中から課題を決めて自分の原稿を書くことができましたか      | A B C  |    |
|                                    | 【学習して分かったこと、努力したこと、今後の課題など】 |                                    | 【先生から】 |    |
| 7                                  |                             | 丁寧な字で清書することができましたか                 | A B C  |    |
|                                    | 【学習して分かったこと、努力したこと、今後の課題など】 |                                    | 【先生から】 |    |
| 8                                  |                             | 友達の作品のよいところが見付かりましたか               | A B C  |    |
|                                    |                             | 分かり易く説明する力が付いたと思いますか               | A B C  |    |
| 【学習して分かったこと、努力したこと、今後の課題など】        |                             |                                    | 【先生から】 |    |
| 1 年    組    番                  氏 名 |                             |                                    |        |    |

### ▼提案4「長期的・総括的に調査する」

長期的・総括的に追跡調査としてNRTやCRTなどの標準学力検査を活用する方法があります。もちろん、単純に比較することができない場合もありますが、結果に現れた数値によって、教師が努力して得た成果や、引き続き指導すべき点を明確にすることができます。

この他、表2のようなアンケートを利用して、教師の学習指導や学級経営に対する子どもたちの評価を試みている学校もあります。学級担任として、あるいは学習指導者として、教師がさらに力量を高めていくための一つの方法ではないでしょうか。

表2 教師の学習指導や学級経営に対する子どもたちの評価アンケート

#### 授業・学級アンケート

A：とてもよい B：よい C：あまりよくない D：努力が必要

|        | No. | 内 容                      | 評 価     |
|--------|-----|--------------------------|---------|
| 授<br>業 | 1   | 先生は分かり易い授業をしようと工夫していますか  | A B C D |
|        | 2   | 先生は一人一人のことを考えて授業を進めていますか | A B C D |
|        | 3   | 先生は分かり易い話し方をしていますか       | A B C D |
|        | 4   | 先生は黒板にていねいに字を書いていますか     | A B C D |
|        | 5   | 先生の授業で力が身に付いていると思いますか    | A B C D |
|        | 6   | 先生の授業は楽しいですか             | A B C D |
| 学<br>級 | 7   | 先生は学級をよい雰囲気にならそうとしていますか  | A B C D |
|        | 8   | 先生は一人一人のことをよく見ていてくれていますか | A B C D |
|        | 9   | 先生は相談にのって来てくれていますか       | A B C D |
| 学<br>校 | 10  | 学校で楽しみなことがありますか          | A B C D |
|        | 11  | 学校は楽しいですか                | A B C D |



## 具体例5 保護者や地域の方々と連携を図る校内研究

1970年代後半から80年代の「荒れる中学生」「校内暴力」、その後の「いじめ問題」の表面化など、深刻な教育の現状から「学校万能主義」「学校と教師の限界」が叫ばれ、臨教審答申で「開かれた学校づくり」が提言されました。また、2000年には、「学校評議員」制度が導入され、「開かれた学校づくり」のポイントが少しずつですが、明確になってきました。そのポイントを次のように整理してみました。

- (1) 学校施設・設備を保護者や地域の方々へ開放
- (2) 公開講座などを開催し、教師のもつ知識や技能を保護者や地域の方々へ提供
- (3) 保護者や地域の方々をゲストティーチャーとして活用
- (4) 学校情報の公開
- (5) 個人情報の開示
- (6) 学校のアカウンタビリティーの必要性
- (7) 学校評議員制度
- (8) 保護者や地域の方々が学校運営に参画

本市においても多くの学校で具体的な取組が行われています。特に、学校施設・設備の開放を中心としたハード面の公開は、既に十分に浸透し、社会体育分野では、その成果も現れています。しかし、(2)～(8)については、緒に就いて間もない感があり、まだまだ手探りの状態であることは否めません。

そこで、「開かれた学校づくり」を推進していく観点から、これからの校内研究について、今後の方向性を考え、四つの提案をします。

### 次のような手だてを考えました！ ～ワンポイント解説～

- ◆提案1 「保護者や地域の方々をゲストティーチャーとして教育活動へ活用」
- ◆提案2 「保護者や地域の方々に学校のもつ専門的な知識や技能を提供」
- ◆提案3 「保護者や地域の方々による授業評価の実施」
- ◆提案4 「校内研究の成果を積極的に公開」

### ▼提案1「保護者や地域の方々をゲストティーチャーとして教育活動へ活用」

授業内容について、造けいの深い保護者や地域の方々をゲストティーチャーとしてもっと活用すべきではないでしょうか。例えば、国語では昔話の語り部の方、社会科では、地域の歴史家や戦争体験者の方、理科では植物の生長に精通している農家の方などからお話をしていただければ、子どもの学習意欲も高まり、理解が深まります。総合的な学習の時間でも、地域学習や職場訪問などの際に、保護者や地域の方々に事前にお話をしていただければ、学習に対する子どもの意識付けを図ることができます。

こうした取組を通して、保護者や地域の方々との心の交流が生まれ、相互の信頼関係が構築され、ゲストティーチャーが支える教育活動がシステムとしてできあがってきます。

### ▼提案2「保護者や地域の方々に学校のもつ専門的な知識や技能を提供」

教職員のもつ専門性に焦点を当て、専門教科や得意分野を生かし、保護者や地域の方々を対象とした「公開講座」を実施します。そのためには、事前の教材研究等の準備も必要になります。そうした取組が、自らの専門教科や得意分野に関する資質能力を磨くことにもつながります。

こうした取組を通して、教職員と保護者や地域の方々との一体感が生まれ、学び合うパートナーの関係が築かれていきます。

### ▼提案3「保護者や地域の方々による授業評価の実施」

子どもたちや同僚教師はもとより、保護者や地域の方々からの授業評価の実施も考えてみてはどうでしょう。事前に授業参観の観点（評価の観点）を提示して授業を実施します。また、可能であれば、保護者や地域の方々にも授業後の検討会にも参加していただき、子どもたちの学びの姿を共に語り合います。教師は自らの実践の改善に必要なことに気付く契機になったり、自ら気付かなかった子どもたちの変容を確認したりすることができます。

異なる目をもった方々と語り合うことで、教師は自らの実践を多面的に評価することができます。

### ▼提案4「校内研究の成果を積極的に公開」

学校ホームページの内容に、校内研究の日ごろの取組の紹介を取り入れてみてはどうでしょう。保護者や地域の方々の視点に立ち、写真や動画も取り入れ、分かり易い内容にしていきます。取組の進ちょく状況に応じて内容も随時更新していくことも大切です。また、学校ホームページを利用し、校内研究に対する保護者や地域の方々の声を学校へ寄せていただくことも必要でしょう。

学校ホームページを通して、校内研究に関して保護者や地域の方々と学校との交流拡大が期待できます。



## 具体例6

## 学校の主体性を生かし 校外のパートナーと連携を図るために ～求めるパートナーシップの基本は身近なところに～

これからの学校づくりでは、教育課程を編成・実施・評価する各段階において、校外とのパートナーシップを構築していくことが重要であると考えます。このことを踏まえて校内研究においても、多様なパートナーとの連携を図り、その絆を確かなものにしていくことが必要です。

さて、校内研究における校外のパートナーとしては、同校種の学校、接続する異校種の学校、大学、研究機関、塾や予備校などの民間教育機関、保護者、地域の方々、卒業生、人材バンクに登録してくださった皆さん、学生ボランティア、学校教育支援型NPO等の皆さんを挙げることができます。このようなパートナーとの連携は、いずれも意義深いものであると思います。ただ、わたしたちは、このような連携の望ましい在り方を構築するには、経験不足の感も否めません。

そこで、校外連携のベースとなる、「保護者・地域の方々」とのパートナーシップをどのように構築していくかということを探ることにより、「教育課程を支えるパートナーシップ」の基本的な在り方を見つめることができるのではないかと考えました。

### パートナーシップ構築のためのベースとなる提案として

#### ～学校の主体性を生かしながら柔軟な対応を～

#### ◆ 提案1 求めるために与えませんか

わたしたちがパートナーシップを考えると、「本校の教育のために、子どもたちの確かな成長のために、こうしてもらうことが必要だ」と、いつの間にか、相手への要求が先にくるパターンになってはいないでしょうか。相手の人や組織を動かすには、学校の主体性を保持しつつも、まず、わたしたちから、パートナーの側に立って考え、行動していくことが必要なようです。まさに、「求めるために与えていく」気持ちです。そういえば、ギブ・アンド・テイクでは「ギブ」が先にきますものね。

#### → 事例1 「保護者の方々とのおさげなない連携から出発して」

#### ◆ 提案2 パートナーが求めるものを見極めて連携しましょう

さて、パートナーとなる人や組織が求めているものは何なのでしょう。例えば、地域の方に「こんなことを考えているのですが、〇〇していただけないでしょうか。」と、お願いして、相手の方が「いいですよ。」と、お答えになるとき、その方はどんなことを考えながら承諾してくださったのでしょうか。こちらの熱意や考えに共感してくださったのか、日ごろ自分が考えていたことを実行する機会ととらえられたのか、子どもたちのためならと思われたのか、いろいろ考えられます。相手の方の気持ちがわたしたちの思いと一致しているときはよいのですが、長いお付き合いで気持ちが変わることもあります。どうやら、学校の主体性を生かすためには、パートナーの考えや行動の奥にあるものを見極めて連携していくことが必要なようです。

#### → 事例2 「地域の方々とのおさげなない連携のために」



## ▼事例1 「保護者の方々とのおさげない連携から出発して」

とある小学校。学年主任のA先生は、受け持っている3年生の学芸会の練習の参観を保護者の方々に呼び掛けました。それに応じて集まった10数名のお母さんたちは、劇の練習を楽しく見守りました。1時間が終わって帰ろうとするお母さんたちにA先生は呼び掛けました。「よろしかったら、劇の舞台ステージにセットするバック絵を描いてくださいますか。」

先生と子どもたちで台本を創り上げ、主体的に活動する子どもたちの練習の様子から、A先生の日ごろの指導の在り方を好意的に受け止めてくださっていたお母さんたちは、教育ボランティア活動の一環として、A先生の簡単なラフスケッチを基にして、自分たちで相談しながら、喜んでバック絵を描いてくださいました。

そして、学芸会保護者公開当日。子どもたちの笑顔あふれる演技に感動したお母さんたちは、自分たちが描いたバック絵が効果的だったことにうっとりすると同時に、自分も子どもたちの劇に進んで参加したという実感も味わったのでした。

そんなことがあってから、ややしばらくたって、A先生が研究授業を行いました。このときも授業の参観を保護者の方々に呼び掛けました。授業をご覧になった保護者の方々にお配りした指導案が「とってもステキね」とクラスのお母さんたちの間で評判を呼んで、授業を参観することができなかった皆さんの間で回覧されたそうです。学校行事や授業研究への保護者の方々の参画も、こんなことからスタートすると、順調に進むかもしれません。

さて、私たちは、A先生の実践から何を学ぶのでしょうか。A先生がギブ・アンド・テイクで保護者へ与えた「ギブ」は何だったのでしょうか。表面的には、授業の参観だったり、上手なバック絵が描けた満足感だったりするようにも思えます。実は、「子どものよりよい成長」と「子どもたちが自己効力感をもって過ごす楽しい学校生活」だと思うのです。そして、A先生が保護者の皆さんからいただいた「テイク」の本質は「信頼と協力」だったのでしょうかね。いずれにしても、さりげなく実践を積み重ねる中で、パートナーの気持ちを育てていくことができれば最高です。

## ▼事例2 「地域の方々と望ましい連携のために」

地域の方々と連携で得たノウハウは、連携相手が求める反対給付とも関連して、他の校外連携を進める場合に参考になります。B先生の具体例から対応策を考えてみます。

- ・ 地域の農家の方々のご協力をいただいて、ある学年で「米作り」がスタート。初年度、2年目と順調に総合的な学習の時間が実施されていきました。保護者の方々からも、地域の方々からも好評です。しかし、3年目に入る頃から、地域の方々の思いや願いが強すぎて、B先生の構想から遠ざかっていくようでした。

**※ここがポイント！ → 連携を始める際の十分な話し合いと継続的な調整の場の設置**

- ・ 年に数回、〇〇講座と銘打って、地域のボランティアの皆さんが得意なことを子どもたちに教えてくれます。子どもたちも自分のやりたいことができてうれしそう。そんな笑顔に先生役の地域の皆さんもにっこりです。でも、回を重ねるにつれて、講師先生方の考え方の違いからか難しい問題も出てきました。

**※ここがポイント！ → 連携の内容を構想する段階での熟慮と適材適所の講師活用**

お互い人間ですから、いろいろな思いはあるものです。ただ、原点は「子どもたちのために」です。相手を尊重しつつも、学校の主体性を生かした連携をしたいものです。

## VII おわりに

今、学校には、校内研究を通して、教師間で児童生徒観や教育観を共有し、地域の実態や保護者の要望等に応じた特色のある学校づくりを実現していくことが求められている。また、不断の努力と着実な教育実践の積み重ねの上に、教えるプロとしての資質能力を形成することが求められている。

学校では、共同で進めることの難しさや教師間の研究意欲の差など、校内研究推進上の課題も見られる。校内研究は、学校教育目標の具現化を目指し、特色ある学校づくりの推進あるいは学校課題の解決に資する取組でありたい。

本研究は、本市小・中学校の校内研究の現状とこれからの校内研究に対する研究主任と研究推進委員の意識を踏まえ、本市小・中学校の校内研究の改善と充実に資する方策を探った。まず、校内研究の現状とこれからの校内研究に対する研究主任と研究推進委員の意識について質問紙調査を行った。次に、調査結果をもとに、校内研究の改善と充実のための視点を整理した。さらに、整理した視点を踏まえ、これからの学校が目指す校内研究の考え方と進め方の具体例を提案することができた。

今後、本市小・中学校の校内研究の改善と充実を図る際の一助になれば幸いである。

## ●参考文献

- ・教育職員養成審議会 1997『新たな時代に向けた教員養成の改善方策について（教育職員養成審議会・第1次答申）』
- ・教育職員養成審議会 1999『養成と採用・研修との連携の円滑化について（第3次答申）』

## ●委嘱研究員

|              |       |
|--------------|-------|
| 宮城教育大学助教授    | 遠藤 仁  |
| 仙台市立原町小学校教頭  | 菅原 修  |
| 仙台市立旭丘小学校教諭  | 星野 功雅 |
| 仙台市立片平丁小学校教諭 | 近澤 裕子 |
| 仙台市立広瀬小学校教諭  | 及川 俊  |
| 仙台市立柳生中学校教諭  | 別府 成裕 |
| 仙台市立沖野中学校教諭  | 小西 理恵 |
| 仙台市立田子中学校教諭  | 菅原 裕樹 |

## ●長期研修員

|              |       |
|--------------|-------|
| 仙台市立沖野東小学校教諭 | 稲葉 俊一 |
| 仙台市立八乙女中学校教諭 | 今野 浩平 |

## ●教育局教育センター

|         |       |
|---------|-------|
| 主任指導主事  | 渡部 力  |
| 指導主事    | 篠原 洋治 |
| 指導主事    | 新山 弘幸 |
| 指導主事    | 齋藤 嘉則 |
| ○指導主事   | 猪股 亮文 |
| ○は事務局担当 |       |

# 仙台市小・中学校 20 年経験者教員への意識調査

## ■要 約

この研究は、仙台市小・中学校 20 年経験者教員の意識を探りながら、教員としての資質力量を高めていくための要因や教員としての成長の過程について考察したものである。調査の回答から 20 年経験者教員は校内での研修を中心とした自己研修を積み重ね、学び続けることが大切であると考えていることが分かった。

## ■キーワード

☐ 20 年経験者教員の意識

☐ 力量向上の要因

☐ 教員としての成長の過程

☐ 教員同士の学び合い

☐ 児童生徒、保護者から学ぶ

☐ 後輩へのアドバイス



# 目 次

|                               |    |
|-------------------------------|----|
| I 主題設定の理由                     | 53 |
| II 研究の目的                      | 53 |
| III 調査の概要                     | 53 |
| 1 調査の目的                       |    |
| 2 調査の内容                       |    |
| 3 調査対象                        |    |
| 4 調査数                         |    |
| 5 調査実施期間                      |    |
| 6 調査方法                        |    |
| IV 調査結果の分析と考察（20年経験者教員への意識調査） |    |
| 1 これまでの歩み                     | 53 |
| 2 現在                          | 57 |
| 3 これから                        | 61 |
| 4 10年経験者教員へ                   | 64 |
| V 研究のまとめ                      | 66 |
| VI おわりに                       | 67 |
| 参考文献 委嘱研究員                    | 68 |
| 資料編                           | 69 |
| 調査用紙                          | 84 |

## I 主題設定の理由

平成14年度、仙台市教育センターでは教員のライフステージにおける職能成長の視点から、「仙台市小・中学校10年経験者教員の意識調査」を実施した。本調査は、学校運営の中心となって校務に従事する教員像を探る切り口として、10年経験者教員の立場や意識を探る中から、学校運営の視点から教員に求められる資質や能力を探ろうとしたものである。その結果、次の2点が分かった。

第1は、教員は先輩教員から学んでいる実態がある（先輩の教師からの影響、「学びのモデル・教えるモデル」がある）ということである。第2は、現状では学校運営の中心となって活躍しているのは、経験20年前後の教員だということである。

前年度の調査研究をもとにすれば、20年経験者教員の意識や実践に、学校運営の中心としての自覚や全体を見通した取り組みがあるものと考えられる。

今回の調査は、教員の力量向上形成を図り成長する取り組みを明らかにする目的で「これまで」「現在、これから」「アドバイス」の三つの大項目で実施した。力量形成の要因、過程を読み取るため、20年経験者教員に10年前を振り返ってもらい、当時の意識や教育観をとらえた。二つ目は現在の意識や教育観をとらえた。三つ目は10年経験者教員の意識や教育観と比較しながら力量形成の要因や教員としての成長の過程を考察した。四つ目は後輩語り継ぎたい大切な専門性や資質能力がどのようなものをメッセージとしてとらえた。

そこで、20年経験者教員の意識を、主に「10年経験者教員へのアドバイス」という形の調査から教員の力量形成の要因や教員としての成長の過程を明らかにすることができると考え、本主題を

設定した。

## II 研究の目的

20年経験者教員を対象に、「10年経験者教員へのアドバイス」という形で意識調査を実施し、教員が資質力量の向上を図るための要因及び教員としての成長の過程を明らかにすることを目的とする。

## III 調査の概要

### 1 調査の目的

20年経験者教員の意識を探る。

### 2 調査の内容

20年経験者教員のこれまで・現在、これからの意識

### 3 調査対象

仙台市小・中学校20年経験者教員  
(鶴谷養護学校を含む)

### 4 調査対象

20年経験者教員150名中

回収数120名 回収率 80%

(小・男32名女42名/中・男33名女13名)

### 5 調査期間

平成15年8月25日～9月12日

### 6 調査方法

質問紙法

## IV 調査結果の分析と考察

### 1 これまでの歩み

#### (1) 自己研修の方法

あなたの自己研修は、主にどのような方法で行ってきましたか。

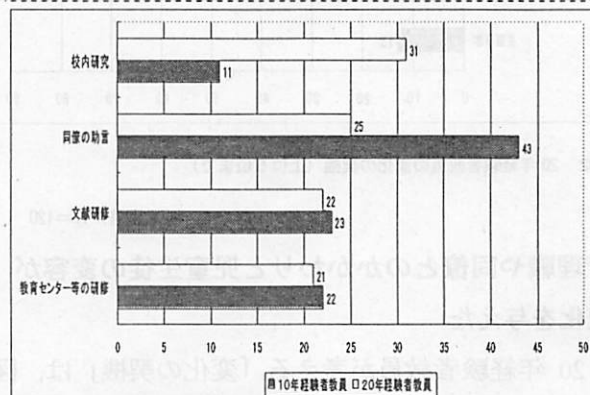


図1 10年および20年経験者教員の自己研修の方法

(%) (一つ選択) 10年経験者教員 n=120 20年経験者教員 n=120

**校内研究が自己研修の中心**

20年経験者教員が考える「自己研修の中心」は「校内研究」を挙げている人が31%と最も高い。次いで「校内の先輩同僚の助言」が25%である。

さらに「文献研修」21%、「教育センターの研修会参加」10%、「その他の研修会参加」11%と続く。

平成14年度に実施した10年経験者教員の意識調査と比較したのが図1である。10年経験者教員は、「校内の先輩同僚の助言」が43%と最も高くを示し、「校内研究」が11%と第3位である。

これは、10年経験者教員が、まず、一番身近にいる先輩や同僚教員に相談し、助言を受けながら教育活動を行ってきたのに対して、20年経験者教員は、10年経験した後、自分から企画し、中心になって仕事を進める学年主任や研究主任、各教科主任などの校務を担当し、自ら授業実践や校内研究に取り組んできているということも考えられる。

**(2) 影響を受けたこと**

教員として自分の在り方に影響を与えたと思うことは何ですか。(最も当てはまるものを上位3つまで選んでください。)

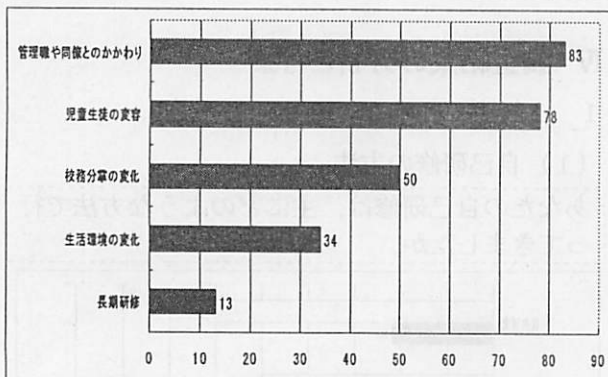


図2 20年経験者教員の変化の契機(上位5位まで)

(%) (複数回答) n=120

**管理職や同僚とのかかわりと児童生徒の変容が変化を与えた**

20年経験者教員が考える「変化の契機」は、図

2に示すように「管理職や同僚教員とのかかわり」をあげている人が83%と最も高い。次いで「児童生徒の変容」78%、「校務分掌の変化」50%、「生活環境の変化(結婚や出産など)」34%、「他校種の経験」13%、「長期研修」13%と続く。

回答者120人中76人、63%にあたる人が、上位3つ以内に「管理職や同僚教員とのかかわり」と「児童生徒の変容」を挙げている。

選択の状況を細かく見ると、1番目に「管理職や同僚教員とのかかわり」を選び、2番目に「児童生徒の変容」を選んでいる教員が38人、1番目に「児童生徒の変容」を選び、2番目に「管理職や同僚教員とのかかわり」を選んでいる教員が13人となっている。

20年経験者教員は身近な人とのかかわりが自身の在り方に変化を与えたと考えている。

**変化の契機は10年経験者教員と同じ傾向、生活環境の変化は男女差**

変化の契機については、20年経験者教員と10年経験者教員共に、「管理職や同僚とのかかわり」

「児童生徒の変容」を1, 2位に挙げている。「校務分掌の変化」については、双方に17%の開きがある。これは、経験を重ねることによって、学年主任や研究主任などの責任のある仕事に就いたり、他の教員に指導・助言する立場になったりすることが、教員としての在り方に影響を与えているということが考えられる。

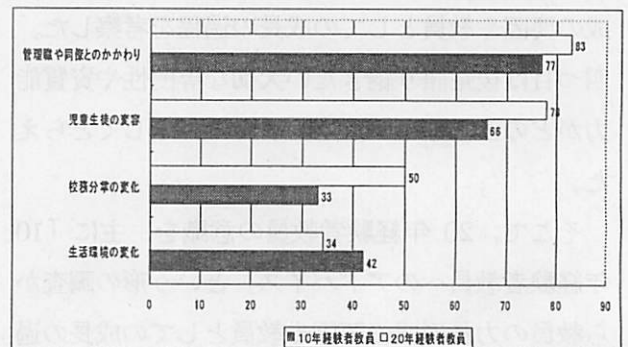


図3 10年および20年経験者教員の変化の契機(上位4位まで)



(%) (複数回答) 10 年経験者教員 n=120 20 年経験者教員 n=120

「生活環境の変化」については、男女で大きな違いが見られる。「生活環境の変化」を挙げている 41 名の内訳を見ると、女性教員は 25 名、男性教員が 16 名である。また、女性教員の回答者全 55 名中 45%にあたる 25 名が、上位三つ内に「生活環境の変化」を挙げている。

### (3) 支えや励みになっていること

これまでの歩みを振り返って、教師としての自分の支えや励みになっていることがあればその一つをお聞かせください。(記述式)

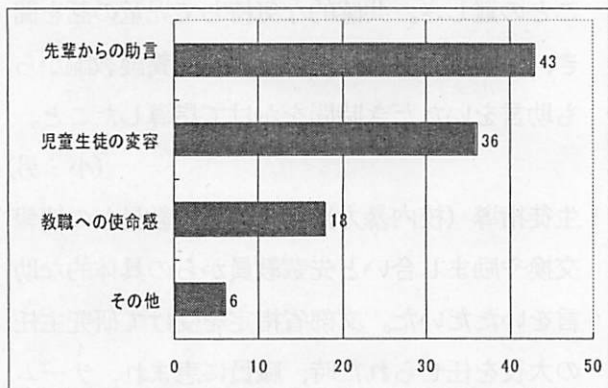


図 4 20 年経験者教員が支えや励みになっていること

(%) (一つ選択) n=120

### 先輩、同僚教員からの助言が支えや励みになっている

回答内容を類型化して集計すると図 4 のように、先輩からの助言、児童生徒の変容、教職への使命感の大きく三つのグループに類別できた。先輩、同僚、子どもや保護者とかかわりを大切にしていることが、教員自身の支えや励みとなっていることが分かる。自由記述には失敗したことをも含む多様な経験を乗り越えて子どもから学び、周囲に励まされつつ 20 年を経験してきたという内容が多くある。心に深く刻まれた「教学相長」の具体的な姿が読み取れ、教員としての支えや励みになっているものと思われる。以下、記述から主なものを抜粋してまとめた。

#### 先輩からの助言

- ・指導上分からないこと、つまりいたことがあつ

たら子どもから学ぶこと。(小・女)

- ・教師は子どもたちに夢を与えるのが仕事。子どもたちと向き合うことが大切。自分自身の心を耕し磨くこと。(中・女)

- ・先輩教員から勧められて入ったサークルで知り合った人達からの影響が大きい。授業案、学級経営から始まり、教員の仕事全般にかかわる示唆に富んだ意見や考え方、実践を聞くことで自分の気持ちが前向きになった。(小・男)

### 児童生徒の変容

- ・子どもが「分かった」という時の笑顔と、子どもたちと心が通じ合ったと感じたとき。(小・女)

- ・卒業しても「自分は今こうやってがんばっているよ」という連絡を何年経ってもくれる教え子がいること。そして自分の目の前に今ががんばっている中学生がいること。(中・男)
- 年賀状や手紙などで今でも初任の頃の教え子から現在まで幅広く便りを頂くこと。その中に、一緒に過ごした日々の楽しかった思い出や、私が目指してきたことの影響が少しでも認められた時、やってきてよかったと思う。日々の子どもたちとの生活でも同じ。

(小・女)

### 教職への使命感

- ・教師の前向きな取組が生徒や保護者の心を必ず開くことができること。(中・男)
- ・結果は出なくても子どもたちと楽しめるし辛いが最後はいつもやってよかったと思えること。(小・男)
- ・学級担任は確かに忙しく大変であるが、生徒に本気でぶつかっていけばいつか必ず自分に跳ね返ってきて、今までやってきたことが無駄でなかったと感じた時。(中・男)

#### (4) 悩み苦労したこと、解決した経験

これまでの教員生活において一番苦労したこと、悩んだことは何でしたか。また、その問題にどのように対処しましたか。(記述式)

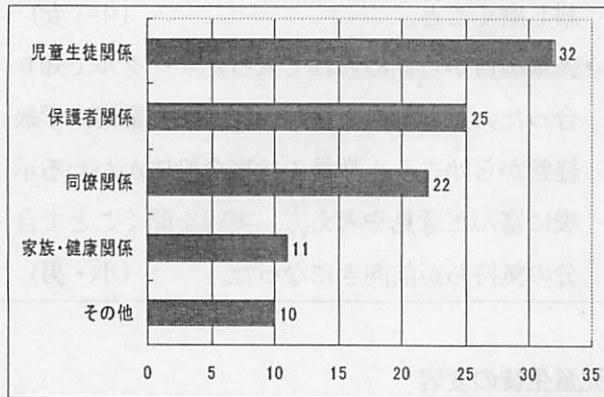


図5 20年経験者教員が悩み解決した経験 (%) (一択選択) n=89

#### 先輩からの助言が悩みの解決に役立っている

回答を類型化して大別すると図5に示すようになった。

20年経験者教員が苦労した主な悩みは、児童生徒の指導や保護者との関係に関する内容である。

自由記述には、その多くに具体的な解決策があげられており、悩み苦労しながらも何とか解決できた、また精一杯取り組んだという回答である。

特徴として、一人で抱え込むのではなく、同僚や先輩のアドバイスを積極的にもらったという回答が多く見られたことである。

また、学級や集団の児童生徒とのかかわりの中から自分で解決策を見出したという回答もあった。このことから自信をもって仕事に取り組んでいる姿が浮かび上がってくる。

また、職場の人間関係での悩みでは、職員間のあつれきや指導上の対立を感じながらも、教員同士が協力し合うことが指導上の最良の方策と考え、何とかチームワークが取れるように努力しているという前向きな回答が多かった。

児童生徒の変容についての記述では、児童生徒との人間的なかわりを通して、共に成長を実感している20年経験者教員の姿が見られる。そしてそのことが児童生徒の変容に好影響を与えたと記述

した回答が多い。

悩み苦労したこと、解決した経験についての記述には、具体的な言葉が多いこと、そして、時間や場所等、細かい描写が多くある。このことは、20年経験者教員が切実な課題として取り組んできたことを物語っていると考える。以下、記述から主なものを抜粋してまとめた。

#### 児童生徒の指導の指導に関する悩み

- ・高学年での児童のトラブル。心を通い合わせることの難しさ。共感的な気持ちで児童の話聞き、保護者とも密に連絡を取り、養護教諭からも助言をいただき時間をかけて指導したこと。

(小・男)

- ・生徒指導(校内暴力)で、同期の教員との情報交換や励まし合いと先輩教員からの具体的な助言をいただいた。文部省指定を受けて研究主任の大役を任せられた時、職員に恵まれ、チームとしての協力体制づくりと実践に取り組むことができた。

(小・男)

- ・前学年で学級崩壊しそうになった学級を次の年に突然任された時。授業が成立しない、児童の気持ちが分からなくなり、教室に向かうのが初めて恐ろしくなった。とにかく、一人一人のよさを見つけるために毎日のように全員と一対一で語り合い、一人一人の学習のつまづきまで戻って、とことん学習指導を行った。校内の先生方にも理解と協力を求めた。卒業時には、「もっとこの学級で勉強したい」という声が聞かれるようになり、落ち着いて卒業式を終えることができた。

(小・女)

#### 保護者との関係での悩み

- ・保護者と子どもの指導のことで意見が食い違い、互いに悩み苦しんだことがあった。でも、



保護者とは「お互いこの子のために今真剣に考えている」ということで理解し合うことができた。あの時（2年目）は辛かった。その子を6年間ずっと見守り続け、卒業まで見届けることができ、今でも交流がある。母親の相談相手をするにより、私自身も刺激を受けている。

（小・女）

・児童をはさんで保護者とどう対応していけばよいか悩んだ。とにかく対話が必要と思い、電話面接・交換日記など毎日接触するようにした。

（小・女）

### 職員間の人間関係での悩み

- ・職員間、特に同学年で人間関係。学年経営や学級経営について考えが異なる場合は大変苦労した。自分のやり方、考え方に自信をもち正しいと信じ、自分の理想とする子どもたちの姿を思い描いてがんばった。（中・女）
- ・他の担任との考え方のギャップ。保護者や管理職に学級経営に対する自分の思いが伝わらなく孤独感を味わった時。とにかく自分なりに誠意を示して行動し、子どもが成長してくれることにのみ力を注いだ。（小・女）

## 2 現在

### （1）10年経験時と比べて身に付いたと思う力

あなたは教職20年を経験して10年経験時と比べてどんな力がついたと思いますか。

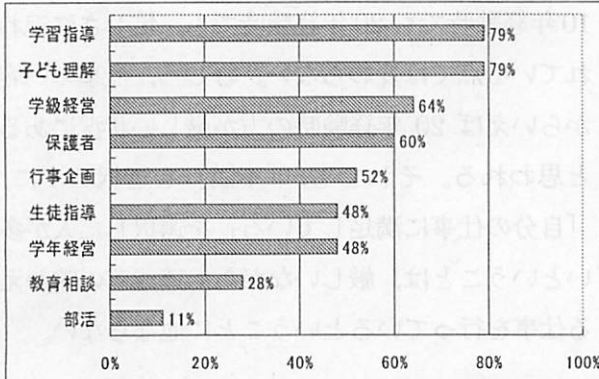


図6 この10年で身に付いたと思っている力

(%) (複数回答) n=120

子ども理解、保護者や外部とかかわる力、行事企画力が付いたと思っている

20年経験者教員が考える「この10年で身に付いたと思っている力の中心」は、図6に示すように「学習指導」「子ども理解」を選択した人が79%と、最も高い。次いで「学級経営」64%、「保護者・地域・外部機関とのかかわり方」62%、「学年・学校行事等の企画」53%、「生徒指導」49%、「学年経営」47%、「教育相談」26%、「部活動等課外活動の指導」9%と続く。ここで注目すべきは、「行事企画力」、「保護者や外部とかかわる力」が付いたと答えた20年経験者教員が多かったことである。単純な比較はできないが、これは昨年度の10年経験者教員の意識との違いともいえる。

選択肢の中から3つを選ぶ方法で回答したが、10年経験者教員については、「学校行事の企画」を選択した教員が21%、「保護者とかかわり方」が42%であった。まず、20年経験者教員の校務は、現在、教務主任や学年主任が44人、研究主任や生徒指導主事が13人である。これらの校務に従事している教員は、学級担任であっても、学年の様々な行事の企画を行ったり、児童会や生徒会の行事を行ったりする立場にあることが多い。

一方、「部活動等の指導力」を選択した教員は、10年経験者教員の13%に比べて減少している。

また、「保護者とかかわり方」を選択した教員がかなり増えているが、教員としての経験を重ねたこととともに、保護者の気持ちがわかる年齢に達し、保護者との関係をうまく築いていけるようになったと考えている20年経験者教員が多いことを表しているものとも考えられる。全体としては、校務分掌が教員を成長させる大きな要因となっていることを示す結果となっている。



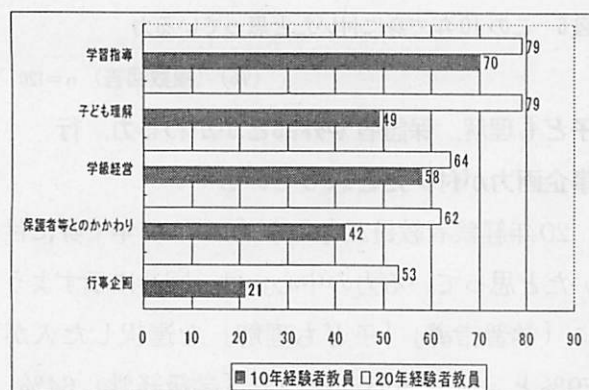


図7 10年及び20年経験者教員がこの10年で身に付いたと思っている力(上位5位まで)

(%) (複数回答) 10年経験者教員 n=120 20年経験者教員 n=120

## (2) 仕事への満足

あなたは今、教員としてご自分の仕事に満足していますか。

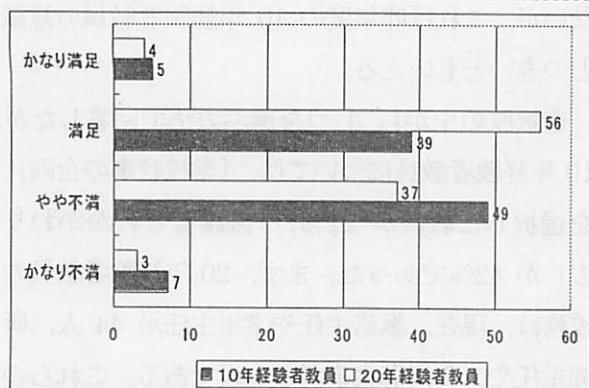


図8 10年及び20年経験者教員の仕事への満足

(%) (一つ選択) 10年経験者 n=120 20年経験者 n=120

## 10年経験者教員より満足度が高い20年経験者教員

20年経験者教員の回答は図8に示すように「かなり満足」が4%、「満足」が56%、「やや不満」が37%、「かなり不満」が3%を占め、全体的には満足傾向が60%、不満傾向が40%であった。

これは昨年度の10年経験者教員の意識と異なっている。10年経験者教員の満足傾向は44%、不満傾向は56%であった。

このことが何を意味するところかを、次の

理由のところから考察する。

## <満足の理由>

かなり満足、満足と答えた方に伺います。その理由は何ですか。

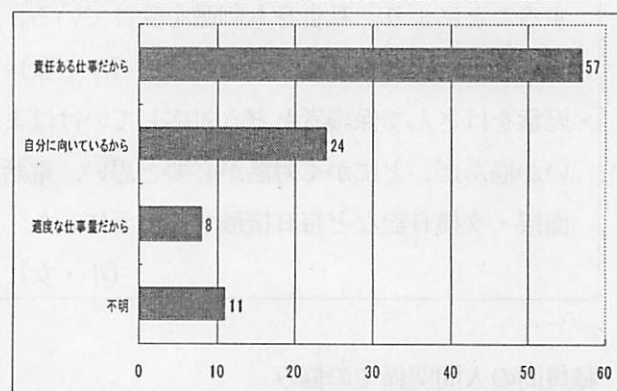


図9 20年経験者教員の満足の理由

(%) (一つ選択) n=72

## 20年経験者教員は教職の仕事の意味を見い出しつつある

20年経験者教員の回答は、図9に示すように、「責任ある仕事で達成感がある」が57%、「自分に向いている」が24%、「適度な仕事量である」が8%である。その他、「仕事量が多いが、やりがいは感じる」「自分のできる範囲で一生懸命やっているから」の回答があった。10年経験者教員と20年経験者教員の仕事への満足感の違いは、過半数の人が選択した「責任ある仕事で達成感がある」にあるのではないと思われる。10年経験者教員で「責任ある仕事で達成感がある」を選択していた人は23%に過ぎず、20年経験者教員のそれとは大きな開きがあることがわかった。10年経験時でも20年経験時でも、忙しさに追われている点では変わらない。むしろ、仕事の内容からいえば20年経験時の方が厳しい状況にあると思われる。それでも、「不満」を選択せずに、「自分の仕事に満足している」を選択した人が多いということは、厳しいながらも達成感の味わえる仕事を行っているということに他ならない。

### ＜不満の理由＞

かなり不満、不満と答えた方に伺います。その理由は何ですか。

**20 年経験者教員の中で不満を持っている人の理由は現在の仕事を踏まえた前向きな意味での不満が多い**

20 年経験者教員が挙げる仕事への不満は、「仕事量が多い」が 42%で最も高い。これは昨年度 10 年経験者教員の場合とほとんど同じであった。

また、その他として「やることが多く思うように仕事を進められない自分への不満」「もっと勉強したいのに時間がとれない」等、多様な理由の内容が似ている点も一致している。20 年経験者教員が 10 年経験時で多く見られたのは、家庭と仕事の両立が難しく、思うように仕事ができないという回答であった。

20 年経験者教員の回答も、育児の時期をすぎたためか「家庭」という言葉はなくなったが、「時間がなくて、思うように仕事をやり遂げられない」や「もっと勉強したいのに、時間が取れない」、「まだまだ満足できるような仕事はできていない」というように、現在の仕事を反省して、「不満」を選択した教員も多い。

このような前向きともいえる「不満」意識は、場合によっては「満足」に変わることもありえるものと思われる。

「やりがいを感じない」を選択した教員は 17%、「自分に向いていない」を選択した教員は 19%だった。20 年を経験すると、10 年経験時にはまだ見えてこなかった教員としての自分の姿がはっきりと浮き彫りにされてくることは間違いあるまい。

### (2) 心がけていること

あなたが現在常に心がけていることはどんなことですか。

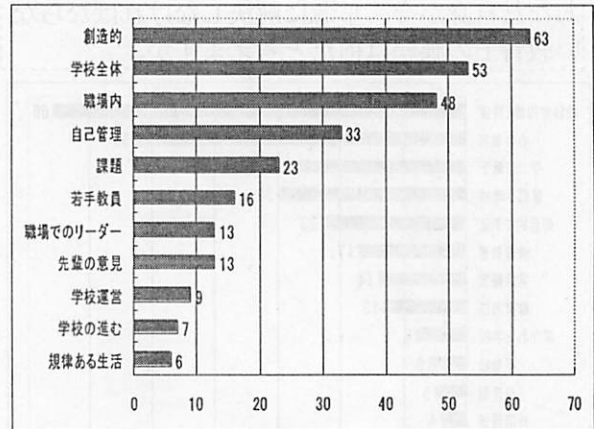


図 10 20 年経験者教員が現在心がけていること

(%) (複数回答) n=120

20 年経験者教員が心がけていることは「創造的に少しでもよりよい仕事に責任を持って取り組む」が 65%で最も高い。次いで、自分の仕事ばかりでなく学校全体のことを考える」が 53%「職場内の人間関係を大切にする」が 48%であった。これは、10 年経験者教員の選択順とほぼ同じであるが、その割合が大きく異なる結果となった。

昨年の 10 年経験者教員への調査では、「仕事に責任を持って取り組む」が 79%であり、他の「和を大切にする」(36%)や「全体のことを考える」(35%)のおよそ 2 倍の数値であった。これに対して、20 年経験者教員は、「全体のことを考える」(53%)や「人間関係を大切にする」(48%)数が、「仕事に責任を持って取り組む」(63%)こととほぼ同じ程度に心がけられている。これらの意識は学校運営の中心として活躍する 20 年経験者教員の自覚を表している結果だと考えられる。自分のことだけで精一杯であった時期を過ぎ、職場の中の自分の立場や役割を自覚して働いている姿がうかがえる。しかし、その結果と裏腹に、「職場でのリーダーシップを発揮する」ことが 12%、「若手の教員を育てる」ことが 16%と、全体の中であまり多くなかった。

### (4) 早急に解決すべき教育上の課題

あなた自身が今、早急に解決しなければならない教育上の課題は何だと考えますか。

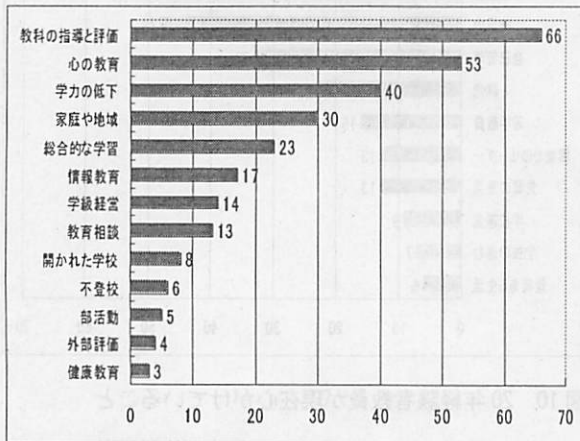


図 11 20 年経験者教員の教育上の課題

(%) (複数回答)  $n=120$

20 年経験者教員は「教科の指導」「心の教育」、「学力の低下」「家庭や地域社会との連携」を教育上の課題ととらえている

20 年経験者教員が考える教育上の課題は図 11 に示すように「教科の指導と評価」が 66%、「心の教育」53%、「学力の低下」が 40%、「家庭や地域社会との連携」30%、「総合的な学習の時間」が 23%、「情報教育」が 17%、「学級経営」14%、であった。

10 年経験者教員、20 年経験者教員のどちらも「教科の指導と評価」に関することを第 1 位に挙げている。教科指導と評価の積み重ねによる質の高い授業づくりが、経験年数に変わりなく教師にとっての本質的かつ最重要課題であることを示している。

2 位以下は、10 年経験者教員が「総合的な学習」41%、「生きる力の育成」35%、「学力低下」28%、「学級指導の在り方」24%、20 年経験者教員が「心の教育」53%、「学力低下」40%、「家庭や地域社会との連携」30%、「総合的な学習」23%、の順に挙げている。選択肢の項目が若干違うので、一概に比較することはできないが、10 年経験者教員は「総合的な学習」(41%)であり、20 年経験者教員は、「心の教育」(53%)「学力低下」(40%)である。課題のとらえ方に違いが見

られる。

自由記述の中には、こうした 20 年経験者教員の意識は、「多様な考えがあったとしても“変わらないものは変わらないもの”として残す大人の賢さが求められる(中・女)」「自分の信念や方法などをしっかりもつことは大切。しかし、時代の流れや生活の仕方、考え方などの傾向を敏感に察知し、自分の考え方や方法が今これでいいのか常に確認していくことも必要。(中・女)」といった記述からもうかがわれる。

中学校では、10 年経験者教員の 4 分の 1 近くが「部活動の在り方」を課題として取り上げているのに対し、20 年経験者教員では約 1 割にとどまっている(1 位選択は 1 名のみ)。経験を積むにしたがって、部活動指導に対する考え方やかわり方に違いが見られる。

<小中による比較>

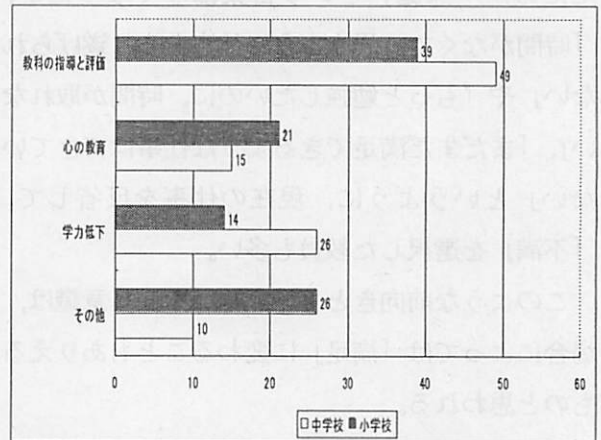


図 12 20 年経験者教員の教育上の課題 (小中別)

(%) (1 位選択) 小  $n=74$  中  $n=46$

3 位選択までを合計すると、小中どちらも「教科の指導と評価」「心の教育」「学力低下」の順となり、その割合もほぼ同じである。ただし、1 位選択に絞ってみると、小学校教員が「教科の指導と評価」39%、「心の教育」21%、「学力低下」14%、中学校教員が「教科の指導と評価」49%、「学力低下」26%、「心の教育」15%、という結果になる。注目すべきは、「教科」や「学力」に関する課題を最重要と考える教員が、小学校では



約半数であるのに対して、中学校では4分の3を占めていることである。これは、教科担任制や受験による違いだと考えられる。

### 3 これから

#### (1) 希望する役職や校務分掌

あなたがこれから就いてみたい役職や持ちたい校務分掌は何ですか。またその理由は何ですか。

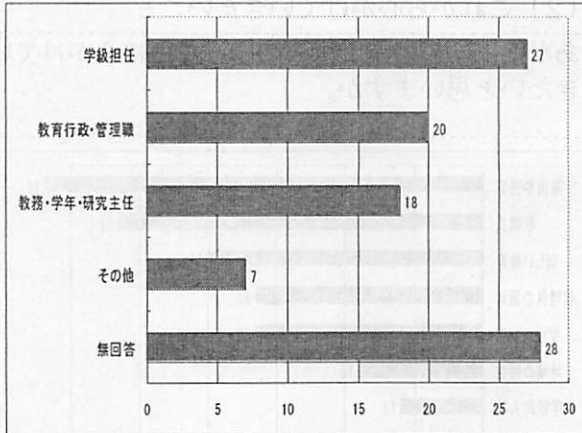


図 13 20 年経験者教員が希望する役職やもちたい校務分掌 (%) (一つ選択) n=120

#### 希望する役職や持ちたい校務分掌は多様である

20 年経験者教員が希望する役職や持ちたい校務分掌は、図 13 に示すように学級担任を希望する教員が 27% と最も高い。次いで、教育行政職・管理職が 20%、教務主任・学年主任・研究主任等の各種主任が 18% その他 7% という結果になった。未記入の回答者は 120 名中 33 名だった。

就きたい理由の主なキーワードとして、学級担任は「やりがい」「子どもと共に成長」「教育の根本・原点」を挙げている。各種主任は「組織の調整役・まとめ役」「能力・適性・専門性・資格」を、教育行政職は「広い視野」を、管理職は「理想とする学校経営」を挙げている。

教育行政職・管理職をやってみたいと思っている 20 年経験者教員のほとんどは、現在の校務分掌が教務主任、研究主任、学年主任等の主任層の立場にある。

また、20 年経験者教員の中には、少数ではあるが、家庭の事情や健康上の理由によって副担任等の就ける校務分掌が限定される教員や、与えられたポジションや必要とされる仕事はどんなものでもこなすべきと記述している教員もいる。

20 年間の経験を経て、自らの能力、適性、置かれた環境等を見つめ、それぞれ歩んでいきたい将来像を描いている様子が見て取れる。

次に選択した希望する役職・校務分掌について男女別にみると、学級担任が男性教員では 14 名、女性教員では 18 名、学年主任が男性教員では 5 名、女性教員では 7 名、教務主任が男性教員では 9 名、女性教員では 1 名、教育行政職が男性教員では 8 名、女性教員では 4 名、管理職が男性教員では 11 名、女性教員では 1 名であった。

この結果から、女性教員の方が、学級担任と学年主任を希望する人数が多く、管理職、教務主任を希望する者が少ない。男性教員は教務主任、教育行政職、管理職を希望する人数が多いことが分かった。

また、先に挙げた役職・校務分掌（学級担任、学年主任、教務主任、教育行政職、管理職）の中に希望するものがある割合は、男性教員が 92% であるのに対し、女性教員は 72% である。

以下、記述から主なものを抜粋してまとめた。

#### 学級担任を希望する理由

- ・生徒と直接かかわる多いのでやりがいがあるし、自分の性格に合っている。 (中・男)
- ・学級で児童の成長を見られることに意義を感じる。 (小・女)
- ・教育の根本の仕事であり、やったことが自分に返ってくるから。 (小・女)
- ・学級の中で、直接生徒とかかわり合う中で、生徒を育て自己をも磨きたいから。 (中・女)
- ・常に子どもたちとかかわり、直接心の動きや成長を感じていたい。 (小・女)

- ・工夫しながら自由に教育活動ができるから。

(小・女)

#### 学年主任を希望する理由

- ・組織の一員として学校経営への参加を自覚できることと、学年全体の子どもたちを広い視野で見ての変容を実感できるから。(中・女)
- ・多忙ではあるが学校全体をコントロールする立場・全般的な視野から見通しをもって自力で指導できる力を持ちたい。(小・男)
- ・年齢的にもそろそろ学年主任を経験する頃だし、みんなの意見をまとめる役割を学んでいきたい。(小・女)
- ・子どもにとっても、同僚にとっても魅力のある
- ・学年経営をしたい。(小・男)

#### 教務主任を希望する理由

- ・学校という組織の中で、自分を生かし自分の力を発揮できる校務分掌だと思うから。(中・男)
- ・教育計画の立案・実施・時間割の総合的調整などの職務に当たり学校運営に貢献したい。(中・男)
- ・教務1年目で大変慌ただしくしているため、地に足をつけて進めたい。(小・女)
- ・学校全体にかかわる仕事で、やりがいがあるのではないと思うから。(小・男)

#### 管理職を希望する理由

- ・自分が今まで培ってきたものを後輩の指導を通して還元したい。(中・男)
- ・学級担任以外の立場から学校全体を見たり考たりしたいから。(小・女)
- ・学校という組織をマネジメントしたいから。(小・男)

#### 教育行政職を希望する理由

- ・学校現場の外から学校現場を見ることで広い視野に立って教師の在り方を考えたいため。(小・男)
- ・新たな仕事にあたり、教員としてのキャリアや視野を広げたい。(中・女)

#### (2) これから心がけていきたいこと

あなたは学校の中で、どのような点に心がけていきたいと思いますか。

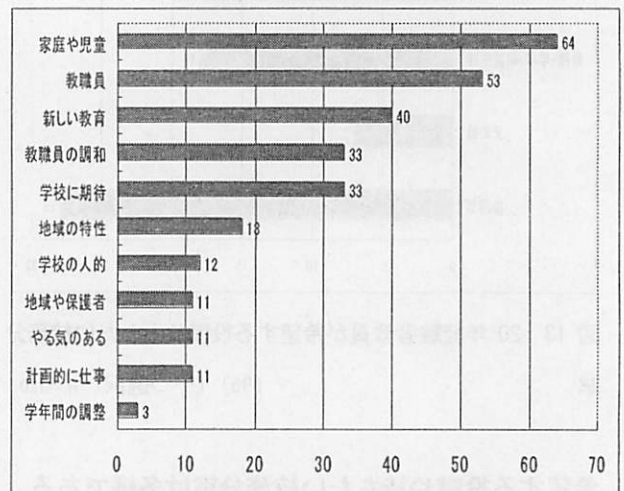


図14 20年経験者教員がこれから心がけていきたいこと

(%) (複数回答) n=120

#### 家庭や児童生徒と的確な対応を心がけたいと考えている

20年経験者教員がこれから心がけていきたいと考えることは、図14に示すように「家庭や児童生徒を把握し的確に対応する」が64%と最も高い。次いで「教職員それぞれの持ち味を生かす」が53%、「新しい教育の動向を把握し的確に対応する」が40%、「教職員の調和を図る」が33%「学校に期待されているものを把握し的確に対応する」が33%、「地域の特性を理解把握し的確に対応する」が18%であった。

20年経験者教員が「児童生徒が生き生きと学び活動する学校づくり」を今後どう具現化していくかが問われている。

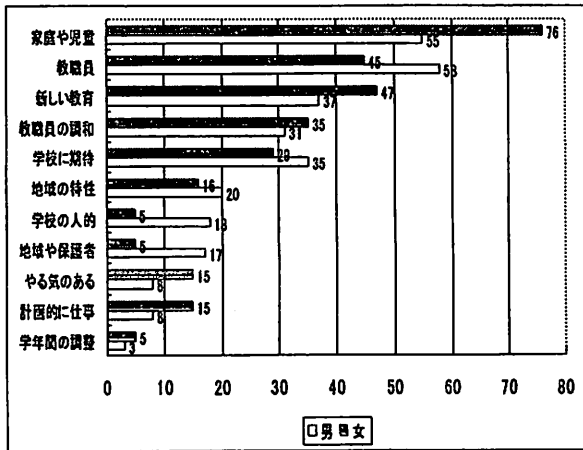


図 15 20 年経験者教員がこれから心がけていきたいこと  
(男女別) (%) (複数回答) 男 n=65 女 n=55

20 年経験者教員がこれから心がけていきたいと考えることについて、男女の差で見えていく。女性教員の場合は、55 人中「家庭や児童生徒を把握し的確に対応する」が 76%、「教職員のそれぞれの持ち味を生かす」が 45%、「新しい教育の動向を把握し的確に対応する」47%である。一方、男性教員は、65 人中「教職員のそれぞれの持ち味を生かす」58%「家庭や児童生徒を把握し的確に対応する」55%「学校に期待されているものを把握し的確に対応する」35%、の順に選択している。

女性教員は、後述の 10 年経験者教員へのアドバイスの中で、「子どもたちから教えてもらうことで教師としての自分も成長」「子どもが一番の私の批評家」「子どもの成長について長期的な視野に立って見る」等、「子ども」に関する記述が目につく。また、「結婚・出産・体調の乱れと、経験だけでは解決できない新たな課題」「職場の人以外との交流。子育てを通して随分自分が変化」などの記述から、「家庭」が男性とは違った意味合いをもっている様子もうかがわれる。

一方、男性教員は、「他の教員の授業を見て、よく学び盗み、吸収」「自分の得意分野の一層の研修。同僚の得意分野の吸収」「先輩の教員の取り組みや経験談から学ぶ姿勢」「自ら学ぶ者しか

教えることはできない」「教員同士の学び合う関係づくり」等、教員の力量向上に関する記述が多い。

集計データとアンケート記述内容の両方から、女性教員が「児童生徒や家庭」をより重視しているのに対し、男性教員は「教職員の持ち味（力量）」にやや重きを置いているように見受けられる。

次に、平成 14 年度に実施した 10 年経験者教員への問い「もし校長になったとしたら、どのような点に心がけていきたいか」と 20 年経験者教員への問い「あなたは学校の中で、どのような点に心がけていきたいと思うか」の違いを考慮に入れた上で、比較考察してみたい。

10 年経験者教員は、「教職員それぞれの持ち味を生かす」74%、「教職員の調和を図る」38%、「家庭や児童生徒を把握する」27%、「やる気のある教職員を育成する」27%の順に多く選択していた。一方 20 年経験者教員は、「家庭や児童生徒を把握し的確に対応する」65%、「教職員それぞれの持ち味を生かす」53%、「新しい教育の動向を把握し的確に対応する」41%、「教職員の調和を図る」33%、「学校に期待されているものを把握し的確に対応する」31%の順であった。

平成 14 年度調査研究の考察において、『10 年経験者教員の意識としては、教員の「個性」や「和」を重んじた校長が望ましいと考えており、現場の組織を効率的に、かつ円滑に運営していきたいという考えに基づくものといえよう。

また、学校を運営していくために把握しなければならない点についての回答は、「個性」「和」に比べて少ない。このような意識を、10 年を経験した教員に要求するのは難しく、学校の中で幅広い視点をどのように身に付けていくかが大きな課題といえよう。』と述べている。

今回の 20 年経験者教員の回答には、「教職員の個性や和」とともに、「学校経営上必要な把握す



べき点」を重視していることが読み取れる。「偏らずに前後左右、上下水平いろいろな方向の情報に耳を傾けて、総合的に物事を判断」「子どもの気持ちも保護者のこともだんだん分かってきて、保護者も巻き込んだいろいろな活動ができる」

「全体を見ながら考えながら仕事を進めていく」

「物事を見る目と見通しをもつことが大切」「実態に応じ、自分たちで課題を考え、失敗を恐れずに挑戦してほしい」等、後述の10年経験者教員へのアドバイスからも見るができる。

#### 4 10年経験者教員へ エピソード・アドバイス 10年経験時のエピソード

あなたの教職経験において **10年目** ぐらいの時の心に残っているエピソード等を紹介していただけますでしょうか。

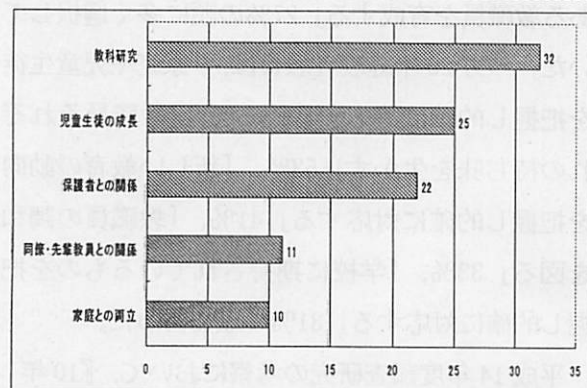


図16 10年経験時のエピソード (%) (一つ選択) n=120

回答内容を類型化して集計すると図16のように、①教科研究②児童生徒の成長③保護者との関係④先輩、同僚との関係⑤家庭と両立の関係の5つに類別できた。

以下、記述から主なものを抜粋してまとめた。

#### 教科研究等に関して

・ある同僚からの一言。「私は毎年ある1つの教科を決めそれを重点的に研修するのです。」と言うことを聞いて、なるほどと

思ったことが心に残っている。それまでの自分は自分の興味のある研修は進んで受けていたが、苦手なものはどうしても敬遠しがちだった。自分で意識をして様々なことに挑戦していくことの大切さを考えさせられた。

(小・男)

今回の回答では、教科研究に関するエピソードが多かった。やはり、教員は授業で育てられ、授業で成長していくことが分かる。

#### 児童・生徒の成長等に関して

・初めて6年生を担当した。それまで低学年が多く、気負っていたこともあり子どもたちの内面に潜んでいるものに気づくという大切なことを忘れていた気がする。問題を抱えた子どもを認めてあげず、自分も苦しい1年間だった。同僚や先輩方が親身に相談に乗ってくれてアドバイスをくれて乗り切ることが出来た。

(小・女)

10年経験ということで学習指導や生徒指導にも自信が出てきたりする時期でもあるが、子どもとの信頼関係という点では一年一年新しい子どもたちとの出会いであり、うまくいかず苦労したという事例があった。

しかし、そういう苦労をしながらも卒業させ、その子どもたちが大きくなって、大人になってからその時の話をしてくれたりすると、長い目で見て人を育てるということのすばらしさ、大切さを感じるという感想もあった。

#### 保護者との関係

・それまで勤めていた学校は、市内でも農耕地が多く、地域の人たちも代々その学校の卒業生であつたりして、学校の先生に対してはその指導に信頼を寄せており、多少強

引な指導も子どもたちのためと認めてくれることが普通であった。しかし転勤した先の学校は山の手の新興住宅地で現代的な考えの人たちがほとんどで、それまでの指導の術をもって子どもたちの指導に当たったため早速ある家庭から抗議がきて、こちらの非を認め家庭に挨拶にいったことがある。その席で父親とよく話し合い、おかげで良き理解者となっただくことになった。(小・男)

地域性の違いによって保護者の考え方も大きく違ってくることの記述があった。それまでの指導方法がそのまま通じずに悩みながらも、保護者と根気強く話し合うことで少しずつ理解を深めていくことができた、という事例もある。

#### 同僚・先輩教員との関係

・30歳過ぎに学年主任、研究主任を突然任されたことがあった。そのような大役は出来ないとお断りしたが、結局はやることになった。校長先生の適切なアドバイスと私を信じてくれるという温かいまなざしが、私を支えてくれたおかげで何とかやり遂げることが出来た。そのことが私自身の大きな力になり、現在に至っていると思う。

(中・男)

#### 家庭との両立の関係

・10年前は、結婚・出産・子育てと生活環境が一変し、それまで自分のことを中心に生活していたのが、自分のことは必ず最後という生活になった。子どもが小さかったため学級担任もはずされ寂しい思いもあったがそれもチャンスだと思い教材研究(家庭科)が 沢山できたことを覚えている。そし

て、少し休んでいた数学の勉強も再開し仕事と勉強と子育てをするのに、精一杯だった。しかし、忙しくても仕事を続けていためにも自分なりの目標を持って生活することは充実した教師生活だった。(中・女)

この回答で記入した 20 年経験者教員は 10 年経験時を振り返って、家庭との両立のエピソードをあげていた。10 年経験時はなかなか周りが見えなかったことでも、20 年を経験してやっと見えてくるものがある。児童生徒にかかわる教職にあって家庭との両立は大切なことである。児童生徒にできるだけよい教育をしていきたいと思うと同時に結婚、出産や子育て等と両立させることの難しさを率直に記述している。

#### 10 年経験者教員へのアドバイス

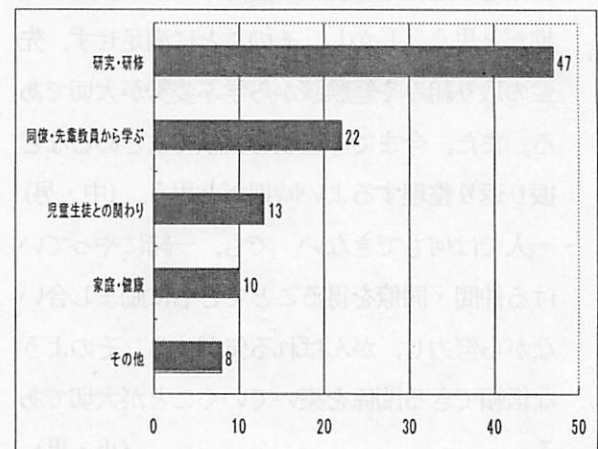


図 17 10 年経験者教員へのアドバイス

(%) (一つ選択) n=120

20 年経験者教員は自己研修に励み、先輩・同僚から多くを学ぶことを助言している。

回答を類別化して集計すると図 17 のように、①研究、研修、②同僚・先輩教員から学ぶ、③児童生徒とのかかわり、④家庭・健康の大きく四つのグループに類別できた。

以下、記述から主なものを抜粋してまとめた  
**自己研修に力を入れよう**

・ある程度の経験を積み悩む時期だろうがやって

みようという意欲が一番ある時かと思う。子どもたちの気持ちも保護者のこともだんだん分かってきて保護者も巻き込んだいろいろな活動ができることだろう。自分の得意分野や好きな教科をもっと深く研修してればよかったと今つくづく思っている。(小・女)

- ・10年経験者ともなれば、職場ではそれ相当の責任を任され、中心的な存在として活躍する機会も増える一方であろう。しかし、仕事に慣れず自分に奢らず、“自ら学ぶ者しか、教えることはできない”という言葉の肝に銘ずべきであると思う。(小・男)

#### 同僚・先輩からもっと学ぼう

- ・10年を経過した頃は、学習指導・学級経営・生徒指導などある程度自信を持って取り組める時期だと思う。しかし、そのことに満足せず、先輩の取り組みや経験談から学ぶ姿勢が大切である。また、今までの経験を文献でまとめるなど振り返り整理するよい時期だと思う。(中・男)
- ・一人では何もできない。でも、一緒にやっている仲間・同僚を得ることでともに励まし合いながら努力し、がんばれる気がする。そのような信頼できる関係を築いていくことが大切である。(小・男)

#### 児童・生徒とともに学ぼう

- ・担任として子どもに身をさらすということはごまかしがきかない。子どもが一番の私の「批評家」だと思う。メッキではない本当の力をつけていく他ないように思う。(小・女)
- ・10年位すると、自分の指導や考え方に自信を持ちすぎ、いろいろな子どもたちを強引に自分の枠組みの中に入れようとする傾向が出てくる。そのために信頼関係が損なわれることが時

として見受けられる。教師から児童への一方通行ではなく、子どもを理解し自分を子どもに理解してもらう努力をしながら、学級作りを進めていく謙虚さが大切である。(小・男)

#### 家庭・健康を大切にしよう

- ・10年くらい経験すると充実していると勘違いしがちだ。そんな時こそ、肩の力を抜いて自然体で子どもたちと触れ合えるよう毎日毎日の心のリフレッシュを大切にして欲しいと思う。(小・男)
- ・結婚・出産・体調の乱れと、経験だけでは解決できない新たな課題も増えていく。限られた時間の中で、最大限の効果を上げる仕事の取り組み方への工夫をしていく必要がでてくる。そのつど、何が優先されるかを考えていくことが大切だと思う。(中・女)

#### V 研究のまとめ

今回の、調査結果から20年経験者教員について下記の実態が明らかになった。第1に、自己研修の中心は校内研究であること。第2に、変化の契機や自分の励みになっていること及び悩みや苦勞の解決には、先輩同僚の助言が役立っていること。第3に、この10年で学習指導、児童生徒理解の力が身に付いて成長してきたという実感があること。第4に、仕事に対しての満足の理由が、責任のある仕事での達成感であること、すなわち、教職の仕事の意味を見だしつつあること。

これらの実態は、以下に示す学びの場や機会、そして自分自身を支える多くの人々との出会いの中で形作られ、身に付いた資質能力である。



## ■ 20 年経験者教員は校内での学び合いを通して教員として成長してきた。

多くの 20 年経験者教員がこれまでの歩みを振り返って自己研修の中心は校内での研修であると考えている。校内での研修は教員の成長に大きくかかわっていることが分かる。

これからは、教員が力量向上を図るために、全教員の主体的な参画による校内研究の工夫及び改善が、求められる。

今回の調査で、管理職や先輩教員から学んで、力が身に付いてきたと考えている 20 年経験者教員が多いことから、今、教員同士が学び合うこと、謙虚に先輩・同僚から学ぶことがこれからの教員の職能成長の課題の本質に迫る契機となりうると考える。その意味で教員集団が学び合える機能を持ち、相互に啓発しあうことが大切である。

20 年経験者教員は、学校の教員集団のちょうど中間の年齢に位置している。このことは管理職、先輩教員と若手教員の意思疎通をスムーズにさせることが可能な経験年数の立場に在るともいえる。すなわち、20 年教員が管理職、先輩から素直に学び、意を受け、同僚同士での協働的研修を通して学びあい、若手教員にも助言していくことが今後、一層強く求められると考える。

また、現在の教育についての多様な課題は、経験年数の多少にかかわらないものも多くある。時には、児童生徒の心理や情報機器の活用法等を後輩教員から学ぶこともあろう。

児童生徒の成長の様子を 20 年間見続けてきた教員自身の成長はどうだったのか。改めて振り返ってみることは大切なことと思われる。立ち止まり、自らの立脚点を明らかにして、どんな力が身に付いたのか、また、どんな力が必要なのかを問いただしてみる。このことによって、初めて自らのこれからの「教師の力量向上」の可能性が見えてくるものと考えられる。

## ■ 児童生徒や保護者とのかかわりを通して教員としての力量を高めている。

今回の調査では 20 年経験者教員の多くは、同様に、児童生徒や保護者とのかかわりを通して、教員としての力を伸ばしていることが分かった。

児童生徒の変容を見て、ある時には自らの指導を振り返り改善しようと思ったり、また、ある時には達成感をもったりすることにより、教師としてのよりよい成長につなげていこうとする姿勢が読み取れた。

また、自分が年齢的にも保護者の世代に近づくことにより、これまで十分に理解できなかった親の気持ちや考えが以前よりわかるようになり、それを更なる教員の成長へのきっかけにしている姿も見られた。

このように、児童生徒や保護者とのかかわりが教員としての成長の契機となっていることは重要な要因であり、その姿勢を持続することが大切であると考えられる。

## VI おわりに

教職を続ける上で 20 年経験者教員を支え、励ましてきたことは、主に、①同僚、先輩・管理職・恩師からの指導・助言②児童生徒の変容、成長③保護者とのかかわり④教職への情熱・使命感・責任感の四つのことである。しかも、一つ一つの事柄や要素が複合的に結び付き、影響し合いながら個々の教員を支えていることが分かった。

20 年経験者教員に限らず、管理職やベテラン教員は初めから指導力が優れていたわけではなく、幾多の失敗、先輩からの厳しくも温かい助言、地域からの学び等の積み重ねがあればこそ、現在の姿がある。

教育公務員特例法第 20 条の改正により、仙台市教育センターでは、平成 15 年度から 10 年経

験者教員研修を新しい方式で実施している。初任者研修についても、新たに拠点校方式等での実施が段階的に始まっている。また、希望研修の一つとして長期社会体験研修を実施するなど、校内だけでは実施が困難な多様な研修が設定されている。

これからは、校内研修という自分の身近な仲間との学び合いだけでは解決できない教育課題も次々と生じてきている現状からも、上記のような研修も含め、より広く研修の場を求めていく姿勢が教員の力量向上に必要なものと考え。

それらを、学校の教育目標の実現と協働体制の確立に生かしていく姿勢が大切である。その中心的立場にあるのが20年経験者教員である。児童生徒が生き生きと学ぶ学校、地域から信頼される学校を作るためにも、先輩や同僚から学び続けることにより自らを磨き、若手教員へ教育の心を育んでいくことが20年経験者教員には求められる。

今回の調査から見てきた20年経験者の力量形成の過程や教員としての資質能力の一つ一つを共有し、一人一人がよりよい教育実践につなげることが大切である。

この調査研究が20年経験者教員の意識を理解し、今後の学校運営や校内研修の推進等に役立つことができれば幸いである。

最後に、本研究を進めるに当たり、本調査に対して全面的に協力いただいた小・中学校のすべての20年経験者教員の方々及び関係各位に心から感謝し、ここにその意を記しておきたい。

## ● 参考文献

- ・「自分－わたしを拓く－」水原克敏 2003 東北大学出版
- ・「研究報告No.62 再考 21世紀における基礎学力」2003 中央教育研究所
- ・「教員研修の効果的な在り方」2000 奈良県立教育研究所
- ・「教師力」(上)(下)河村茂雄 2003 誠信書房
- ・仙台市教育センター研究紀要『教育はいま』第10号 仙台市小・中学校10年経験者教員への意識調査 2003

## ● 委嘱研究員

|              |       |
|--------------|-------|
| 東北大学大学院教授    | 水原 克敏 |
| 仙台市立愛宕中学校校長  | 星 光一  |
| 仙台市立台原小学校教諭  | 佐藤久美子 |
| 仙台市立松森小学校教諭  | 三井 裕  |
| 仙台市立長町南小学校教諭 | 吉田 秀夫 |
| 仙台市立台原中学校教諭  | 菅原 幸江 |
| 仙台市立西山中学校教諭  | 村上 武夫 |
| 仙台市立鶴谷養護学校教諭 | 鈴木 節子 |

## ● 教育局教育センター

|           |       |
|-----------|-------|
| 主幹兼主任指導主事 | 安住 裕  |
| 主任指導主事    | 只野 哲  |
| 指導主事      | 首藤 真弓 |
| 指導主事      | 松本 高佳 |
| 指導主事      | 今野 克則 |
| ○指導主事     | 佐々木 晃 |

○は事務局担当

## 資料編

※回答については紙面の都合で割愛したものがあること、個人情報等に配慮して一部表現を変えている部分があることをご了承ください。

### 20 年経験者教員が希望する役職や校務分掌の理由

#### ○ 学年主任を希望する理由

- ・やはり子どもとかかわり合っの教師だから。  
(小・女)
- ・組織の一員として学校経営への参加を自覚できること、学年全体の子どもたちを広い視視野で見て変容を実感できるから。  
(中・女)
- ・多忙ではあるが学校全体をコントロールする立場・全般的な視野から見通しをもって自力で指導できる力を持ちたい。  
(小・男)
- ・年齢的にもそろそろ学年主任を経験する頃だし、みんなの意見をまとめる役割を学んでいきたい。  
(小・女)
- ・子どもにとっても、同僚にとっても魅力のある学年経営をしたい。  
(小・男)

#### ○ 学級担任を希望する理由

- ・生徒と直接かかわることが多いのでやりがいがあるし、自分の性格に合っている。  
(中・男)
- ・教師としての原点だと思う。  
(中・男)
- ・子どもたちに分かる授業を提供し、学校が楽しい場と感じるように工夫していきたい。  
(小・女)
- ・生徒一人一人をより身近で指導してみたい。  
(中・男)
- ・私は生徒とのかかわりが魅力で教員になりました。それを実現できる最高の場は学級担任しかない。  
(中・男)
- ・子どもをよく見て研修し前進したい。(小・女)

- ・「分かった、できるようになった」と言ってくる子どもに育てたくて教師を志したから。  
(小・男)
- ・教育の根本の仕事であり、やったことが自分に返ってくるから。  
(小・女)
- ・このまま少しでもできることをがんばっていききたい。  
(小・女)
- ・学級の中で、毎日直接生徒とかかわり合う中で生徒を育て自己をも磨きたいから。(中・女)
- ・常に子ども達と関わり、直接心の動きや成長を感じていたい。  
(小・女)
- ・生徒と共に触れあい集団づくりを行うことができるから。  
(中・男)
- ・工夫しながら自由に教育活動ができるから。  
(小・女)
- ・現在も担任をしているが、教師と名がつく以上、常に生徒と共に成長したいから。(中・女)
- ・いつも子どもの近くで子どもの側で過ごしたいから。  
(小・女)
- ・現在学級担任ではなく専科のため以前に経験した学級担任になりたい。専科での経験を学担に生かしたい。  
(小・女)
- ・いつまでも子どもと共に成長していけそうな気がする。  
(小・女)
- ・子ども達と直接に接して活動するとき、生き甲斐を感じる。  
(小・男)

#### ○ 副担任を希望する理由

- ・健康上の理由から。  
(中・女)

#### ○ 学年副主任を希望する理由

- ・補助として主任を支えるのなら可能。  
(中・女)



## ○教育行政職を希望する理由

- ・ずっと現場で指導にあたってきたので、一度外部からの研修指導をしてみたい。(小・男)
- ・ずっと生徒に一番近い所(現場)にいたので別の角度から生徒を見るのもいいかなと思う。(中・男)
- ・新たな仕事にあたり、世界を広げたい(教員としての視野を広げたい)。(中・女)
- ・諸学校の様子・実態について外側から見てみたい。そして今教育上抱える課題について考え、その解決について取り組んでみたいから。(小・女)

## ○管理職を希望する理由

- ・学校経営の中心的な立場として、今日的な学校経営に取り組んでみたい。(小・男)
- ・自分で理想とする学校経営をしてみたい。(中・男)
- ・これまで蓄積してきた教職の技量をもとにし学校経営という形で自分の力量を高めていきたい。(小・男)
- ・自分で今まで培ってきたものを後輩の指導を通して還元したい。(中・男)
- ・学級担任以外の立場から学校全体を見たり考えたりしたいから。(小・女)
- ・個々の教員の努力が大切ですが、学校という組織としての働きかけをマネジメントしたいから。(小・男)

## ○教務主任を希望する理由

- ・学校全体の流れを作ることができるから。(中・男)
- ・学校という組織の中で、自分を生かし自分の力を発揮できる校務分掌だと思うから。(中・男)
- ・教育計画の立案・実施・時間割の総合的調整などの職務に当たり学校運営に貢献したい。(中・男)
- ・学校の教育計画の立案・実施その他の仕事に積極的に携わってみたい。(中・男)
- ・教務1年目で大変慌ただしくしているため、地に足をつけて進めたい。(小・女)
- ・学校運営で一番の要であるから。(中・男)
- ・学校全体に関わる仕事で、やりがいがあるのではないと思うから。(小・男)

## ○研究主任を希望する理由

- ・日常的に無理のない研究で、まとめの時に成果や課題がはっきりするような研究をしてみたい。(小・男)
- ・自ら研究を進めていくことと、研究を進めることでよりよい教育が実現できるから。(小・男)

## ○教科主任を希望する理由

- ・専門性を生かせるため。(小・女)
- ・今の自分の能力を最大限に発揮できるから。(小・男)

○少人数指導担当を希望する理由

- ・基礎学力が付くように教材・教具を工夫して指導してみたい。 (小・女)
- ・行政、管理職以外の校内の担当が校務分掌に関しては一通り経験したが、これはまだなので。 (小・女)

○図書主任（専任）を希望する理由

- ・せっかく資格を取り、図書館経営でやりたいことがたくさんあるのに、学級担任をしながらではとても多忙で思うようにできないから。 (小・女)
- ・やっと理解しかけたところだから。 (小・女)

○情報教育担当を希望する理由

- ・校内用のポータルサイトを作って、クラスや学年の壁を越えた情報支援をしてみたい (小・男)

○生徒指導主任（小）を希望する理由

- ・まだ、経験がないので。 (小・男)
- ・少年犯罪の低年齢化等、マスコミで報ぜられる昨今、心のケアをも含めて学級担任とチームを組み、少しでも子ども達が安心して学校に来て楽しく学習できるような環境を整えたいと考えるから。 (小・女)
- ・今一番大変な仕事である。受け身でなく積極的な生徒指導を行いたい。子どもの心に気をつけながら。 (小・女)

○特別支援コーディネーターを希望する理由

- ・特別支援教育には学校だけではカバーできない様々な問題がありその調整役としては是非やってみたい。 (小・女)

○カウンセリング担当を希望する理由

- ・心の教育を必要とする児童が増えてきているので。 (小・女)

○特になし

- ・与えられたポジションで自分の力を発揮できればと思っている。 (中・男)
- ・教師という職業で必要とされる仕事ならばどのようなことでもこなすべきだと考える (中・男)

## 10年経験時のエピソード

## 教科研究についての記述

- ・10年研修の一つとして道徳の研究授業を行った。校長をはじめとする全校の先生方に参観していただきアドバイス等をもらった。校長からは「10年でここまで出来れば十分でしょう。」と言っていたが、お世辞とは分かっていながらもとてもうれしくその言葉がその後の教員生活の励みになった。「10年研のあの授業を乗り越えなければならない。」常によい意味でのプレッシャーになっている。(小・女)
- ・校内研究で「国際理解」をテーマに、先ず国を知ると言うことで「品井沼の干拓」についての授業を行った。県内出身ではあるがその当時は品井沼のことも鎌田三之助のこともよく知らず、資料の収集からスタートした授業だった。たくさんの資料を読むことで自分自身の勉強になったこと、授業をやった満足感はあったが資料に振り回されすぎたこと、いろいろな道具は用意しても結局は机上の授業になってしまったことなど苦い経験が思い出される。(小・女)
- ・教職経験10年と言えば、教科指導、生徒指導などあらゆる面において自分の力量も分かってくる時期です。その時期に、研究大会(東北大会)で授業を提供することになり、自分の教科において「どのような子どもを育てたいか。」を真剣に考え、具体的に毎日生徒たち実践し、充実した生活を送ることが出来たことを思い出す。(中・女)
- ・転勤した年に、先輩教師から仙小教研のある教

科部会の授業研究に挑戦してみないかと誘われ、引き受けることにした。事前検討会では、他校の先生方と夜9時過ぎまで、ああでもない、こうでもない意見をぶつけ合って指導案を練り上げていった。また、校内の同僚教師もビデオのセッティング、編集を買って出してくれるなど、実に良くサポートしてくれた。おかげで実のある授業実践をすることができ、今日もその教科指導に関心をもち、よりよい授業をしようと努めている。(小・男)

- ・文部省指定校の研究主任や市の研究推進校での教科研究の経験が、苦労はあったが、充実した毎日を送ることができた。校内研究や仙小教研での授業研究の経験も大きく、今日の教育活動の大きな支えとなっている。(小・女)

## 児童・生徒の成長についての記述

- ・おとなしい生徒に対して強い態度であたる生徒がいた。その生徒が、別の生徒をいじめていることが発覚した。そしてその生徒を呼んで話したり、家庭訪問をしたりなどして自分の行動について深く考えるよう指導していった。いじめは減ったものの他の生徒とのトラブルはその後も続いた。そんな生徒が二十歳になったとき、同窓会があり私も参加した。すると、その生徒が「〇〇をいじめていた時に随分叱られたなあ。あの時はゴメンナサイ」と言った。それを聞いたとき、改めて、粘り強く自分の気持ちを生徒に伝えていくことの大切さを感じた。(中・男)

- ・不登校になった小5の男子の児童を受け持った時。その頃は登校刺激は極力控えるようにという風潮が対処法としていわれていたが、私は担任としてその子の性格や家庭環境から、毎朝迎



えに行き、部屋の中までいって寝ている子を捕まえ連れてくるような手荒なこともした。そのような状態が2ヶ月ほど続きあきらめかけていた頃、母親と会いその子ともじっくり話し合え、登校できるようになった日、「先生、もう大丈夫だから。明日から迎えにこなくていいから」といつてくれた。私は転勤の時に花束をもらい涙が出た。  
(小・女)

- ・ 道徳の授業で「幸せについて」を考えさせた時、日本とフィリピンを比較した。その授業をいつまでも覚えていた生徒がいて、数年後本当にフィリピンに行ってきたという連絡をもらった。私は「なぜフィリピンなの？」と尋ねたら、「だって道徳でやりました。」と言われ、思い出した次第である。その子は今、看護師になるため勉強中である。  
(中・男)

- ・ 10 年経験のあたりだと経験が蓄積され、そろそろいろいろな領域でその力を発揮できる頃だと思う。でもそんな時、突然母国語が通じない男の子がクラスに転入してきて英語さえ通じないことに戸惑いを感じた。そんな中、子どもたちの方がボディランゲージで難なく交流しているのを見て、まずその国の言語獲得からと意気込んでいた私は多くのことを教えられたような気がした。固定観念にとらわれることなく先ず動いてみることの大切さ、また、教職何年になろうと常に子どもたちから学ぶと言う姿勢を忘れないことを再確認した。  
(小・女)

- ・ 10 年経験の年に、転任して1年生を担当した。そのクラスは、朝、登校をぐずる子がいたり、始業のチャイムが鳴っても教室へ戻らない子がいたり、その子らの世話をしていると他の子らが騒ぎという状態で結構苦労した。そして5年後、また、その学年を6年生で担任した。小

さい頃手にかけて子らが大きくなっていて「授業参観の生活科でお手伝いのことをやったから、あれ以来、上靴を自分で洗っているんだよ。」など話してくれた。お互いのことを認め合える良い学級づくりが出来た。今でも時々訪ねてきてくれる子がいる。1年と6年の時の担任をするという醍醐味を味わえた。  
(小・女)

- ・ 10 年目あたりは部活動の指導を第一に考えて教職生活を送っていたと思う。東北・全国大会でも入賞者が始め、その生徒達が自信をもって生活する姿を見るにつけ、「自分も少しは学校のために役に立っている。」と感じていた。しかし、この試合が全国大会出場を決めるという時、勝敗には勝ったのだが、その生徒は反則を犯してしまった。後で生徒に聞くと「反則を犯しても先生の夢を達成させたかった。」と言われ、はっとさせられた。自分の気持ちをあまりにも生徒に押しつけていたのだった。このときは随分反省させられた。  
(中・男)

- ・ 初めて6年生を担当した時それまで低学年が多く、気負っていたこともあり子どもたちの内面に潜んでいるものに気づくという大切なことを忘れていた気がする。問題を抱えた子どもを認めてあげず、自分も苦しい1年間でした。同僚や先輩方が親身に相談に乗ってくれてアドバイスをもらい乗り切ることができた。  
(小・女)

- ・ 9年目にやり甲斐のある仕事を任され、協力体制もよく、独身であったので思う存分仕事をすることが出来た。しかし、担任している6年生児童の心はつかみきれず、学級はぎくしゃくとしていた。自分の考えに子どもたちについてこさせようとしたことが要因になっていると思う。卒業まで改善されなかった。10年目に転勤し、4年生を担当した時、前年度の学級経営が良く、

1度も叱ることなく一年を過ごした。いまだかつて、このような経験をした年はない。(私自身、おごりを消すことはできたのだろうか。)

(小・女)

- ・10年間郡部の中学校で教職生活を送っていた自分にとって、11年目に市内の中学校に入ってから驚きの連続だった。初日から、教室に入らない生徒が廊下をうろうろし、2日目の実力テストでコーラを飲んでいる生徒を注意したら、大声を出して暴れた。中学生は教師に暴力を振るうものだと思われ、暗澹たる思いになったことを覚えている。最初の頃は、出張で学校外に出るのが待ち遠しかった。しかし、学級の心ある生徒や同僚に支えられ、徐々に問題生徒ともラポートが取れるようになってきた。(数年過ぎると、そういう生徒たちとのかかわり方もできるようになった。)(中・男)

#### 保護者との関係についての記述

- ・10年経過した頃は、学校現場に慣れ、学校行事の企画を任されるようになった。そのことでわずかな経験しかないのにもかかわらず、学校現場のことが何でも分かったような気になっていた。行事の企画にしても、いろいろな立場で考えることができず、自分の立場でしか考えていなかったと思う。そんな時、保護者の方から学校に期待していること、教員に求めていることを聞かされ、立場が異なれば考え方が異なってくる。そして、それを調整し、みんなが納得するように物事を進めていくことがいかに大切であることを学習させていただいたことが心に残っている。(小・男)
- ・ある学区内の夏祭りは、町内会主催で学校が直接参加することがそれまでなかった。しかし、

地域の行事を盛り上げ積極的にかかわっていくことになった。自分はチーフではなかったが教師の組織作り、地区生徒会の活動を柱に夏祭りポスターや全生徒による「あんどん」作りを呼びかけていった。その年から中学生が参加することで夏祭りに華やかさと活気が見られるようになり地域からは歓迎された。(中・男)

#### 同僚・上司との関係についての記述

- ・30歳過ぎに学年主任、研究主任を突然任されたことがあった。そのような大役は出来ないとお断りしたが、結局はやることになった。校長先生の適切なアドバイスと私を信じてくれると言う温かいまなざしが、私を支えてくれた。おかげで何とかやり遂げることができた。そのことが私自身の大きな力になり、現在に至っていると思う。(中・男)
- ・三つ目の学校で10年目を迎えた。前任が新設校だったこともあり、自分もがんばらなければという気負いがあった。それはそれなりに充実していたのだが、自分を客観的にとらえる余裕を失っていた気がする。10年目を迎えた学校で「生かされる喜び」を味わった。的確なリーダーシップのもと、長期的な見通しの中の位置付けや、自分の仕事の意味をはっきり意識しながら仕事ができる。この経験が私をひとまわりもふたまわりも大きくしてくれたと思う。(中・男)
- ・副主任3年目の時の学年主任は、学年経営の柱となる部分を当時の私に任せ、常に自分は後ろに控えるという方法をとってくれた。このこと

が私にとっては大変貴重な経験となり多くのことを学んだ。学年主任 8 年目の現在、このことを念頭に置き、後継の人を育てるという視点を忘れぬよう心がけている。(中・男)

- ・初めて単学級（5 年生 39 人）の担任をすることになった時、学級経営、学年行事、校務分掌等で多くの不安があった。しかし、校長はじめ教頭、教務多くの同僚が多方面にわたって支えてくれた。また、子どもたちも個性をぶつけ合いながら成長してくれた。野外活動では骨折した友達をいたわるように活動した。雨で外での活動はできなかったが館内オリエンテーリングが印象に残り、卒業まで集会係が工夫して校内オリエンテーリングを何回も企画しみんなで楽しく活動できた。(小・男)
- ・10 年目で、新設校としての学校作りの中心となって、仲間達とアイデアを出し合っていた頃のことである。当時の校長から「何でもいいから、子どもたちのためによいと思うことはどんどんやってみなさい。私が責任をとりますから。」と任されたことがある。今振り返ると、とても充実した日々だった。主体的に取り組んで、それを評価していただいたことが新たなエネルギーとなった。自分もそんな先輩でありたいと思う。(小・女)

#### 家庭との両立の関係についての記述

- ・今までで一番つらかったのは、出産と仕事との両立である。高齢出産だったので妊娠時より体調が悪く、産休を待たずに病休をとった。それまで体調不調にもかかわらず精一杯授業を行ったが、父兄や子どもたちに信頼を得ることができず苦しんだ。同僚が親身になっていろいろ助けてくれた。(小・女)

- ・10 年の時は、特約退職をとっていた。一つの節目ともなり一般の社会から学校を見る機会を得た。子どもの入学もあり、仕事と家庭との両立に悩むことがあった。保護者が学校に何を望んでいるのか知ることができたと思う。そして教員側から考えていることとずれがあることも実感した。仕事が楽しかった反面、時間に追われた 10 年だった。(小・女)

- ・下の子を出産したのが 10 年になる少し前でした。体調を崩し、産休に入る 2 週間くらい前に病休をとることになってしまい大変悔しい思いをしたことがあった。その時の先輩の先生の一言が「あなたがいなくても学校は動く。しっかり休んで元気な子を産みなさい。」だった。その一言で気持ちが楽になり、復帰してからはかえって余裕をもって仕事ができるように思う。仕事にも自信がもてるようになり夢中になって取り組めるようになった時こそ、自分の時間や自分の生活、自分自身を大切にし、充実した生活を送ることも大切だと思う。(中・女)

- ・10 年目ぐらいの時は、公私とも非常に忙しい時だった。子どもが小さかったので保育所に預け、夜は子どもと一緒に 9 時頃に床に入り、夜中の 1～2 時に起きて仕事をし、そのまま出勤という毎日だった。職場では次々と責任ある仕事を任されるようになり、また、市教研等で発表の機会を与えられるなど、忙しい中でも毎日が楽しく充実していたと思う。今思えば、家族の理解と若さゆえ、出来たと思うが。

(小・女)

- ・10 年目ぐらいの時は、結婚・出産・子育てと一番忙しい時期に当たっていた。子どもを保育所に預け、夕方は迎えに行き、自分の睡眠時間



を削ってしか仕事ができないというつらい時期だった。仕事と家事・育児をこなしていくのに必死だった。

(中・女)

- ・子育て真っ最中で、いつも時間に追われていた。いつも職場に電話がくるとびくっと反応した。もっとこうしたい、こういう生徒にしたいという願いと時間不足の狭間で苦しんでいた。そんな中、ある先輩から「私も以前先輩から言われたんだけど 35 歳までに『自分の学級』(自分の人間らしさがあふれるという意味)をつくれるようにがんばって」という言葉を言われ方向性が見えたような気がして楽になった。

(小・女)

## 10 年経験者へのアドバイス

### 自己研修に関して

- ・様々な研修会に参加し、また、教育書を読んで力量を高める時期である。
- ・研修には「お金をかける」ということである。研究大会や書籍等への支出を出し惜しんではいけない。「準備された研修」より「自費をつぎ込んだ研修」と思っている。
- ・先を見通した上で、自己啓発・自己研修に努めてほしい。
- ・長期の研修を通して自分の視野を広げ、深く語り合える仲間を持つことは、その後の教員生活にとってプラスになると思っている。積極的に研修を受けることを勧める。
- ・研究授業等へは自ら進んで取り組み、他人の目で見てもらうことで授業の改善に役立つ。

(中・女)

(中・男)

(中・男)

(中・男)

(中・男)

(中・男)

- ・自己研修をどんどんして自分を高めていってほしい。

(小・女)

- ・自分の得意分野の一層の研修が大切である。同僚の得意分野の吸収を心がけてほしい。

(小・男)

- ・教職 10 年といえ、学校では中堅である。自分にプラスになることは積極的に挑戦してほしい。「やってみないか」と言われたら、周囲に迷惑をかけないかどうか判断し、ぜひ「研修させてください」と申し出ること。指導技術はもちろんのこと、子どもの心の教育を大切にしなければならない昨今、自分を向上させようとする前向きの姿勢を失うことなく日々を過ごしてほしい。

(小・女)

- ・自分を高めることがひいては子どもたちのためにもなるので、いろいろな分野で納得のいくまで研修を積んでほしい。

(小・男)

- ・教育界は年々めまぐるしく変化し、教員に対する見方も大変厳しくなっている。単に子どもに勉強を教えると言う考えだけではやっていけないし、責任も果たしているともいえない。自ら学ぶ姿勢を常に持ち教育界の動向把握に努めてほしい。

(小・女)

- ・ある程度の経験を積み、悩む時期だろうが、やってみようという意欲が一番ある時かと思う。子どもたちの気持ちも保護者のこともだんだん分かってきて、保護者も巻き込んだいろいろな活動ができることだろう。自分の得意分野や好きな教科をもっと深く研修してればよかったと今つくづく思っている。

(小・女)

・自信と落ち着きが出る頃。でも、それに満足せず、いろいろなことに挑戦し、研修に励んでほしい。失敗を繰り返しながら成長するのは子どもだけでなく、私たち大人も同じである。何でも“なすことによって学ぶ”のである、と思う。“進みつつある教師のみ、人を教える資格あり”国語教師野口先生の言葉である。(小・女)

・教材研究など、常に最新の情報を入手する努力をしていけば時代にマッチした授業も展開できるし、生徒も注目してくれる。(中・男)

・いつも落ち着いた気持ちで子どもたちに向かいたいと思う。事前の教材研究をしっかり行い、余裕を持って授業をしなければと思っている。(小・女)

・10年経験者ともなれば、職場ではそれ相当の責任を任され、中心的な存在として活躍する機会も増える一方であろう。しかし、仕事に慣れず、自分に奢らず、“自ら学ぶ者しか、教えることはできない”という言葉に肝に銘ずべきであると思う。自戒を込めて。(小・男)

・私たち教師は授業を通してこそ教育観、子ども観を本音で語ることができるのではないか。そのためにも授業作りを構想していく中で、自分自身をじっくり振り返り、他の教師から学ぶ意味は大きいと思う。自分のため、子どものため、教師同士の学び合う関係づくりに、「授業研究」に取り組んでみては。(小・男)

・受け身でなく、自ら何かを成し遂げようとする。お手伝いという感覚でなく、自分でひとつのことをやること。でできないという簡単な言葉で済ませるのではなく、できるように工夫・努力を

してみる。(中・男)

・自分の得意なものをひとつ持つこと。(中・男)

・先人(先輩)のみならず、後輩、また子どもたち、保護者の方々の意見にも直に耳を傾ける謙虚さを失わないこと。(小・男)

・「環境が人を作る」ということを学級経営や学年経営の柱にして取り組むこと。その環境づくりのためには、担任として日々努力が必要である。教室経営においては、子どもたちの活動の様子が伝わってくるような掲示の仕方を工夫するとか、教室や廊下、校舎内外の整理整頓を心がけるといったことを継続して取り組むことである。職員室の机上整理から環境づくりをスタートすれば論より証拠。そして、何事も言ったことは実行することである。理想論だけでなく、同僚からの信頼も得られなくなる。新しいことを始めようとか、何かを変えようとするとき、確かな見通しと信念が味方してくれる。(小・男)

・現場で意欲的に活動することも大切であるが、いろいろな人の意見に耳を傾け、自分の中に吸収する時間も大事にしてほしい。(中・女)

・自分がやりたいと思ったことは、とことんやってほしい。やりたい、やらせたいという気持ちがあれ、できないことはないはずだ。教師自身が大きな夢を持つことが大切。(小・男)

・感謝の気持ちを忘れずに。(小・男)

・現在の自分の役職(立場)より常に一段上のポジションにおいて、「どう行動すべきか」「何を準備すべきか」を考えること。(中・男)

- ・一生のなかで本当に打ち込める時期は限られているということである。その時期に自分なりに一生懸命やっていくことが、その後に経験や自信という形で蓄積されていくのではないかと考える。  
(中・男)
- ・組織のなかの自分の役割を考えて職務に専念する。  
(中・男)
- ・力一杯、自力を発揮できるときばかりではない。日頃から、力をためておくことと、人間関係をよくしておくことが大切である。そして、自力を発揮できるようになったら、今までお世話になった分少しでも恩返しすることだと思う。(小・女)
- ・10年を経験すれば、仕事に対して多少なりとも自信を持つようになっていくはずだ。その自信を更に高め、より確実にしていくためには子どもにも言うように、どんどん自分の考えを職場内で発言し、言った以上は必ず実行すること。この繰り返しと積み重ねによって周りからの信用も増し、更に大きな自信になってより大きなより達成感のある仕事ができるようになっていく。何年仕事をしてきても自分に足りないものや間違ってしまうものがたくさんあるが、その都度、反省し今後に生かすことを考え、自分に強い自信を持った仕事をしていくことが大切である。(小・男)
- ・大切なのは「自分がどうしたいのか」という建設的な考え方ではないだろうか。20年ほど経ったときに胸を張って自分の実践を後輩に指導やアドバイスできる先生になってほしい。(小・男)
- ・失敗がむしろ財産になる。・スタンドプレーにならないこと。自分に厳しく、ズルをしない。会議では必ずレジュメを作成し臨むこと。(口先だけにならないように) 生徒あつての教師である。  
(中・男)
- ・学級経営がしっかりできるようになる頃だと思う。日直の時に他のクラスの掲示物を見て、常に他から学ぶ姿勢をもつことが大切だ。「何となく毎日が過ぎていく」ではなく、自分の考えをもって自分の描くクラス像に近づけるためいろいろ試みて欲しいと思う。うまくいった経験、達成感が次のステップになると思う。(中・女)
- ・5年目ぐらいまでは、体当たりでなんとか通用してきた。10年目ぐらいまでは物事を見る目と見通しをもつことが大切だと思う。10年目ぐらいからは「熟考・英断・実行」だ。(中・女)
- ・「やれるときに、やれることをやる」当たり前のことのようにだが、私は自分が中途半端にやってきたことを後悔しているので。(中・男)
- ・子どもと向き合うために心と体にいい栄養を取り入れゆとりをもって生活し、心に悩みをためないように誰かに話をするように心がけてほしい。  
(小・男)
- ・気負わず、周りのみんなの力を借りながら自分のできることを今その時々、精一杯がんばること。辛いことや悩みを気軽に言い合える関係をつくること。  
(小・男)
- ・失敗を恐れずに、自分のやるべきことに全力で取り組み。全体を見ながら、考えながら仕事を進めていく。(中・男)
- ・自分の引き出しを多く作っておくこと。専門性を極めること。友達などネットワークを大事にすること。  
(小・女)
- ・自分の専門と考えている分野だけにとらわれず、

他の分野にも飛び込んでみることで意外な結果が生まれることも多い。今は合唱団を指導している。子どもたちは学級以外に自分の居場所を求めているようだ。あまり学級の枠にとらわれずに行動することで、子どもの理解、新しい自分の開拓ができると思う。(小・女)

- ・10年経過あたりから仕事量も増え、忙しくなると思うが、どれも自分にとってプラスになる仕事になるはずだ。謙虚な態度でありながらも前向きに取り組むことこそが自分を育てる一番の近道になるはずだ。(小・女)

- ・自分の信念や方法などをしっかりもつことは大切だ。しかし、時代の流れや生活の仕方考え方などの傾向を敏感に察知し、自分の方法が今これであるのかどうか常に確認していることも必要ではないかと思われる。経験を重ねていく上で柔軟性を忘れずにしてほしい。(中・女)

- ・何か一つ「これなら誰にも負けない。」と思えるものを持つことと思う。それをもって生徒の指導に当たる場面をもつことによって、生活に生き甲斐をもてるようになると思う。(中・男)

- ・「10年研」を迎える前に、数回研究発表をさせていただいた。校内外を問わずいろいろな仕事を依頼されたが、いつも「喜んで」の精神で取り組んできた。教師がやれば子どもが変わる。仕事の楽しみ、生きがいが高まったと思う。教職に誇りをもって精進してほしい。(小・男)

- ・新しいことにチャレンジし続けてほしい。(中・男)

- ・何か新しいものを始めるには苦勞や悩みはつきものだが、それだけ達成感がある。思いきり取り組

めるのは体の自由がきく10年経験までではないだろうか。(中・男)

- ・教員としての仕事、おもしろさ、自分の力量など十分わかってくる時期である。しかし、積極的に自分を見つめないと、教育に対する新鮮な気持ちや工夫ある指導がおろそかになる時期でもあると思う。夢と希望、情熱をもって取り組もう。

(中・女)

- ・10年ぐらい過ぎると初心を忘れてしまいがち。もう一度スタートラインに立とう。(小・女)

- ・教員10年目くらいが、最も脂ののった充実した時期だったように思える。但し、最近は何にためにがんばらなければいけないのか見えてこないの で情熱をかたむけようがない。実態に応じ、自分たちで課題を考え、失敗をおそれずに挑戦してほしい。この時期学校を運営する中心だと思う。校長が学校を動かすようでは、教員として意味のないのではないかと。最前線で働く教員が学校を動かすべきと考える。(中・女)

- ・日頃から係の人任せでなく、学校全体を見渡して、どんなことでも積極的に取り組む姿勢が大切。(中・男)

- ・偏らずに前後左右、上下水平いろんな方向の情報に耳を傾けて、総合的に物事を判断していくこと。(小・男)

- ・「10年研」の時に、“中堅としての自覚を”と言われてから10年過ぎた。その間に学担以外の分掌をいくつか経験させてもらったが、そのたびに、全体やその他諸々のことを考えて計画を立て実行すべきということを学んだ。そして、その仕事や立場を通して初めて分かったことや今まで気付か



なかった苦労に思い及ぶこともあったのが収穫だ  
と思う。学校内にはいろいろな分掌があり、生徒  
をよりよい方向へ導くためにはどうすればよいか  
をみんなで考えて、足並みをそろえて進んでいく  
ことが大切である。その先陣を切るのが10年経  
験の先生方だろう。(中・女)

#### 同僚・先輩から学ぶことに関して

- ・今は総合的な学習の時間があるので、いろいろな  
ことに取り組むことができると思うが、自分の個  
性・特性を生かしたことを実践したい場合、校長  
先生をはじめまわりの先生方の理解を得て実践で  
きるようあらゆる努力をすることが必要だと思う。  
(小・男)
- ・10年経験ともなれば、ある程度責任ある仕事や  
リーダーシップを発揮しなければならない仕事を  
任されることも多くなる。それまで経験したこと  
がない内容であると不安も生じるが「はじめから  
上手にはできない」と開き直って先輩のアドバイ  
スを受け入れながらひとつずつ確実に仕上げてい  
くことが大切だと思う。それまで縁遠かったこと  
も必要に迫られて次第に身に付いていくことが  
多々ある。(中・男)
- ・10年経過で、学習指導・学級経営・生徒指導な  
どある程度自信をもって取り組める時期だと思う。  
しかし、そのことに満足せず、先輩の先生の取り  
組みや経験談から学ぶ姿勢が大切です。また、今  
までの経験を文献でまとめるなど振り返り整理  
するよい時期だと思う。(中・男)
- ・自分一人で悩まず、みんなの話を素直に受け入れ  
ることが一番大切思う。(小・女)
- ・新任の頃からの先輩や同僚の先生方とのディスカ  
ッションその他で学んできたものを大切にしたい。  
(中・男)
- ・学校全体の子どもたちが自分の子どもであるよう  
に学級の壁を取り払って先生方みんなで見守れる  
ような学校作りをしてほしいと思う。先生方同士  
の豊かな人間関係の中で子どもたちに豊かな成長  
があるのだと思う。(小・女)
- ・一人では何もできない。でも、一緒にやっていけ  
る仲間・同僚を得ることで共に励まし合いながら  
努力し、がんばれる気がする。そのような信頼で  
きる関係を築いていくこと。(小・男)

#### 児童・生徒から学ぶことに関して

- ・良き先輩を見つけ、授業をする力、保護者からの  
学び方など吸収すること。(小・男)
- ・後ろ姿を追いがける先輩のいるときに思う存分  
指導を仰ぐこと。(中・女)
- ・先生方を組織し、集団で取り組むことの重要性。  
(中・男)
- ・自分たちの仕事は子どもたちに教える仕事だけど、  
逆にその時その時、子どもたちから自分が教えて  
もらっていることもたくさんあると思う。子ども  
達から教えてもらうことで教師としての自分も成  
長してきたのかなとも思う。何よりも日々、元氣  
をもらうことができて幸せだと思う。(小・女)
- ・子どもはどの子も自分が認めてもらう場を与えら  
れることで伸びていくと思う。(小・女)

- ・指導は生徒の目の高さになること。 (中・女)
- ・問題行動のある児童がいる場合は、抱え込まず学校や学年で話し合う場に出し、多くの意見をもらい対処すると思う。 (小・女)
- ・大きな仕事を任され、充実した教員生活を送れる時期と思う。しかし、若さや情熱でリードをしてきた頃とは違い、これからは十分に子どもの心を理解し、指導していくことが大切。 (小・女)
- ・担任として子どもに身をさらすということは、ごまかしがきかない。子どもが一番の「私」の批評家だと思う。メッキではない本当の力をつけていく他ないように思う。 (小・女)
- ・子どもたち一人一人を大好きだと思う気持ちを保ち続けられることが大切だと思う。あと、自分がやってみたい思うことに意欲的に取り組むこと。そして職場の和を保つこと。 (小・男)
- ・そのころ心掛けたことは、「あの時は注意しなかったのに今回はなぜ注意するのか」といった教師側の行動の一貫性の欠如は見せない。問題行動は見逃さずに、悪いことは悪いときちんと指摘し続ける。それができないとまともな生徒も離れていく。」ということだった。もちろん衝突はあったが、これ以上は譲れない線からは一步も引かないようがんばったつもりだ。それから、一人二人の問題生徒に掛かりつきりになって、他の 30 数名の生徒に手をかけられないということのないようにする。」ということでした。自分の方を向いてくれている大多数の生徒がいるのではないかと、いうことが大きな支えになった。 (中・男)
- ・10 年位経験すると、自分の指導や考え方に自信をもちすぎ、いろいろな子どもたちを強引に自分の枠組みの中に入れようとする傾向が出てくる。そ

のために信頼関係が損なわれることが時として見受けられる。教師から児童への一方通行ではなく、子どもを理解し自分を子どもに理解してもらう努力をしながら、学級作りを進めていく謙虚さが大切である。 (小・男)

#### 家庭との両立・健康に関して

- ・10 年くらい経験すると充実していると勘違いしがちである。そんな時こそ、肩の力を抜いて自然体で子どもたちと触れ合えるよう毎日毎日の心のリフレッシュを大切にして欲しいと思う。 (小・男)
- ・健康に留意すること。 (中・男)
- ・教員であろうとどんな職種でも“健康な体”がなにより。・先を見通した上で、自己啓発・自己研修に努めてほしい。 (中・男)
- ・自分自身のメンタルヘルスに心がけてほしい。 (中・男)
- ・結婚・出産・体調の乱れと、経験だけでは解決できない新たな課題も増えている。限られた時間の中で、最大限の効果を上げる仕事の取り組み方への工夫をしていく必要がでてくる。そのつど、何が優先されるかを考えていくことが大切だと思う。 (中・女)
- ・その後、結婚して子どもができて思うことは、家庭が一番であるということ。自分の家庭を大切にすること。 (中・男)
- ・育児中の女の先生にとっては、仕事との両立が大変な時期になるが、子どもが小学校に通う頃にな

ると自分の時間ができて仕事にも力が入られる  
ようになる。  
(小・女)

#### その他

・ある意味、私はラッキーだったと思う。変な話だが、10年目くらいに現在校のこの状況の中にいたら教職に幻滅しているし、生活の糧を得る手段としてしか仕事を見ることができなくなっていると思う。  
(中・男)

・たくさんの先生方の授業を見て、盗み、吸収すること。体で覚えること。健康第一。  
(小・男)

・20年の歳月を10年で区切ると、前の10年はただがむしゃらに毎日の仕事をこなすのに精一杯で子どもたちそのものが見えず、形を気にしたり提出の締め切りに追われたりする毎日だったと思う。夫の転勤を機に、郡部からこちらに転勤し、違った分野(特殊学級担任)を担当し、後半10年は、悩みの日々は同じでも一人一人の子どもを見つめられ、私には向いている分野なのかなと思えるようになった。6か月の研修もひとつの転機で他職種の方々と出会い、障害児教育を支える様々な方々の話は貴重な経験だった、今でもその方々と勉強会を続け自分自身の視野を広め、専門的な知識を身につけることもできている。10年前の自分には想像もつかない私が今ここにいる。「これからの10年何があるか分からないよ」と言いたい。知りたい、深めたいと思ったとき手を差しのぼすと、きっとどなたかが導いてくれると思う。  
(小・女)

・子どもたちの言い分が違って事実がつかみにくい場合、中身にもよるが、あまり深追いしないことにしている。双方の言い分を認めつつ周りの状況でなんとか判断し、たしなめたり、励ましたりし

ている。  
(小・女)

・銀行勤めの弟から「教員なんて暇な職業だよ。早く帰れるし、年がら年中休んでるよね。」とよく言われる。我々はこんなことを言われるためにこの職業を選んだわけではないし、そういわれること自体悔しい。しかし、社会一般的に教員は、いまだにそう見られているのは事実である。そう言われまいとがんばっている面もある。一日一日を精一杯生きていけば教員という仕事は、もっと輝きを増す。他の職業とは比較にならないものだ。その答えは“人を育てる”ということだ。重要な役割である。自分自身を先ず誇れる人物にしよう。  
(中・男)

・10年目ごろというのは、そろそろ学校内での仕事も大きな役割を任せられ期待される頃だし私生活でも小さな子どもを抱えて子育て真最中という人もいて、時間がいくらあっても足りない頃だと思う。でも、そんな時だからこそ、職場の仲間と日々会話したり、一日のほんの隙間のない時間に、仕事に全く関係のない本を読んだりという「ゆとりの時間をもつ」ことをお勧めする。何も期待しない所に意外と息詰まっていることへのヒントがあるという場合もある。そうすることが心の拠り所となりつつある。あとの10年も今振り返ればあつという間だ。忙しさに流されることなく日々を楽しく過ごして欲しいと思う。  
(小・女)

・子どもたちの成長について、長期的な視野に立って見る。自分の理想とする生徒像、人間像を持つこと。後輩を育てることは、自分を磨くことにもつながる。初任の頃、先輩からの貴重なアドバイスは有難いものだ。今度はそれを後輩に。

(中・女)

・職場の人以外との交流を大切に、子育てを通して随分自分が変化して、ものの見方に余裕が出てきた。自分を豊かに育てることが、自分に楽しみをもたらしてくれて、仕事にも大きくプラスになった。

(小・女)

・なるべく早く、全学年の担任を経験してほしい。特に、男性教員は小学校の原点である 1 年生を。

(小・男)

・「学校」と言う狭い範囲でなく、広い社会を経験する。

(中・男)

・時には自分だけの授業を組み立ててみるのもいいのではないかな。例えば、鉾やモッコなどの道具を持って校庭に行き、時間をかけて先人の大変さを体験させること。(小・女)

・生徒を指導していくには、まず自分自身を常に研鑽していく必要がある。不易と流行をしっかりと考えて指導していくとよいと思う。生徒を含め同僚の先生、文献からいろいろなことを学び取捨選択しながら自分のスタイルを確立していったほしい。決して忘れてならないのは“まず、生徒ありき”と言うことを常に考えて取り組んでほしい。

(中・男)

・「叱るときは雷のように叱り、後はケロッと忘れてしまう。」といいかなという感覚が身に付き始めたのが 10 年目頃だった。教員も役者でなければ。

(中・男)

・保護者との心の交流を大切にする。(小・男)

・ある校長から教えていただいた今でも大切にしている言葉を紹介する。「理にして温」道理や理屈

が通っていないけれども、それだけでは足りない。優しさも必要だった。そんな風に反省することがあった。また、誰のための、何のための道理だろうと考えさせられることもあった。

(小・男)

・生徒はかわいいと思うこと。・その子の将来を考えて。正しい、美しい、相手を尊重した言葉遣い。先生は先生。基本的集団生活のルールは守らせる。

(中・女)

・毎日の仕事に追われ、将来のことをゆっくり考えることは難しいかもしれないが、これからの教師としての自分の生き方をじっくり考えることが必要だと思う。

(小・男)



# 仙台市小・中学校20年経験者教員への意識調査

教員としての充実を目指して、10年経験者へのアドバイスを

## 仙台市小・中学校20年経験者教員の皆様へ

本調査は、平成14年度本センターにおいて実施した調査研究「10年経過教員への意識調査」をもとに教職経験20年を経過した先生方を対象に、教員としての力量向上の方向性を探るために「10年経験者へのアドバイス」という形で考えをお聞きするものです。つきましては、該当する番号を□に最もあてはまる順から記入していただき、その他についてはそれぞれお書きください。同封の返信用封筒で9月12日までご返送くださいますようお願いいたします。

調査結果は平成16年3月発行仙台市教育センター教育研究紀要「教育はいま」で発表する予定です。ご多用のところ誠に恐縮に存じますが、ご協力よろしくお願い申し上げます。仙台市教育センター教職研修班 調査研究

- \* お書きいただいた内容をそのまま紹介させていただく場合があります。
- \* 紙面が足りない時は裏面に質問番号を明記のうえご回答ください。

校種 小・中 主な校務分掌 性別 男・女

## I あなたのこれまでの歩みを振り返ってご記入ください。

### ◇質問1 自己研修

あなたの自己研修は、主にどのような方法で行ってきましたか。

- 1 校内研究 2 文献研修 3 教育センターの研修会参加 4 その他の研修会参加 5 校内の先輩同僚の助言  
6 その他( ) 7 特になし

### ◇質問2 変化の契機

教員としての自分の在り方に影響を与えたと思うことは何だと思いますか。  
(最もあてはまる順に上位3つまで選んでください。)

- 1 管理職や同僚教員とのかわり 2 児童生徒の変化 3 他校種の経験 4 自分の健康上の理由  
5 家族の健康上の理由 6 生活環境の変化(結婚や出産など) 7 社会体験 8 長期研修  
9 校務分掌の変化 10 その他( ) 11 特になし

### ◇質問3 教師としての自分の支えや励みになっていること

これまでの歩みを振り返って、教師としての自分の支えや励みになっていることがあればその一つをお聞かせください。

### ◇質問4 悩み苦労したこと、解決した経験

これまでの教員生活において一番苦労したこと、悩んだことは何でしたか。また、その問題にどのように対処しましたか。

## II あなたの現在、これからのことについてご記入ください。

### ◇質問1 能力

あなたは教職20年を経験して10年経験時と比べてどんな力がついたと思いますか。  
(最もあてはまる順に上位5つまで選んでください)

- 1 学習指導 2 子ども理解 3 学級経営 4 学年経営 5 生徒指導 6 教育相談 7 学年・学校行事等の企画  
8 部活動等課外活動の指導 9 保護者・地域・外部機関とのかわり方  
10 その他( ) 11 特になし

### ◇質問2 仕事への満足

(1) あなたは今、教員としてご自分の仕事に満足していますか。

- 1 かなり満足 2 満足 3 やや不満 4 かなり不満

(2) かなり満足、満足と答えた方に伺います。その理由は何ですか。

- 1 責任ある仕事で達成感がある 2 自分に向いている 3 適度な仕事量である  
4 その他( )

(3) やや不満、かなり不満と答えた方に伺います。その理由は何ですか。

- 1 やりがいを感じない 2 自分に向いていない 3 仕事量が多すぎる  
4 その他( )

### ◇質問3 現在心がけていること

あなたが常に心がけていることはどんなことですか。(最もあてはまる順に上位3つまで選んでください)

- 1 職場でのリーダーシップを発揮する 2 創造的に少しでもよりよい仕事に責任をもって取り組む 3 規律ある生活  
4 課題をもって自己研修に進んで取り組む 5 自己管理(健康管理も含む) 6 若手教員を育てる  
7 先輩の意見を聞きながら仕事を進める 8 学校運営にあたって建設的な意見を職員会議で提案して実践する  
9 学校の進むべき方向性を校長の言動からくみ取り、自分の仕事をその方向で進める  
10 自分の仕事ばかりでなく学校全体のことを考える 11 職場内の人間関係を大切にする  
12 その他( ) 13 特になし

### ◇質問4 教育上の課題

あなた自身が今、早急に対応しなければならない教育上の課題は何だと考えますか。(最もあてはまる順に上位3つまで選んでください)

- 1 教科の指導と評価 2 開かれた学校づくり 3 教育相談 4 情報教育 5 学力低下  
6 家庭や地域社会との連携 7 総合的な学習の時間 8 学級経営 9 不登校対応 10 心の教育  
11 健康教育 12 部活動 13 外部評価 14 その他( )

### ◇質問5 役職や校務分掌

あなたがこれから就いてみたい役職やもちたい校務分掌は何ですか。また、その理由は何ですか。

例：教育行政職、管理職、教務主任、学年主任、学級担任、研究主任、生徒指導主事(主任)、教科主任、他

理由

裏面にどうぞ



教育研究紀要Ⅰ

教育は いま

第11号

発行日 平成16年3月31日

編集・発行 仙台市教育センター

所長 目黒保伯

所在地 〒983-0825

仙台市宮城野区鶴ヶ谷北一丁目19番1号

TEL 022-251-7441~3

FAX 022-251-7486

Web ページ <http://www.sendai-c.ed.jp>

代表 e-mail [info@sendai-c.ed.jp](mailto:info@sendai-c.ed.jp)

